

506

137



始



B 242

506-137



曲戯

城

主

ピクトル、マリー、ユーゴー作
福士幸次郎譯

冬夏社藏版



解題

城主 (Burgnaves)

一八四二年作。一八四三年フランセイに上演。作としては傑れたもの一つであるが、丁度クラシック派復興の時に當つてゐたので、失敗を招き、遂ひにユーゴーはこの作を最後として劇壇を退いてしまつた。彼は序文に斷つてゐる通り『人の理智に眞理を與へ、靈魂に美を與へ、感情に愛を與へ』而して『觀客の思想を豊富にする』といふ意圖であつただけけれど、舞臺に上ほして一夕の觀物とするには、構想が餘りに雄大に過ぎて、倦怠を感じしめる恐れがあるのであつた。併し詩的な美しさと、豪壯な概念と、センセイショナルな恐怖とは、この作を充分に興味の豊かなものとしてゐる。

アンゼロ (Angello)

一八三五年作。テヤトル・フランセイに上演せられた。エルナニの時ドナドールを演じたマールスが、ラ・チスベに扮し、ドルヴァルがカタリナに扮して、非常な成功を勝ち得た。併しこの成

功は脚本がいゝからとか、俳優が妙技を揮つたからとか言ふ事に起因するのではなくて、單なる「好
 奇心からの成功」であつたらしい。一般にはマイルスがカタリナに扮し、ドルヴァルがラ・チスベ
 に扮する事と豫期されてゐたのに、マイルスが競争者に對する例の嫉妬から、ドルヴァルの成功
 を妨げやうとして、一般の期待の眞反對の役割を演じる事となり、それが偶然にも観客を呼ぶ原
 因になつた。だから最初の十二三回は受けたけれども、次第に客足が減じたため、三十六回で打
 ち止めになつた。

(終)



城主

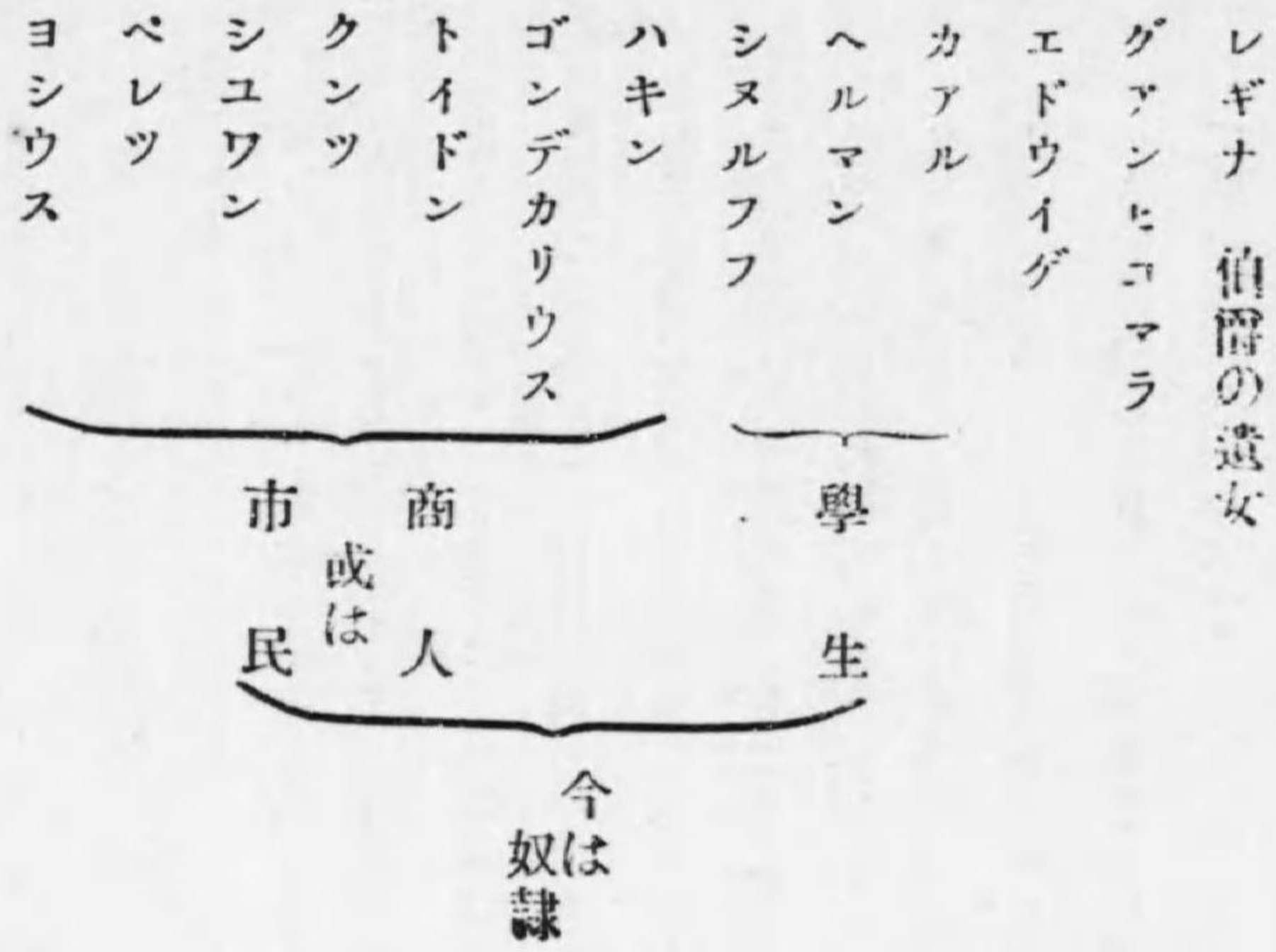
福士幸次郎譯

登場人物

ヨブ ヘツベンヘツフの城主
 マグヌス ヨブの子、ワルデツクの城主
 ハットトオ マグヌスの子、ヴェロナの侯爵、ノオリツヒの城主
 ゴルロア ハットトオの子(庶子)、サレケの城主
 フレデリツク、ホウヘンシユタウフエン
 ゲルハルト公 チユリンダの領主
 ギリサ ルサスの國境の主
 ブラトン モラヴィヤの國境の主
 ルプス モンの伯爵
 カドウアラ オケンフェルの城主
 ダリウス ラアネツクの城主

城砦の隊長
 兵一人

場所 獨逸ヘツベンヘツフ城内、時は千二百……年



序 幕

祖 父

ヘツベンヘツフ町代々の領主の肖像ある古い畫廊。この畫廊は圓形なる形をなし、大天守閣 周邊にくり
 擴げられたるものにて、東西南北四點にある四つの大いなる戸口により、城の他の方面と通ず。幕上ると
 共に、一巡もとの場所にかへる畫廊の一部目に入り、天主閣のまるき壁のや後に没し去るが見ゆ。左手に
 は四つの大いなる戸口の内一つ、右手には天主閣内部に通ずる高くして大いなる戸口一つ、三段 階段を
 控え上方にあり、その端近に仲仕切りの戸口一つ並ぶ。正面には一面の迫持作り、低き柱、奇異なる柱頭
 の羅馬風の屋蓋散步場、第二層(舞臺實際に使用)を支へ、畫廊とは六段の大階段にて相通づ。この散歩場
 の大いなる迫持揃への建物を通じて、空と城の殘餘の部分見らる。その内城中最も高き 塔には大いなる
 黒き旗かゝり、風に飄れり。左手大いなる二枚戸の傍らには赤地のステンド・ガラス板を穿 たる小さき
 窓。その窓の前には安樂椅子一脚あり。畫廊は一見荒廢と人氣なき觀あり。石造の壁、丸天井は、消えかゝ
 れる壁畫のあと見ゆれど、雨漏れの爲め縁に變じ微生えたり。畫廊の壁間鏡板にかけられたる畫像は、總
 て壁の方に表面を伏せられあり。

幕揚がれば夕迫れる瞬間なり。舞臺正面の散歩場、迫持作りの間より見ゆる城内の一部は、未だ日中なれ
 ども舞臺内部にひかり輝き、照り映ゆる如く見ゆ。城の北の方面より喇叭小喇叭の音聞え、又間を置きて
 盃の音と共に、高らかなる聲にて歌唄ふ聲聞ゆ、更に前方にては鐵片のがちややく音聞え、鎖に繋がれた
 る一群の人、此の場より見えざる散歩場内を往來し、あるものゝ如し。
 黒き顔覆ひにて半ば面をかくし、灰色の襦袢の袋を着、腹と素足には二重の鐵環、頸のめぐりには鐵の頸
 環を穿めたる鎖につながれし老婆唯だひとり、大いなる戸に倚りかゝり、彼方廣間の喇叭の音と唄聲に耳
 傾け居る體。

第 一 景

ギユアンヒユマラ唯一人。物音に耳をすます。

外で唄ふ聲

國に騷動のあるときは、

吾れ等に總て力あり。

——市々とても何のその、

國王とても何のその。

主 城

御城主殿は富み榮え、

恐れ惑はぬものはなし。

——男爵の面々よ、法皇とても何のその、
皇帝とても何のその。

吾れ等は強し勇まし、

鐵と火により支配せよ。

御城主よ、惡魔であらうと何のその、

神であらうと何のその！

通常喇叭と小喇叭の音。

ギユアンヒユマラ お殿様がたは騒いで居られる。宴會はまだなほ續く。

と舞臺他の方面を見まもり、

夜の捕虜共は又鞭の下で夜の明け方から働いてゐる。

と耳をすまして、

彼處では大酒宴の音、此處では金鎖りの音。

と右手天守閣 入口に目を据ゑて、

彼處では父親や祖父が幾冬の苦と、吾がした一切の事とを負ふて、ほの昏い其の足跡を思ひ通り、
その吾が一生 祖父も加へて思ひ廻し、産みの子ほどには空怖しい事もしてないけれど、ひとり淋

しく此の誇らかな高笑ひを離れて、自分々の惡業に思沈んでゐる。この城主達の榮えといふものも、今日が日まで大したもののさ。國境の侯も、威光並びない伯も、ゴスの諸王の息子である公も、この衆の前では對等に首をさける。その城は何處も彼も喇叭と歌を叱りつける聲ばかりで、この世の中に傲然と立ちはだかる。殊に燃え上る眼をした強盜共、あの百千の兵隊共は、弓、槍、劍と身を固めて番をするのぢや。でも怖らしい此の窟をあらゆるものが護り固めるその中で唯だひとり、力並びないこの城の片隅に女が、しかも年老いた女が、誰れ一人知るものもなく、神には膝ついて祈りをし、哭き悲しみ、足には鎖、首には環金、襦袢をさけて、顔覆ひをして、とある奴隷女が身を引きづて生きてゐる……だがお殿がた、慄然とおし、この奴隷女はお前達の憎惡の的なのだよ！

と女は舞臺正面に退き、散步場の踏段へ上る。右手の廊下よりは鎖に繋がれ、乃至二人宛鎖にて結ばれし奴隷の一隊、手には丁字鋏、鋤、鎚等を携へて入り来る、グアンヒユマラは散步場の柱 一つに凭れ掛り、物思ふさまにて之れ等を見まもる、この者共の以前の職業は、捕虜の汚れたる服装なれど、なほ識別さるゝ所あり。

第二景

クンツ、トイドン、ハキン、ゴンデカリウス(平市民と商人、髯灰色)、ヨシウス(老兵)、ヘルマン、シネリフス、カアル(ボロイニユ大學とメエヤンスの學校の學生)、ジユワン或はジユエノン(リュエバツク市商人)、捕虜の道中は學生は學生と、平市民は商人と集り、老兵は唯だ一人といふ如く別々に群れをなしてゐる。

として進み来る。年老いたるものは疲労と苦痛とに取挫かれし體あり。この景と次ぎの二景の間、近き廣間の音楽隊と唄聲は終始時を置き聞けり。

ドイドン (携へたる道具を投出し、天主閣へ通ふ二枚戸の戸口前なる石の踏段に腰かけつゝ) これでやつと休みの時が来た。おゝ、疲れるこつたな!

クンツ (鎖を打振りながら 本當によ、おれも以前は自由で金もあつた。ところが今は!

ゴンデカリウス (柱に背をたてかけて) 悲しいこつた哩。

シニユルヒユス (今散歩場を静かな歩調にて通り過ぎるギユアンヒエマラを見送りつゝ) あ、婆さんが一體誰れに目をつけるんだか、ひとつ心得て置きたいもんだな。

シユワン (シニユルヒユスに向ひ低く) この幾月か先き、彼の婆さんはサン・ガルの町の商人と一緒に、この不信心の醜類共、城の手のものに取摺まつたのよ。それだけの事しかおれはもう知らぬ。

シニユルヒユス そんな事聞いたつて何にもなりやしない。唯だおれ達が繋がつてるのに、彼ら女は免されてゐる。

シユワン 彼れは孫の中の總領、ハットオを半死の熱病から癒したんだよ。

ハキン 城主のロロンは何日か蛇に咬まれた。それも彼の女は癒した。

シニユルヒユス そりや本當かい?

ハキン たしかに彼れは魔法使ひとおれは思ふよ。

ヘルマン ヘッ! ありや氣狂ひだよ!

シユワン 彼の女には數知れぬ祕密がある。何のロロンやハットオ位のものぢやないよ。エロワや、クヌドや、アツオのやうな、此の世で鼻摘みする癩病やみも癒した。

トイドン あの女は何かしらん密々の仕事をしてるのだよ。いゝかね、あれに身を投出してその三人の癩病やみと結托して眞黒い金み事が幾つかあるのだよ。彼の連中が其方此方の隅で一緒になつてる事は、よく目につく。

ハキン 昨日の例の墓場、つまりこの癩病人連中内で仕事をして其の古巢に四人の者がゐて、その連中のうちで仕事をしてゐた男のもの。三人は棺を作り蓋の釘を打つてゐる。女は袖をまくつて腕を振り小供を眠らせる時、咀ふやうに低い聲で歌を唄ひ、死人の骨で媚薬を調合してゐる。

シユワン その晩、其奴等は彼方此方迷つて歩いた。星のよく出た夜、假面を被つたその三人の癩病の男、顔覆で面を包んだその女、クンツ、そいつは凄いもんだつたよ。おれは寝なかつた。だから見た。

クンツ おれは何としたつて此處、この胴殻屋臺のうちに、何かしら隠れ家を奴等は持つてると思ふがね。何時かもよ、その癩病やみの連中と袋を着た婆さんとが、悲しげな忿々した様子で、広い壁の下を通つてゐる。おれは眼をそらした。奴等の姿は見えなくなつた。あいつ等はこの壁の中へ潜り込んだのだ。

ハキン その魔に憑かれた三人の癩病やみ、之れとおれ達が一緒にゐるのは、どうもおれには業が煮える。

煮える。

城

主

クンツ　もと　奴等は『消滅の洞』の傍にゐるものだねえ、おい。
ヘルマン　ところで其の癩病共は自分を癒してくるので、あの女は諾々いふし、又さうしたつて満更無理もない。それはそれで解つたことよ。たがあの癩病共や、腹の黒いハットのかはりに、なあクンツ、この城内では是非癒して貰ひたいのは、あの優しい嬢さん、ハットの約嫁、つまりヨブ老人の姪御さんだかね。

クンツ　レギナかい。ありや何とかならぬものか知らん。あの娘はあれや天の使ひだよ。

ヘルマン　ところがそれが今死にかけてゐるのだ。

クンツ　そり、悲しいこつた。さうとも、さうとも、ハットにとつちや慄とする事だから、呼吸もつけない惱みの重荷が、あの娘を殺してゐるのだよ。毎日々々遠くへやつてゐるんだよ。

トイドン　可哀さうに！

ギユアンユマラ舞臺正面を横切り行く姿再び見ゆ。

ハキン　又あの婆が出てうせた。本當に彼れを見ると慄とする。彼奴の様子つ振り、肉食鳥の持つしほらしさ、時には澄みわたつて凄くなる深い目つき、その底知れぬ智慧、何や彼やおれは彼奴のものは怖くなる……。

ゴンデカリラス　恚んな城なんぞはどうにでもなつて仕舞へ。

トイドン　おい頼むよ、静かにしてくれ。

ゴンデカリウス　でも此の畫廊には誰れも來やしない。此處の主人方は酒宴で、おれ達とは遠くに

離れてゐる。話は誰れにも聞えはしない。

トイドン　（聲をひそめて、天守閣の門を指さし）　でも奴等がたつた二人で彼處にゐるよ。

ゴンデカリウス　といふと？

トイドン　あの親と息子の老人二人よ。だから静かにおし。おれは乳母のエドウィツヘから聞いて來たが、此の門をあけて此處へ這入つて來るのは、あの親子連れとお祈禱する爲めやつて來るレギナさんと、あの若い傭士官、つまり此の過ぐる年へツベンペンヘツフの城で彼をとる爲めやつて來て、其の若い所と忠實な所が又年とつて仕置きを食つたあのお祖父さんの氣に入つてゐるオートベルトといふ男、之れだけだといふ事だ。ところで今は日蔭の身の老人は、向ふの洞に唯だ一人暮らしてゐる。つひ近頃まで世の中を下目に見下して、この吾が出を城郭に幾十の伯爵、幾十の公爵、その子、その孫と五代の間、宛ら王様のやうにこの極悪者の氏の長者は取巻かせてゐるものだが、年を取つたら其れも打碎かれてしまひ、今は彼處に遠のけられて、唯だ一人あの錦い天蓋のもとに坐らせられてゐる。ところで息子のマイニユス老人は槍を握つて傍に立ち、このまる何が月といふもの、口一つきかず控えてゐるのよ。そして之れだ夜になると蒼い顔をし、打怖れて、とある隠密の廊下へ這入つて行く。この鍵を持つてゐるのは彼の老耄の他にはない。あれは一體どこへ行くの！

城

主

シユワン　あの老人は何かわけの解らぬ事で苦しんでゐる。

ハキン　息子共が悪の天使のやうにのしかゝつてゐるのよ。

クンツ　そりや彼奴が酷い目に逢つたつて皆因果應報さ。

ゴンデカリウス 結局それだけいゝのよ。

シ・ワン 彼の人にはずつと年とつて出来た末の子が一人ある。それを彼の人には可愛がつた、つまり人間といふものは妙に出来たもので、灰色の髯のものは金栗毛の頭を何時でも可愛がるものさ。ところが一年経たぬ間に此の子は攫はれた……。

クンツ 一人の埃及の女にね。

シニユルフユス 麥島のふちの所でよ。

ハキン おれの聞いたところでは、山の頂邊に打建てられたこの城は、昔大した罪を目にした後、久しく打棄てられて過して来たが、其の後チウトン方の命令で打壊されたものだといふで、何年と経つ内忘れられ、消えほろびてしまつた或る日のこと、もとの城主なる妙な人間が、吾が名假面でも變へたがやうに變へて来て、此の地へ再び戻つて来た。その時以來あの館の上に永遠の世かけて、陰氣なああの黒い旗が翻された。

シユワン (クンツに) おい、お前は其の圓い塔の根もと、谿間で唸く流れの上、濠にのぞんで一つの狭い窓が捻まがつて凹んだ三本の格子を見せて控えてゐるのを、目についた事があるかい。

クンツ それは『消失の洞』だ。それは今しがたおれは口に出した。

ハキン 陰氣な穴さ。何でも話で聞くと彼處にや幽霊がゐるといふ事だ。

ヘルマン へん、馬鹿々々しい。

シニユルフユス 壁に血が往昔走つてゐたといふものもある。

クンツ まあ本當の事は誰れも彼處へは這入るわけに行かないのさ。入口の祕密の錠がなくなつた。見えるものと言つては彼處の窓ばかりだ。生きた人間では誰れ一人這入つたものがない。

シユワン でも晩なんかあの岩の圭角を行くと、何時の夜だつて、誰れか歩くのが聞える。

クンツ (恐怖の様に) そりやお前本當かね。

シユワン 確かにさうよ。

トイドン クンツ、其處らで切りあけろ。黙つてゐた方がおれ達は剛巧だよ。

ハキン この城は何處も彼も眞黒い不思議が彼方にも此方にもある。おれは此處にゐてもそれは皆心得てゐる。何故つておれには其んな風に皆見えるからね。

トイドン だが何か他の事を話すとしやう、どうだい、何が此の後起るにしたところで、そんな事は神でなくつちや解らない。

と舞臺前面に行はれつゝある事に未だ仲間入りせざる一群の人に眼を向ける。之れ等の人は舞臺一方の隅にて途ある青年學生の語る事に甚しく注意し居る如く見ゆ。

おい、カアル、お前のその長物語も止めておくれよ。

カアルは舞臺の前面に来る。總ての人は相寄り、青年と老人の各二手の人群れも、相交つて一般の話に耳を寄す。

カアル 宜しい。だが此の事は一つ了見してくれ、つまりこの事は世間一體に知れ渡つてゐる事だ。騒ぎの起つたのはこれは前の月のことだ。併しそれが世に出たのは……。

と暫時吾が記憶のなかに探し求むる體にて。

確かに此の二十年前、つまり十字軍でバルベルスが死んだ時以來のことだ。

ヘルマン　　かも知れぬ。その頃お前のマクスは恐しく殺風景な所にゐた。

カアル　　凄^{さい}い所、膽^{たん}つ玉の潰れる場所さ、ヘルマン。禍々^{まが}しい仰々しい鴉の群れは、山のぐるりをのべつ飛廻つてゐる。晩になつて闇が之れを取込めると其のぞつとする叫び聲が、不敵な獵師をもロオテルンまで逃げ出させてしまふ。見る目も怖^こい岩の額^{ぬか}には、水の滴が落ちて、まるで恐しい形相をしたゝる涙のやうだ。陰氣なぞつとする恰好の窟^{くわ}は、谿間に口を開いてゐる。伯爵のマクス・エドモンはこの古い山の暗の奥所に這入つて行くのを怖れな。で、此の埋葬の洞々^{ほら}に何の苦もななく踏込んで行つた。又進んで行くのが常であつた。青白い日の光は暗を輝かしてゐる。と、不意にこの地の底の圓蓋^まのしたで一と目見てもぞつとする老人が劍つきの帯を緊め、紫の着物を着、冠を載き、右手には王の笏杖、左手には地球儀を持ち、衣裳の襷には兩足をくるんで、青銅の大椅子に前屈みになつて身動^{みぶ}ぎ一つせず坐つてゐるのが闇がりの中に見える。溶岩^{ようがん}のかけらで作へた卓子に腕を突いてゐる此の人。いくらマクスは強くても、又猛士^{つは}ジャン王のもとで闘つたにしても、この豪者^{ごう}の老人の前では思はず顔の色がなくなり、草^{くさ}薦^{せん}かづらや苔の下へ逃げ出したくなる。何故と言つて之れは皇帝フレデリック・バルベルスだからである。ところで彼は睡^ねつてゐる——その睡りも荒くれた膽の汚れる寝様である。往昔^{むかし}は黄金色の鬚も、今は雪白になり、石の卓子の縁^りを三廻りまはつてゐる。その長い白い睫^{まつ}は、そのたるんだ臉^おを塞^ふしてゐる。その朱色の盾には衝^つかれた心の臓が血

を染めてゐる、そして睡つてゐる間も氣が落着かぬか、時々吾れ知らず劍^{けん}に手をかける。その魂は今どんな夢でもつて充^みされてゐるか、其れは誰れだつて知りはしない。

ヘルマン　　それで皆か。

カアル　　いゝや、まあもちつと聞け。で眞闇な洞の路を來たマクス伯の足音で、その人は目を醒ます。で、その憔悴^{せうすい}れた禿けた頭をつと上げて、重い曇つた眼を再び見ひらき、マクスの上に鳶色の眼を据ゑ、『騎士よ、鴉は未だ飛び散つてゐるかな』といふ。マクス・エドモン伯は『いゝえ、陛下』と口事をする。この言葉で老人はその儘何も言はず蒼^{あせ}蒼^{せう}い顔をさける。恚^いうして恐怖で胸一杯のマクスは、この皇帝の幽靈が又寢^ね込^こむのを見る。

カアルが斯く物語る間に、捕虜は總てその周圍に群^ぐり來り、常に増し加はる好奇の情もて之れを聞く。

ヨシウスはバルベルスの名の語らるゝを聞くや、その前列の者の中に割つて入る。

ヘルマン　　(哄笑して) いや、面白い話だなあ!

ハキン　　(カアルに) でも若し傳聞^{いひつたひ}が本當とすれば、フレデリックは全軍の目の前で、シドニウス河で溺^{おぼ}れ死^じんだ筈だ。

ヨシウス　　王は流れのなかに見えなくなつた。おれは其の場に居た。おれは何も彼も残らず見た。それは恐しくも又どえらいものだつた。その昔話はおれの心から決して拭^ぬぎ去^りられる事はあるまい。ウイッテルバッハのオットウは兼てバルベルスを嫌つてゐるが、主人が波のまに／＼に流れて行き、土耳其方^{がた}が投槍^{たうしやう}を彼をねらつて投げつけるのを見ると、このバヴァリヤの大官、ウイッテル

スバツハのオットウ、河の中へ吾が黒馬を乗り入れて、火のつくばかり降り注ぐ打撃、雨を一人で受け、『先づ皇帝の救けに取りかゝれ』と叫つた。

ヘルマン　ところが其れも無駄だった。

ヨシウス　随分手練れな者共も走せ廻つたが、無駄よ。六十三人の兵士と二人の伯爵が、皇帝を救けようと思つて死んでしまつた。

カアル　だが其れで以て帝の姿がマルバスの谿に出不いといふ證據にならぬ。

シユワン　だからおれは恁んな事を聞いてゐる——つまり物語といふものは際限のない代物だが、席は奇蹟のわざで難を免れて遁世者となりすまし、その後も永く生きてゐたのだ。

ゴンデカリウス　後生だ、どうぞさうあつてくれ。そしてこの帝國が汚れるかも知れないと言はれてる千二百二十年の年、その一か八かの年を前にしてゐる獨逸を來て救つてくれ！

シユワン　もう何處でも此處でもおれ達の偉大は最後の呼吸を引取つてゐる。

ハキン　で若しフレデリックが生きてゐて——さうさ、一つさう思つて見るんだ——此のおれ達といふ彼に對して忠良な民共を、此處から引張り出してくれるものとすれば、その爲め諸城主を相手にまた戦争を始めるやうになる。

クンツ　そこで世間はおれ達奴隷と同様に苦勞する。獨逸には主人がなく、歐羅巴には轡がない。

ハキン　麵麩は足らぬ。

ゴンデカリウス　ラインの邊では彼方此方惡黨共の黒い蠢々が生れ出す。

クンツ　その中で選舉侯共が陰謀を濃厚にしてゆく。

ヘルマン　コロイニユの市はスヤブのものだ。

シユワン　エルフルの市はブリュンスウィクのものだ。

ゴンデカリウス　メエヤンスの市はベルトルドを選ぶ。

クンツ　トレエヴはまたフレデリックが欲しい。

ゴンデカリウス　兎や角してゐる内皆亡びてしまふ。

ハキン　市々は鎖される。

シユリン　旅をしたいにも武装した一連の者が随いてくれないと旅も出来ない。

カアル　吝な暴王達に民の者共は取りひしがれる。

トイドン　四人の皇帝——こいつは多過ぎる。そのくせ之れでも事が足りない。王といふものは、

なあカアル、一人の方が四人よりすつといふではないか。

クンツ　取組み合ふにも、闘ふにも、一本強い腕があればいい。ところが悲しい事にバルベルスは

死んぢまつた——立派に死んぢまつた、なあシユワン！

シユワン　（ヨシウスに）で、シドニウスぢや其の後皇帝の死骸が出たのかい。

カシウス　彼がその儘攫つて行つた。

トイドン　シユワン、お前は彼の人の誕生に言はれた豫言を知つてゐるか。——『この子の法律は萬人が何時か従ふ。死んだものと二度思はれ、また二度蘇へる。』ところで豫言といふものは人は冷した

り氣にとめなかつたりするけれど、初めの方のは如何やら仕終せた様に思はれる。

ヘルマン　バルベルスの事となると話の盡きない代物さ。

トイドン　だがおれはおれの知つた事をいふ、千百九十年頃、おれは所はブラアグの市、途ある土

牢内の病院で、シュフロンダチといふひどく老込んで世間では耄けたものにしてゐるダルマチアの貴族に、逢つたことがある。これが向ふみずに誰しも突走つて歩く若い年頃、バルベルスの父、つまりフレデリック公の家でお附きの勳爵士だつた事を聲高々と牢内で言つてゐた事がある。公爵はこの生れたての子に言はれた豫言で膽を潰した。おまけにこの子は二重の戦ひの爲めに育つたやうなもので、父には獨逸方のジベリンを受け、母方にはゲルフの法王黨を持つてゐる。この二手の黨派は何時か此の子を吾が手のものと喚ぶかも知れない。そこで父親は先づ之れを或る塔の上におけ、あらゆる人の眼を隔て、見えない様にして置き、及ぶ限りの手を盡して秘め隠すかの様であつた。でもそれでも足りず後で他の隠れ所を一つ探り當つた。つまり極く高い家の娘と關りあつて、公は私生兒を一人持つてゐた。この私生兒は山の中で生れ、自分の父がスウアアの公爵で、戦では總帥の伯爵である事などは知らず、唯だオトンといふ名でのみ父を知つてゐた。善良な公爵もこの息子には吾が素生を包んだといふ。この私生兒が世つぎの主となりたがる事や、公爵領の一とかけを吾が領地となさんとするのを懸念したのだ。ところで、この私生兒はその母方の手からラインの鼻先の城下町をひとつ貫つて、その法網潜りの城、鷲の巢、悪黨の巢窟たるもの、城主たり、君主であつた。之の隠れ所は憐れな父には屈竟な心丈夫なところに思はれた。公は行つて城主に逢ひ、

彼を抱擁め、假りの名をつけて此の幼兒に預け、「息子よ、此處にお前の弟が居る」と唯だ一と口をつたきり、直ぐ其の場を出立した。ところで如何いふ運命がやつて來たとて之れには手が出せない。公はたしかに吾が子と吾が秘密を巧く始末し終ふせたと思つた。何故と言つて幼子そのものが吾が身の上は何も知らないのだ——で若いバルベルスは恚んな事にされて城主の許で二十歳になつた。ところで此處でどえらいことになる。それは或る時の事、茨の中、斷岩の根もと、城塞の壁を洗ふ急流の縁に當るところで、未だ呼吸はあるが血塗れになつた丸裸の二つの軀、つまり夜分城内でこつそりと短剣で刺殺され、深みを目かけて急流に投げ込まれ、それで未だ死にきらなかつた二人の男、之れを通りがりの牧人共が夜明け方に見つけた。まあ紛れもない奇蹟だ。ところで神が不思議な業でその命を救つてくれた二人の者とは余人でない、一人はバルベルスで他は例のシュフロンダチといふ、唯だ一人こいつだけバルベルスの實名を知つてゐる附添ひの武士だ。二人は一緒に傷を癒した。それからどんな事して行つたか解らないが、シュフロンダチは若者を父の許へと連れて行き、父の公爵はそのお禮にシュフロンダチを土牢へ入れた。でも息子は手許に止めた。その方がまた當然でもあつた。唯だ併し考へとして何時もあるのは此の事件を押し隠して仕舞ふことだつた。彼はその後またと例の私生兒に逢つた事はない。ところで此の父公爵が吾が死のさし迫るのを氣がついた時のこと、公は息子を呼び寄せて、踞づいて十字架を接吻させた。そしてバルベルスはその臨終の床に屈んで、この後になつてよい時があらうと、兄が百歳の齡になるまで、つまり神この事を許し賜はうとも決して此の後、兄の前に姿を見せぬといふ事、復讐をせぬといふ事、之れを

誓つた。そこで例の私生兒は自分の父が公爵であることも、弟が皇帝になつた事も、つひに知らずに死んでしまつたらう。シッフロンダチはまた此の身内の中の祕密に探りを入れると、驚きと戦慄とで眞蒼になる。兄弟の兩人は二人で同じ娘に戀をした。兄の方は騙されたと思ひ、戀を殺し、どんな兇惡非道な惡黨か知らないが其れに娘を賣り飛ばした。買主は之を男同様情容赦もなく鞭へ繋ぎ、オステイの港から羅馬に行く船に縛りつけてやつた。まあえらい事になつたものさ。シユフロダチは『これは皆昔のことだ』と怨ういふ。併し此の男の心の中は混交だ。もうこの上その魂の闇にはその私生兒の名前も娘の名前も残つてゐない。彼は如何して怨うなつたかも知らない、何處でそんな事があつたかも知覚えてゐない。おれは狂人同様に押込められて此の男をブラアグの市で見た。今は其奴も死んでしまつた。

ヘルマン　それで話の終結はついたのでか。

トイドン　それにはおれは怨ういふ意見をつける。若しこれが皆本病の事だとすれば、豫言　當つてゐる。何故と言つてつまりは怨うだ、又さう考へたつて滿更闇雲の事でない。それは一度當つたら、二度目のも當るだらう。バルベルスは若い時死んだものとも思はれたのだ。だから今一遍蘇へるかも知れないのだ……。

ヘルマン　（笑ひ出して）そいつは面白い！ひとつ蘇へつて來る時まで待つて見るがい！

クンツ　（トイドンに）その話はおれは往昔聞かされた事がある。フレデリク・バルベルスはその城ではドナトといふ名でゐた。私生兒はフォスコといふ。ところで其の美しい娘はおれの覚えてゐる所

で　コルシカ生れの娘であつた。戀人同志は或る人目に立たぬ洞で密會した。この誰れ知る者のない洞の人口こそ、二人の楽しい祕密であつた。そこへ或る晩心は嫉妬、手は大膽のフォスコの奴が、思ひがけなくやつて來た、そしてその痛しい唄物語を作りあげた。

ゴンデカリウス　だがフレデリックが王坐の頂邊へあがつてゐながらも、昔吾が愛した女をつひぞ探さなかつたといふ事は、お前の語の一と言葉、一と言葉を本當と思つても、おれの心は皇帝のあの光榮を思合せてひどく悲しくなる。

トイドン　いや、皇帝は探したのだよ。その貴い腕でもつて、三十年もあのラインの惡黨共の巢を穿鑿した。併しその私生子……。

クンツ　あのフォスコの奴！

トイドン　（語り續ける）それが又英吉利方へ仕へる爲め、城下を打棄て、山を出て行つた。何でも人の話では、その後久しく歸つて來た事がないといふ。皇帝は山や森を取巻いた。城を圍んだ。諸城主を滅ぼした。併し少しも手懸りがなない。

ゴンデカリウス　（ヨシウスに）お前は其の勇者の内に居たのだらう。その異教徒其を相手に闘つただらう。どうだ、憶えてゐるか。

城　ヨシウス　あれは其でこそ巨人共の戦争だつたよ。城主達は互ひに力の貸しつこをした。そこで城壁といふ城壁、城門といふ城門、總て此方で取つてしなはねばならぬ。高い所、低い所では打撃の飾をかけ、血の潮をあびせて男爵の殿輩が闘つて居り、そしてその怖い面の下から哄と笑ひ聲を放

ち放ち、油や溶けた鉛をその兜のうへに流させてゐる。外では圍み、内では闘ひ、創では突き、齒では咬まねばならぬ。ああ、あの素張らしい襲撃！結句城は最後に攻め落されて、陰影と煙の中で味方の一軍の上によく崩れ落ちたものだつた、恚ういふ戦争の折りの事よ、或る日バルベルスは顔覆ひの面をかけ、それに冠を載き、唯だひとり塔の脚下で敵の畜生を相手に切結んでゐたが、先方は帝を小さい室へ押しこくり帝の右手に焦傷させた。そこで皇帝はアラウの伯に聲かけて『親友、私は首斬人の手にかけて、この男からこの代は取つてやらうよ』と仰つた。

ゴンデカリウス　その男は掴まつたか。

ヨシウス　いゝや、路を作つて逃げ失せた。その眼底は顔が見えないやうに隠してあり、又皇帝は腕に三つ葉のしるしを残した。

トイドン　(シユワンに) おれはバルベルスが生きてゐると思ふよ、——どうだい。

ヨシウス　おれは確かに死んだと思ふ。

シニユルフユス　でもマクス・エドモンの事は？……

ヘルマン　あれは夢さ。

トイドン　マルバスの洞は……

ヘルマン　お祖母さんのお話だよ。

カアル　だがシユフロンダチの話は全く新光明を投げてくれたよ……

ヘルマン　ふつ詰まらない！始終微かな光がちら／＼漂ふ頭の中で、雲のやうに通り返した幻を見

た熱病やみのそれは夢なんだよ！

兵士鞭を手にして這入つて来る。

兵士　奴隷共、仕事にかくれ！今夜はお客さん方が来て此の館の片面を見舞はれるのぢや。その案内の役は吾れ等の主、ハットオ殿、鎖を引つてお前共を此處であの方の目には入れられぬわ。

捕虜一同は道具を寄せ集めて、點々として二列を形づくり、頭を垂れ、兵士の鞭のもとに去る。グアンヒユマラ高き廊下の上に再び現はれ、彼等を見送る。捕虜の姿消ゆると同時に、大なる入口よりレギナ、エドウイツへ、オトベルト入り来る。レギナは白い着つけ、エドウイツへは老いたる乳母、黒の着つけ、オトベルトは傭兵の隊長の軍服をつけ、短刀と大なる劍を身にす。レギナは極めて年若く、顔色蒼白にして弱々し、歩むも漸々にして宛も久しき前より病み、殆ど瀕死の人の如し、彼女はオトベルトの腕にすがり、オトベルトは又之れを支へ、彼女の上に苦惱と愛に充てる眼を据ゆ。エドウイツへはレギナに従ふ。グアンヒユマラは此の三人の何人よりも見らるゝ事なく暫時彼等を觀察し、その語るを聞き、彼女が這入りし其れとは異なる方より去る。

第三景

オトベルト、レギナ、暫時エドウイツへ。

オトベルト　私に寄つかゝりなさい。さあそしてそろ／＼と行くのです。——それからあの安樂椅子のところに來て、烏渡身を休める。

と彼女を窓前の安樂椅子に導いて、

さあ之れで如何です。

レギナ いけませんわ。私は寒い。身體がぞくぞくする。あの酒宴が悪くしましたわ。

と、エドウィツへに向ひ、

誰れか来ないか見て御出で。

エドウィツへ退場。

オトベルト 何も怖い事はありません。あの衆は明日の朝まで飲むつもりで居ます。だが何だつて貴方はあの酒の坐へ出たのです？

レギナ ハットオが……

オトベルト え、ハットオが！

レギナ (男を制して) 低い聲で仰有い。彼の人は私を縛つてしまつたのかも知れません。私は彼の人と結婚にさせられました。

オトベルト だからその事を御祖父様に訴へ出ねばなりません。ハットオは彼の方を怖れてゐる。

レギナ でも私は今に死ぬのです。そんな事して何になりませう。

オトベルト あゝ何故そんな事を仰有るのです。

レギナ 苦しんで、夢を見て、それから此の世を出て行く。之れが女の運命で、わ。

オトベルト (窓を指さして) あの美しい日を御覽なさい。

レギナ え、夕空が一面に燃えあがつて居ますわ、今は秋なのです。今は日のくれ方なのです、

何處でも此處でも葉が落ちる、木が黒くなる。

オトベルト その葉はまた新に生れ變りませう。

レギナ え。

と空に恍惚と目を放ち、ぢつと見まもり、

ほら、あの眞一文字に行く判りやう！あゝ燕の群れの歸つて行くのを見れば悲しい！あの向ふの果て、黄金に輝く南國さして、燕は行つてしまふのだわ。

オトベルト 彼れもまた戻つて來ます。

レギナ え、でも此の私といふものはあの鳥が戻つて來るのも見られなければ、木の葉が生れかはるのも見られないのだわ！

オトベルト レギナ！……

レギナ 私をもつと窓の傍へやつて下さい。

と、彼女はオトベルトに金の囊をわたし、

オトベルト、この私の財布を可哀さうなあの捕虜達に投げてやつて下さい。

オトベルトは正面の窓の内一つより其の囊を抛る。レギナは依然として外に眼を据える。

え、今日の夕日は美しいわ。その光、——之れが最後の今日の光は、トオヌスの額に冠を置いてゐる。河は輝き、林は華かな光に取りかこまれ、向ふ遠くの村の窓々は一つ残らず焰を浴びてゐるわ。何といふ美しさだらう。何といふ大らかさだらう。何といふ心が楽つきつけられることたら

う。この景色は命と光の大濤たわ……。あゝ、私には父親といふものがない又母親といふものもない。誰れも私を救うことが出来ない。誰も私を癒すことが出来ない。私はこの世に獨りつほちでゐるのだわ。そして自分が死んで行くのを知つてゐるのだわ！

オトベルト 此の世で貴方が獨りつほち！では私は、貴方を愛してゐるこの私は？

レギナ それは夢なのよ。さう、貴方は私など愛してはゐない、オトベルト！夜が身もたけでゐます——あの夜が！で私は行つて其處に陥ると貴方はもう私のことは忘れてしまふ。

オトベルト でも貴方の爲めには、死にしますし、吾が身を永久に棄ててもませう。貴方を私が愛しないといふ！之れは私を絶望させる事です。一年前眞黒いこの獣の巢で、嫉妬深いこの悪黨どもの中で、貴方を私は見た日から、貴方を私は戀しました。私の服はこの數知らぬ悪業に充々た陰氣な城の中で、貴方は深淵のなかの唯だ一つの百合かのやうに、闇の中の唯一つの星かのやうに貴方のかたへと走つたのです。さうです、私はラインの伯の姫たる貴方を、青銅の心のハットオ伯と約束濟んだその貴を、なほも構はず戀するのです。私は何時かと言ふたやうに見るかけもない隊長で、武邊一邊の不明な素生の人間てひよつとすれば水呑百性より劣るかも知れず、どうかすれば王と同じものかも知れない。唯だその私をそつくり私は貴方に捧げます。私を棄てる。それは私が死ぬことだ。貴方がたはこの城内で私の愛してゐる唯だ二人の人です。先づ第一には何より先きに、若し父が私にあつたら其の父よりも先きに、その貴方、——次ぎには、

と天主閣の入口を指さし、

慄然とする過去の爲め人知らぬ重荷に壓られてゐるあの老人。恐しい一族を控えて心優しく猛しく又物悲しい祖父の大殿は、あゝ貴い娘よ、そのあらゆる歡喜を貴方に求め、その最後の救ひ、その最後の焰、その吾が墳墓の國際を明くする夜明けを、貴方に求めて居るのです。ところで此の私といふ運命の重荷の爲頭を垂下けた兵士は、貴方がたを二人共祝福する。何故と言つて貴方がた二人と居れば、私は一切忘れてしまふのです、そして定業の律に結ばれた私の魂は、彼の人と居れば偉大を感じ、貴方と居れば純潔を感じます。貴方には今私の心が總て見える。さうです、私は泣く、それから嫉妬する、苦み悩む！つまりハットオが貴方を見まもつてゐるのを、——何時でも見まもつてゐるのを不意に氣がつく。ところで私は如何する、この私は？押し黙つた心の沸騰の中で、心の臟から額の上まで、吾がありとあらゆる嫌悪と忿怒を見せる禍々しい火が燃え上るのを感じるのです。だが私は自分を抑へつける、でないとも彼も私は打壊してしまふかもしれない。貴方を私が愛さない！戀人、接吻を與へて下さい、さうすると私は貴方に私の血をあける。だがレギナ、司祭に神を愛さないかと言つてやりなさい。頭を抑へつける主のないトスカン市民にその市を愛さないかと言つてやりなさい。海上の船乗りに幾夜の冬を越した後のあの曙を愛さないかと言つてやりなさい。また生きるに疲れて腰掛けにゐる囚人の傍へ行つて、その身を自由にしてやる其の吾が手を愛さないかと言つてやりなさい。だが私が貴方を愛さないとは決して言ふて下さるな。私の綾先が向いて行く暗の中でも、私の足を後から攫つても陥穽の中でも、貴方は私のためには救ひより更なる上、光より更に上のものです、貴方には私は極限がなく、貴方には私は心も亂れる。それは貴方

もよく知つてゐる。おゝ女は本當に何時も酷い。そして男の魂や苦痛をもてあそぶ位には、何の
も女を悦ばせません。だが許して下さい、貴方は打惱んでゐる。あゝ、貴方の前に踞いて貴方の熱
と貴方の氣惑ひを暮らせぬやうにし、貴方に總てを語らせて其の手に接吻をせねばならぬ時、私は
自分の事ばかり語つたのです！

レギナ 私的一生は貴方的一生と同じやうに、オトベルト、惱みでもつて一杯なのだわ。私は何だ
らう？孤兒だわ。では貴方は如何だらう？矢張り孤兒だわ。天の主は私等の同じ苦しみで私等を結
びつけて下さい、私等二人の不幸者を幸福にして下されたのだわ。でも併し……

オトベルト (彼女の前に矢庭に踞き)でも併し私は貴方を愛する。でも併し私は貴方を崇める。でも
併し私は貴方に仕へる。若し貴方が死んだら私も死ぬ。若しハットオが貴方を打嘆かせるやうな事
すれば私は彼を殺してやる。私は又この儘貴方の父上にも母上にも、さうです、その二人の方にな
り代つて私はその誓約を躊躇なく立てやう。貴方の父上は私の腕にある、貴方の母上は私の心にあ
る。

レギナ おゝ優しいお友達！有難うよ。私には貴方の魂が皆見えるわ。巨人のやうに思ひ込み、女
のやうに愛するとは本當に貴方のことね、私のオトベルト、貴方は全くさうなの。でも悲しいわ、
貴方は私を如何する事も出来ないわ。

オトベルト (立上り)そんな事はない。

レギナ いゝえ、駄目よ。私が彼れ之れ言つて貰ひたいのは、ハットオではないのですもの。私の

約婚は争ひもせず闘ひもせず私を掴へて仕舞ふのですわ。貴方とて、その雄々しく、その立派な貴
方とて、之れには打勝てはしなくつてよ。何故つて、私の本當の約婚は、ほら、慕なのです！——
おゝ悲しい。私はあの闇い夜がさし迫るにつけ、この世で一番よいものを二つ持つといふ事になり
ましたわ。つまり一つは主、一つは貴方なのですわ。私はこの私の髪の毛に貴方の手を置いて貰ひ
たいの。すると私はその自分の究極の時の關係に立つて慙う言ふわ。『オトベルト、私の魂は神に捧
げ、私の心は貴方に捧げます』と。——私は貴方を愛するのよ！

エドウィツヘ (這入り来りつゝ)誰れか来ましたよ。

レギナ (エドウィツヘに)では行かう。

彼女はエドウィツヘとオトベルトに縋りて仲仕切りの戸の方へ數歩、行き、その戸口に入らんとする瞬間、
踏止つて、又身をかへす。

あゝ、十七歳で死んでしまふなんて、慄然とする！一緒にゐて愛して幸福に私達は今暮らせるのだ
わ。私のオトベルト、私は生きたい。私の祈りを聞いて頂戴。あの冷たい石の下へ此の儘落さない
で頂戴。死ぬなんて事を思ふと私の身はふるへ上る。私を救つて頂戴、私の戀人。貴方は本當に私
を救つて下さる事が出来るの、えゝ？

オトベルト 何、又癒ります！

レギナはエドウィツヘを伴ひ退場。門は閉づ。オトベルトは其の背後を目もて追ひ、彼女見えなくなるも
なほ、物言ひかくる様。

そんな事はない。そんなに若くて、美しくて、純かでも死ね！いや、私は自分の身を悪魔に
與へたつて、私は誓ふ、貴方は生きるのですよ！

と此時舞臺正面にあつて暫時身動きもせぬゲアンヒユマラが眼に入り、
うん、いゝ所で逢つた！

第四景

オトベルト、ゲアンヒユマラ

オトベルト (ゲアンヒユマラの方へ眞一文字に進み寄り) ゲアンヒユマラ、手を握らう。私はお前に用
がある。さあ、来ておくれ。

ゲアンヒユマラ 暇潰しなことおしでない。

オトベルト いや、私のいふ事聞いておくれ。

ゲアンヒユマラ でも相變らず自分の故國や、家柄のことを聞くのだらう。だが私はそれを知らず、
又お前の名がオトベルトかも、お前の名がヨルギかも知らなかつたら、如何おしだい。裸ん坊で獨
りつほちで食べ物を探して子供のお前に私の出逢つたのは、あれはコルシカにせよ、又モルダヴ
イヤにせよ、私の路浪中お前の瘦せすがれたのは、何の爲めだらう。何の爲めにこの城にお前の
來ることを私は勧めたのだらう。何の爲めに私はお前に吾が身を結びつけ、そのくせ私を知らない
振りするやうお前にいふのだらう。何の爲めにレギナが吾れ等の主の心を和けてくれたのに、私は

頭にこの鎖を殘してゐるのだらう、又何時でも何處でも宛然何か誓ひ事でも果す爲めする時のやう
に、(と足を示し) これこの通り足かせを掛けてゐるのは、如何したわけだらう。さて最後に私がコ
ルシカ産であらうが、スラヴであらうが、猶太であらうが、又マウルであらうが、何であらう。私
は返事はしたくない、私は口きくまい。だからしたければ、勝手に人に私をわたすがよい。でもい
やく、私はよく知つてゐる。お前は例令どんなに苦い食物だつたらうが、お前を養ひ、お前の母の
代りになつた者へ裏切りはしない。それに死とて私をちつとも亂すものでもない。

と外に赴かんとす。オトベルトは其れを引きとめる。

オトベルト でも私の言ひたいのは自分のことではない。知らない物のないお前だ、私にあのレギ
ナのことを聞かしてくれ……

ゲアンヒユマラ あれは一月経たぬ内死ぬ。

と言ひて離れ去らんとす。オトベルト依然引とめる。

オトベルト お前は其れを救けてやる事が出来ないか。

ゲアンヒユマラ それは私に關つた事でない！

と恍惚としたる様にて獨り語つ。

さうだ、印度にゐた時分、私は森の奥を彷徨つた。獅子にさへよく出逢つてぞつとして膽を冷やし
顔色を變へ、草だの毒だの此の上ない媚藥だのを夜分林のなかを歩き、調べて歩いた。その媚藥
は死んだものが俄かに生きかへつて來たり、生きてゐるものが表面は死んだと同じやうになる。

オトベルト　お前、レギナの命が救けて貰へるか、ええ？

グアンヒユマラ　それは救けて上げられる。

オトベルト　では慈悲だ。情だ、私はお前の足を抱へて頼む、この私達の話の聞いてる神の爲めに

彼女を救つてくれ、彼女を癒してくれ！

グアンヒユマラ　だが若し今お前の眼をそのお前の愛しいもの、レギナに据ゑてる時、ハットオが嵐のやうに不意に這入つて來たら。そして若しお前の眼前で怒り狂つて氣荒らになり高笑ひし、あの娘を突殺してこの虎のやうに外で吠えてゐる早瀬に死骸を抛り込むやうになつたら。若し又怨うして後、その毒ある手でお前を掴へ、裸にし半殺しにし足に奴隷の鐵環をはめ、賣り物も同様市場の柱に縛りつけたら。それが又若しお前といふ軍の人間で又お前といふ自由の身に生れたものを本當に賣り飛ばし、テベル川の河舟に結びつけたら。さあ之れを皆考へて御覽、その顔向けもならぬ恐しい生活の後、百年にも近い死はお前達二人を隔てしまふだらう。彼の岸から此の岸をさ迷ひ廻り、その永々の奴隷生活で年をとつて、またもとの所に立戻つたとき、その折りお前の心に残るものは何であらう。さあ、其れをお言ひ。

オトベルト　復讐、殺害、敵の血の渴き。

グアンヒユマラ　ところで私はその殺害者なのだよ。又復讐者なのだよ。目の見えない幽霊になつてその向ふの的をさして行くのだよ、血に渴いてるのだよ。その私にお前は何を頼むの？慈悲を持ち、徳を持ち、生きたもの共を救けてくれつて？私はそれを思ふと阿笑しくなる。お前は私に用事

があるといふ。何といふ虚心者だらう。若し私の方からもお前に用事があるとか、或る考へがあつて稚いお前を之れまで育て來たとか、お前のお人よしには私は今尻込みして仕舞ふとかと言つて、お前の心をぞつと縮上がらせたなら、私に振棄てられた子よ、お前の方でも此の私の隠遁と災ひに尻込みしてしまふかね。私は今しがた自分の身の上話をした。あんな事は恥知らずな事かい。殺されたのはあれは男だよ。女の方は——それは私だ、——その方は身を賣られ、今なほ生きて居るのだよ。またその殺害者も未だに生きて居り、そしてお前は私の計劃に役に立つ。あゝ！私は永いこと悲嘆した。大空の水は私の顔を流れた。惱みの爲めに手剛い恐しいものになつた。苦しみの爲め死ぬるばかりのものを六十年過ぎした。饑え、悲惨、路浪は私の頭を垂れさせる。私はナイル河、印度、廣い洋、嵐、星散しく極地の限りない夜も見た。肌には鐵の堅い環が食ひ込んだ。あれやこれやの二十人の主人は、病んで心凍んでる私を、女の身の私を、鞭で打つては私を驅り立てた。それが今終つた。私にはもう人間らしい所はない。

と吾が胸に手を置き、

だから此處へ手を置いたつて、此處には何もあるとは思はれないよ。私は石の像だ。私は墓の中の人間だ。この一と月前の或る日、丁度日も暮落ちた刻限、私は蒼くなり冷え切つた身をし、この僻遠の城に來た。そして宿縁の敷石にまた立戻つた吾が大理石の足の音を、木々の枝吹き撓める風音に誰一人聞くものがないのに驚いた。だが夢の間もその怨をば忘れたことのない此の私は、今日となつては思ひの儘にその敵を掴まへてゐるその當の相手を掴まへてゐる。若しその人間の最後の時を

定めたければ、その人を蹣跚かす爲めには口で唯だ一口、その人間の命をとる爲めには足を唯だ一步出せば、事足りる、そしてまたくりかへす要はない。ところで此の怨みを私の心通りに報いてくれるのは、それはお前だ。お前たつた一人だ。でもその恐ろしいのに辿りついた此の現在、私は一人で慄う思ふ。「いや、いや、餘り恐ろしい。地獄の入口に立つてる私も、之れには思はず躊躇ひたくなる。」だから私に用など頼むに御出でなさいよ。私を誘惑するに御出でなさいよ。若し私達が似よりの取引する事になつたら、私はお前に恐ろしい事を持ち込むよ。どうだい、その鞘から劍を抜きたいかい。人殺しがして見たいかい。首斬り人になつて見たいかい。お、慄へてゐるね。では向ふへ御出で、臆病者、懦弱者！私はお前には物はいはない。たゞ私を邪魔しないやうにしておくれよ！

オトベルト

(顔色蒼白になり低い聲で)お前は何がして欲しいんだ。

グアンヒユマラ

悪いことなどせぬがよい。向ふへ御出で！

オトベルト

彼の人の命が救かるなら、私は自分の血も捧げよう。

グアンヒユマラ

彼方へ御出でよ！

オトベルト

その爲めには罪も犯さう。さあ如何だ。

グアンヒユマラ

それを聞くと私の心も動いて来る、え、悪魔！ほら此の通り私は動いてゐる。だがよい、わ、その言葉を聞いてやらう。お前はもう私のものになるのだよ。どんな事が此の後あらうが、私に暇つぶしな頼み事して時間をなくしてはいけないよ。私の魂は暗い陰で立ちふさがつて、お前の頼みもその深い暗の中では消えてしまふ。現在死ぬのが私に見えた人、あの私の愛するドナ

ト！それ 生きて見えたら知らぬこと、今もいふたやうに私には憐憫もなければ、悔もないところで耳をすましてよく御聞きよ、之れはこの恐ろしい路の出がけに後にも先きにも唯一度断つて置く事だよ。つまり私のこのぞみの人を私の望みの時に、慈悲もなく容赦もなく此の土地で殺すのだよ、首斬り臺で殺すやうに殺すのだよ——之れで皆だ、お解りか。

オトベルト

お、やつて退かさう。

グアンヒユマラ 一と呼吸する毎に、お前のレギナは墓の方へと押されて行く。私といふものがなければ彼の娘は死ぬ。私を置いて彼の娘の命を助け終せるのがない。この巖を御覽、之れを毎晩一と滴づゝのむ度びに、彼の娘は生きて行くのだよ。

オトベルト

お、有難い！そりや本當か。さあ其れをくれ！

グアンヒユマラ

だがよく御聞き。若しこの薬のおかげで、額には生命、心には歡喜、蘇つた天使となり、にこやかな姿となり、お前にあの娘が明日になつて現はれても、お前は私のものだよ！

オトベルト

(狼狽しつゝ)よし、承知した。

グアンヒユマラ

誓言おし。

オトベルト

よし、誓言した。

グアンヒユマラ だがこの上はお前のレギナにお前のものは果させるよ。お前の約束の反故を償ふのは、彼の娘だよ。知つての通り私はこの古い住居には心得がある。私は此處の祕密なら皆知つてゐる。どこでも不意に這入れるのだよ。

城

オトベルト (手をのばし) お前は彼の娘が生きられると言つたな。

グアンヒユマラ さうだよ。お前の誓ひをよく了見おし。

主

オトベルト 彼女の命は救かると言つたな。

グアンヒユマラ さうだよ。だから之れをお前のものに取りうといふ今の際いまに、よく了見しておくれ、——私はお前の魂を此の後取つてしまふのだよ。

オトベルト 渡して取れ。

グアンヒユマラ (壘を相手に頼み)では翌あした日まで!

オトベルト よし、翌朝あしたまで!

グアンヒユマラ退場。

お禮をいふぞよ、お婆殿! お前の計畫もくろみが何であらうが、又お前が何人であらうが、御禮をいふぞよ。私のレギナが生きているのだ! だが之れを彼れのところへ持つて行つてやらう!

と仲仕切りの戸口をさして進み行き、次いで一瞬間立止つて其の眼を壘に据ゑ、

おゝ! 吾が身は地獄へも行け、そして彼の女は生きよ!

と慌しく仲仕切りの戸に入る。その戸閉ぢると共に、一方にては反對の側より此方こちらに近づき來るらしき數多の笑ひと唄の聲聞ゆ。大きな戸口、その二重扉を双方に開く。

歡呼の聲に連れ、皆々花の冠を戴き、絹と金糸の衣裳をけ、鎖帷子くさりかたびらもなく、革の鏡かがみ下もなく、臂手ひちてつみか甲しなき諸公と諸城主等各々杯さかずきを持ちハットオに尋たずかれて出場。一同は入混み中にて相談あひだんじ、飲み、大笑し、

その間、また酒を充たせる壘、黄金の水差し瓶、果物の盛りたる盆などを持ち、小姓等驅けめぐる。舞臺正面には幅廣の長き録を持つたる不動の黙々たる兵士。其の他樂手、喇叭手、傳令官等多數。

第五景

ハットオ、ゴルロア、ゲルハルト公、プラトン、モラグイアの國境の主、ギリサ、ルサズルサズの國境の主、ゾアクリオ、シアニラ、ロセニアの貴族、ダリウス、ラアンネツク市の城主、ガトアアア、オウケンフェル市の城主、ルプス、モの伯爵はくしやう、ゴルロアと同じく純然たる青年、其の他諸城主諸公爵、乃至無言の人物等。中にユウタア侍大將、ハットオ並びにゴルロアの兄弟數人。盛裝の婦人若干。小姓、將校、隊長多數

リュビユス伯 (唄ふ)

冬は寒くて、北風強く、

雲は向ふの山に降る。——

浮いたよ、浮いたよ、構ふ事はないよ。

何の構ふこと、浮いたよ、浮いたよ。

城

おれは極道者、母御ははでは死ぬる。

司祭殿あ毎日説教する。

浮いたよ、浮いたよ、構ふ事はないよ。

何の構ふこと、浮いたよ、浮いたよ。

ベレゼベユツ殿あ吾家の門叩き、

悪魔引きつれおれを待つ。

浮いたよ、浮いたよ、構ふ事はないよ、

何の構ふこと、浮いたよ、浮いたよ。

城主ヂリサ (側面の窓に倚りかゝりつゝ、リュビユス伯に向ひ) 市の大きな城門と、それへ上る街道が

此處から見える。

領主プラトン (廣間内の頽廢を検しつゝ) えらい陰気なことだ、えらい荒れやうだ!

ゲルハルト公 (ハットオに) 幽霊屋敷とでも言はれさうな所だ。

ハットオ (天守閣の入口を示し) 吾家のお祖父のゐるのは彼處だよ。

ゲルハルト公 たつた一人ゐるのかい。

ハットオ 父親と一緒にゐる。

領主プラトン だが如何して其んな厄介拂ひをする氣になつた?

ハットオ 奴等(やつら)はもうするだけの事は皆してしまつた。で今は二人共亂心してゐる。あのお祖父の方が物を言はないでかうも今で二た月の上になる。老といふものはとゞの詰りは引つ込まねばならないものだ。年から言つても祖父の方は百に近い。だからおれは二人の居場所を取つてやつた。奴

等はおとなしく身を引いた。

ヂアニラロ 自分の方からかい。

ハット まあそんな所だ。

隊長一人出て来る。

隊長 (ハットオに) 殿……

ハットオ 何ぢや。

隊長 猶太人の金銀細工師ベレッツは未だその贖身金を拂ひません。

ハットオ では絞罪にしろ。

隊長 リンツ市民の驚慌は段々大きくなつて、殿に御容赦を願つて居りまする。

ハットオ 占領地ぢや、掠奪してやれ、

隊長 レエンの市民は?

ハットオ 掠奪しろ。

隊長退場。

城主ダリウス (杯を手にしてハットオの傍に倚り添ひ) このお前の酒は上等ぢや、侯爵、

と彼は飲む。

ハットオ おれもさ 思つてる。これは緋色の酒だ。ビンジェンの市がおれを怖れて追従して、この年中二樽宛送つて寄越す。

ゲルハルト公 レギナといふあのお前の約嫁は美しいわい。

ハットオ なあに吾が手のものを吾が手に取つたゞけだ。母方の方から言つて彼の娘はおれの親類なのだ。

ゲルハルト公 何だか病氣のやうに見えるぢやないか。

ハットオ いや何でもない。

ジアニラロ (低聲でゲルハルトに)彼の女は今死ぬところなんだ。

隊長這入つて来る。

隊長 (低聲にてハットオに)商人共が明日通つて行く筈で御座います。

ハットオ (高い聲)兵を伏せて置け。

隊長退く。ハットオ依然諸公に身を向けて、

おれの父親は彼處を出た、併しおれは吾が家に止つてゐる。嘗つては人は戦争した。今は皆が楽しんでゐる。嘗つては物事は暴力であつた。現在それは狡計である。通りかゝりの者はおれを呪ふ通りかゝりの者は恚ういふ。『ハットオと其の兄弟共はこの陰氣な城、つまり嵐が取巻いてゐる薄氣味悪い宮殿内で亂暴な真似をしてゐる。城主や諸公に大饗宴を開いてやり、捕虜にした貴族によつて客にした貴族を足もとにひれ伏させながら接待してゐる！』だが其れにした所で結構な運命だ。人はおれを怖れる、おれを羨む、だがおれは笑ふ！おれの城は天下無敵だ。この世の事は悪魔に頼み、おれはこの世を樂園にする。獵人が其の犬にするやうに、おれは吾が手の内の漢共を放つてやり、

この世を面白く送るのだ。おれの約嫁は美しい。ね、さうぢやないか？だがつかん事だが、あのお前のイサベルの伯爵の後嗣ぎ娘、あれをお前は女房にしたか。

ゲルハルト公 いやや。

ハットオ 併し去年お前は彼女を手に入れ、その市を手に入れ、そして彼の女と夫婦約束をした。

ゲルハルト公 ところがおれは如何も……

と笑ひ出し、

うん、其れはしたとも、聖書の上におれは其んな事誓はせられた。——だが如何しやうかい。おれは彼の女を打棄つた、但しその市は頼つた。

と笑ふ。

ハットオ (笑ひながら)だが議會は其れで何と言つた。

ゲルハルト公 (笑ひ續け)なあに黙りこくつてゐる。

ハットオ たがお前のその神言は？……

ゲルハルト公 はゝゝ馬鹿々々しい。

此の少し前あたりより右手天守閣の戸口開かれ、ほの昏き階段の踏段數段見え、その上に兩人の老人の姿現はれあり、一人は六十を稍越せる年配、頭髮灰色、髭灰色、今一人は更に年老い、殆ど頭全部禿げ上り、白くして長き髭あり。兩人とも織作への下着、腰當て、上に着る鎖帷巾をつけ、横腹に大なる劍をつるし、この軍の扮装の上に、年長つた老人の方は金襴の縁とれる白色の袍を更におひ、今一人はその口舌が頭上

に及べる狼の大きいなる毛皮を負ひたり。

年長の老人の背後には屹立し、石造の像の如く不動の白髯の侍者一名鐵作への衣裳を着し老人の頭越しに紋章なしの大なる黒き旗を掲げ居り。

オトベルトは眼を伏せ、年長の老人に寄り添ひ、老人は又彼の肩に右手を載せ、少し背後に控え居る。

昏き奥、この老武士兩人の背後に目に入るは、各その主人同様鐵作への粉装をなし、年頃も劣事なき兩人の侍者にて、その白くなれる髯は顔半ば迄下げたる兜の眉尻下に垂れ落されり。之れ等兩人の侍者は緋天鷲絨の布團に載せ二老人の兜を携ふ。大にして形稀代の縁どり型のもの、その鷄冠は奇怪なる動物の口に象れり。

老人兩人は點々と耳を傾け居る、年下の老人の方は組み交したる双腕にて顔を支へ、またその両手は巨大なる蘇格蘭大鍔の柄の端に支ふ。賓客はめい／＼彼等の間の事のみを氣を取られ談話なしつゝありて、之れ等の人々目につかず。

第六景

同様の人々、ヨア、マケヌス、オトベルト。

マケヌス 往昔古い日耳曼で事を取り行つたものは戦ひの物の具であつたやうに又、誓ひでもあつた。そして誓ひでは鋼鐵で出来てゐた。私は今それを誇りを以つて思ひ出す。それは堅固で見る目も輝かしく、争ひや闘ひの手にかけなければ傷つけられる事もなく、人はそれで以て價値の程も知

れ、當然貴族も枕のはたに常々支つて寝ね、錆びてもめけずに役に立つた。雄々しい死者はたが振らす濁り氣なく墓に眠り、嘗ては甲冑を纏ふて寝たやうに、今は誓言を纏ふて寝た。そして時が死者の衣裳を腐らして、往々その甲冑は纏繞にしても、嘗て誓言だけは腐らしたことはない。併し今日になると信義も名譽も約束も西伯牙風の新しいやり方を追つ駈ける。そら金箔ちや！そら絹布ちや！誓言は證人があらうとなからうと、嗣着一枚立ち切れる程續くものでもなく、時には一層多く、それは役にも立たぬ纏繞同然のものとなつて、これを破いてこれを投棄て、「昔流儀」と貶してしまふ！

マケヌスのこの言葉に一同は唯だ呆然として其方に振向いて居る。此の間暫時、賓客達沈黙。

ハットオ (老人兩人の方に辭儀をし) 父上……

マケヌス 私子達、お前がたは大した騒ぎをやつてゐるな。だが年寄りには暗と夜のなかに夢を見さして置くがよい。響宴の光は年寄りの濼い眼を傷つける。老いたる者は劍をかちやつかせ、——小供等よ、若いお前方は盃をかちやつかせてゐる。たがおれ達の所へは來るなよ！

ハットオ 父の殿……

と此の時不意に畫像が石の壁に向け面を伏せられあるを目にとよめ、

やあ之れや誰れがしたの？……

と、マケヌスに向ひ、

之れは御免下さい、私の御祖父さん方の畫像を、恚う引くりかへしたのは誰れです？誰れが恚んな

事をしたのです？

マグヌス それは私がした。

ハットオ 貴方が？

マグヌス さうぢや。

マグヌス おゝ父上！……

ゲルハルト公 (ハットオに) お前之れや調弄つてゐるんだよ。

マグヌス (ハットオに) 畫像は私が壁に皆伏せた、その人々の孫子の恥を見せないやうに伏せてしまつた。

ハットオ (奮然として) バルベルスはその大伯父ルイの恥さらしな工業を抑へつける爲罰してやりました。一體私の方が先きに手を出されたので……

マグヌス (ハットオの方へ頭を半ば向け) 誰れかバルベルスの事を言つてゐるな。誰れか自分のお仲間をやうに賞めたててゐるな。だが私の前では其の名を決して言はないでくれ！

ルプス伯 (笑ひながら) 貴方に彼の人は一體何をしましたい、御爺さん？

マグヌス おゝ、吾が祖先、此の儘何時までも眼を伏せよ、眼を伏せよ！彼は私に何をした、殿、お前は私に怨う言はれるのぢやな、モンの若い伯爵？湖水からセエ・モンまでラインの縁を降りて行き、この兩岸で壊された城々を算へて見るがよい。彼は私に何をした？捕はれの身になつたが家の姉妹、吾が家の娘共、吾れ等が塔の破片で吾れ等の岩山の上に秃鷹の餌となれど築き上げたあの

磔刑臺、それから吾れ等ある限り續き來つたあの襲撃、あの戦ひ、あの殺戮、また最良の貴族の頸にまきつけるあの奴隷の鐵鎖、彼が私にしたのは之れぢや。ところで之れは貴方にも彼がしたのぢやぞ！三十年間常に勝利を占めたそのシエザルの名でもつて、焼打ち、追ひ立て、鐵鎖、千百の荒仕事、裁判、土牢、役人共、拷問、さうぢや、おれ達は之れを皆受けた。おれ達は、おゝよく聞けよ、まるで猶太人も同然、奴隷も同然にこの永々の恥しめ、この永々の勝利を我慢されたのぢや。ところで私共の墮落した息子共はこの話をもう忘れてゐる。皆で彼の前に頭をさけてゐる。嘗つてそのフレデリク一世が面は隠してゐたが足の先きから兜の鶏冠の端まで黄金で飾り立て、燃えあがつて破れ口の頂邊へ身をあらはして吾が一軍へその挑戦の籠手を投げたとき、全軍怖氣づいて慄へあがり、皆逃げ失せた。そして吾が父上が誰だ一人——

と連れの老人を指し示して、

此處に居られる此の吾が父上が狭い内庭で彼の行く手に立塞がり、眞赤に灼けた鐵の三つ葉で、彼の右手に烙印をおしてやつた。あゝ、追想！ああ昔！それも今は皆消えてしまつた、眩めく吾れ等の眼からその光を見えなくした。男爵達は倒れてしまひ、城は碎けて野原に散り敷いてゐる。あの森全體も残つてゐるのは唯だ樫の木一本ぢや。

と連れの老人に頭をさげ、

ところでその樫は、外ならぬ貴方、吾が畏敬すべき父上ぢや！

と再びもとの如く身を直して、

バルベルス！この厭はしい名に禍ひあれ！吾れ等が盾は伏せられて草や茨のなかに潜む。ラインは名を汚されて衰残のあひだを走る。あゝこの返報は報いてやる。それは私の偉大とならう。容赦なく、恩恵なく、哀憐なく、恐怖なく、もし彼にして死んでなければ彼の上に、さもない時はせめては其の一族の上に、心置きなく彼をひつ叩いてやる。神よ、願はくば墓に行かん前この吾が心の慰められん事を、その返報せぬ内にこの世を吾れ去ることなからんことを！それは彼のこよない歡びを遂に得んがため、乃至噴墓の地より立出で、吾が餌食を再び捉らんがため、また吾が死の後もこの世に歸へるを得んがため、和子等よ、私は畢生の力を注いでやらう！さうぢや、神の心は如何にもあれ、額は掲げ、心は剛毅に、よしんば吾が行く先きを立塞ぐ門は天國の門ならうとも將た地獄の門ならうとも、私はそれを――

と兩手を擴げ、

唯だ一と突き此の鋼鐵の短劍を喰らはして打破らんと思ふのぢや！

と、此 時ふと口を止め、言葉途切らし、一瞬間黙々として居る。

おゝ悲し、世に取残された老耆、私は一體何を此處でほざくぞ！

と深き瞑想に陥つて、今はその周圍のものも一切耳に入らざりし。このあたりより賓客の内より歡語と無作法ま 次第に蘇へり来る。老人兩人は二個の立像のごとく見ゆ。酒は容の間をめぐり、笑聲は再び起る。

ハットオ (兩肩をそびやかして老人等をゲルハットに差し示し、低聲にて) 年を取つたので、氣が錯亂て

る。

ゴルロア (ハットオを差し示しながら、ルプス伯に低聲にて) 嘗つておれの父親も恚んな風だつた、今にまたおれ達とても、之れと同じになる。

ハットオ (公爵に) 吾が部下の兵は此の二人に皆打込んでゐるんだ、へつ困つたものよ！

此の間ゴルロアと四五の小性は實際に寄つて、外を眺めて居る。と、この時突然ゴルロアは再び此方へ歸へり來つて、

ゴルロア (ハットオに) あゝ、父上、鳥渡彼處へ行つて彼の髯の眞白な老人を御覽なさい。

ルプス伯 (窓に驅け寄り) 本當に何て緩々徑をのほつて來るんだらう。額は前に下がつてゐる。

チアニラロ (傍へ行きながら) 草臥れてゐるんだよ？

ルプス伯 風は外套の破れ口を吹いてゐる。

ゴルロア 城内で一と宿りするつもりとは誰れにも見えやう。

城主ギリサ あれは乞食かも知れない。

城主ガドワラ 探偵かも知れないよ。

城主ダリウス 歸へれ、歸へれ！

城 ハットオ (窓際にて) 誰れか石でも抛つてあの道化者を早々追立てろ！

ルプス、ゴルロア (小姓共と共に石を投げ) 犬奴、失せてしまへ！

主 マグヌス (愕然として夢より覺めし體にて) おゝ、之れは何といふ世の中ぢや。此處にゐるのは之れ

は何ものぢや。物乞ひする一人の年寄りを磔を打つて追ひ立てるとは！

と一同の顔を見まもり、

私の若い時とて矢張り私等並みの愚かさ、私等並みの饗宴、私等並みの唄があつた。だが其れも結局年の若いせいぢや。だが老と饑ゑとに打負けた年寄りが酒宴の眞つ唯中に、饗宴の眞つ唯中に來て、その寒さに赤らんだ手をわなく差出すと、下らぬ無駄口などは取置いて忽ち兜には金、杯には酒を充たしてやつたものだ。ついで吾々はこの旅の者の爲めに、神が送つてくれたものかも知れないこの老人の爲めに、皆で吾れ等の唄をうたつてやる。何故なら心臓には少しの酒、手には少しの金を得て、老人は歡びに溢れ、微笑みく、吾れ等が取る路を又辿つて行くからぢや。吾々がした事に、このお前達のする事を比較べよ！

ヨブ (屹と立ち直り、足を一步出して、マクヌスの肩を仰へ) 私に、黙つて居れ。おれの頃の饗宴だと乃至又た飲み交してゐる時だと、若し年寄りが一文もなく、襤褸を下け裸足で門前を物乞ひして通ればお前の頃よりはまだ高い聲で唄をうたひ、黄金の皿に肉をまる一つ大きく置いたのを取り巻くぢや。すると護衛が行つて彼を探す。そして彼れが這入ると合圖に喇叭を鳴らす。すると男爵連が起ち上る。若い者共は話を止め、唄を止め、笑ふのを止め、中には止んごとなし皇帝の御子まで交つて、その老人に頭を下げるのぢや。それから中の年輩の者共がこの見知らぬ客人に手を差出し、「殿よ、よくいらせられました」と言葉をかけるのぢや。

と、ゴルロワに打向ひ、

向ふへ行つて彼の旅人を捜して來い！

ハットオ (低頭して) でも之れは……

ヨブ (ハットオに) 黙れ！

ゲルハルト公 (ヨブに) 大殿……

ヨブ 誰ぢや、『黙れ』といふた時、口をきく者は？

一同後へさがつて口を噤む。ゴルロワ命に従つて立出でる。

オトベルト (獨白) おゝ之れは素敵、殿、老いたる獅子！お前はそのお前のなり下りなる醜もない野良猫共を吃驚兩眼を見張らせてゐる。之れで若し何か危害を後で貴方に加へたら、その靈をふるひ立て、彼等を一と縮み縮みあがらせるがよい。

ゴルロワ (立歸つて、ヨブに打向ひ) 彼は上つて來ました、大祖父の殿。

ヨブ (坐りし儘の諸公等に打向ひ) では起て！

その孫曾子一同のものに打向ひ、

吾が傍に並べ！

又カルロワに

此處ぢや！

次いで傳令役と喇叭手等に、

王に對してする如く、喇叭手よ、吹き鳴らせ！

軍樂起る。諸城主、諸公の面々左側に列を作る。ヨブの子孫は彼を取巻き、右手に並ぶ。舞臺正面には廣鋒の兵、高き旗を持ち控えあり。

ヨブ よし。

舞臺正面の廊下より一人の乞食出場。年頃殆どヨブ伯爵と同じ位に見ゆ。その眞白き髭は下に垂れ下り、腹にまで及ぶ。着物は裂れたる帽子附きたる栗色なせる粗毛布の寛衣と、穴あきたる大外套を引けたり。頭は無帽腹には繩帶をしめ、それに大なる穀粒の珠数つるしあり、足には裸足に糸繩の草鞋を穿つ。彼は階段六階目のところにて足をとよめ、その儘不動の姿となり、節くれ立ちたる長き杖に身を支える。廣鋒の兵は旗を垂れ、喇叭手等は新しき樂を奏して之れに敬禮す。この瞬間少し前にグランヒュマラ再び散歩場の最高層に姿を現はし、次ぎの景の間一杯坐り居る。

第七景

前と同じ人々、乞食

ヨブ (吾が孫子の間より起上り、闕際に不動の姿をとれる乞食に打向ひ) お前は何人にでもあれ、コロイニユとスピイルの間なるタウンユス地方のうち、その前に並んだ峰々も丘と見える岩山の上にあらゆる城のなかにも其の名著き城があり、又焦山の片端に打建てられたその城内に、あらゆる城主中でもその聲かくれない城主がゐるのを承知してくれるか。またお前は恁んな事を聞いて居るか、即ちこの人間は法治外にあつて、あらゆる悪計を擔はせられ、あらゆる企劃で輝かされ、フランクフ

オルトの議會やビザの樞密院からは神聖帝國と神聖教會の外に置かれ、孤立させられ、激怒され、指彈され、しかも其の奥山の中にあつて、又吾が意志の中にあつて毅然と立ち、息つきも知らず、中休みも知らず唯だ追ひかけまはり、挑みかゝり、打ちかゝつた之れは別資格の伯、審問の大司教であり、六十年この方この城壁に立てかけられた帝國の梯子を推し退けた人間であると。またお前は恁んな事を言はれた事があるか、即ち彼はあらゆる勇氣の住家であり、富者を化して貧者とし主人を化して奴隷と爲すものであり、諸公や諸王や諸帝の上に、また其の憤怒に蹂躪られる日耳曼の眼の前に、侮辱の挑みを投ぐるが如く、葬禮の呼び聲を鎖に繋がれた民にかくるが如く、風吹きめぐる黒い渦巻の中に翻へる恐しい襪褌布、禍事の大旗を、そが塔の上に樹てるものである。またお前は恁んな事を言はれたことがあるか、即ち彼は既に齡百に近づいたけれども岩山に身を起して以來、天を蔑し、運命を輕じ、その頂邊の彼の城廓を辛くも攻めとつた戦争も、全能にして怒りたけるカイゼルも、又羅馬も、乃至はこの世の陰暗い荷、彼の人間の打拉ぎなる老の年も、勝つことを得ず、従へる事を得ず撓めることを得なかつたものは遂にこのライン川の古き巨人、教會破門者のヨブであつた、——お前は之れを知つてゐるか？

乞食 うむ。

ヨブ お前はその人間の家に來たのぢや。よくこそ來られた、殿。その呪はれ者のヨブといふのは、此の私である。

と、次いでマケヌスを差し、

此處にゐる之れは私を敬ふ私の息子ぢや。

またハットオ、ゴロロワ、乃至その他を差示して、

そして之れは息子の子供等で、おれ達よりはその偉大さが少くなる。希望といふものもおれ達は慙うして屢々取損ふものぢや。ところで私は吾が死せる父に依つて吾が家の昔ながらの劍を頼る。私の劍は人も畏む一つの譽れがある。又母の意よりして私はこのヘツペンヘツフの邸を頼る。さて吾が客人、此の譽れも劍も城もすべてお前のものぢや。心置きなく聲高々と、今度はお前が謡をしてくれ。

乞食 公爵方、伯爵方、又騎士の方々。私は此處へ這入つて皆さんに挨拶する、そして其の後私は慙う言ひたい。もし貴方がたの思案の果てに一切が心安かであるならば、そしてもし又過去の所業を思ひ廻し天の青きが如く貴方がたの清い心も濁らせられることがないならば、樂しむがよく、笑ふがよく、唄ふがよい、だがさうでなかつたら神を思ふがよい！で、年若い方々、長い運命を見た老の方々、花の冠りをつけた人、齡ひの冠を負ふた方、若し貴方がたが天の圓天井のしたで悪いことをしたならば、自分の行く手を眞面に見、眞面目な心に歸へるがよい。吾々の生は、短かくて疑ひ多い束の間ぢや。老は此方にやつて來るし、墓は向ふに口を開いてゐる。そこで吾れは力あり又強ひて誇る若い方々、貴方がたは年寄りのことなど思ふておやり。又貴方がた年寄り衆は死のことなどを考へて見る。なかにも人には懇にしてやることぢや。之れが心の優しい律ぢや。通り掛りの人間を追ひ拂ふにしても、その追ひ立てられた人間は誰れだが御存じか。何處からやつて來たものだから

は御存じか。貴方がたをさして來た貧者をあがめん事を！百歳の樞の樹をも呼吸一と吹きで打倒す神は、既に今慙う話をしてる最中にも暗のなかで唸いて檻縷のしたに一人乞食が隠してゐる手に、災ひと電光と雷鳴とを掴ませてるかも知れない。

第二幕

乞食

甲冑の間、右手に一つの入口。追間開きたる廊下正面には、空見ゆ。切出したる儘の玄武岩の壁。粗くれ立ちて見る目險しき一切の裝飾。柱皆々に立てかけられたる。一と揃ひ宛の甲冑。幕開くと、彼の乞食は枝にもたれ、眼は下に据ゑ、憐ましき幻想に取憑かれし體にて、舞臺前面に立てり、

第九景

乞食唯一人

時は来た、あの大きな打撃を加へてやらねばならぬ。だが人はあるゆるものを救ふことが出来ても、それには危い目を見せずには濟まされぬ。神吾々を助けたとて如何しやう。おゝ日耳曼、吾が愛する國！如何にお前の子等は打倒され、また何たる打撃のもとに殺戮され、此の永き路流の後、お前を此處にまた私は見出でたぞ、あゝ……彼等はフィリップを殺した。ラデスラスを追ふた。ハインリッヒを毒害した。落ちつきすました額をして、希臘のアキルスを賣るかの如く、『獅子の心』

(譯者註 日耳曼皇帝フレデリック(綽名ハルベルス)と共に第三回十字軍に従ひし英王リチヤード一世の綽名。大功勳ありし。遠征歸還の途埃國某公の爲め捕虜となり、幽閉さる)を賣つたのだ。おゝ、恐しくも暗黒な崩壊！統一の望みもない奈落の底の落ち込み様！諸國のつなぎの巢も打ち壊されてしまつた。往昔勇者の地であつた此の國で、見ゆるはコレン人、普蘭曼人、サキソン人、モラヴィヤ人、フランク人、巴威人、併し日耳曼人は一人もない。全くまた萬事が手取りばやく片附けられるのぢや。修道僧には唱名すること、説教師には説教する事、小姓には主人の槍を持つて來ること男爵には掠奪すること、王には眠ること、これでよい。掠奪しないものは、唯だ愁嘆を洩らすばかり、またサラの諸皇帝の頃のやうに身を慄はせながら聖者の遺物の櫃を崇め、その寶物に接吻するばかり！人は兇惡でなければ意氣地なしの揃ひである。性惡でなければ卑怯者の揃ひである。トレヴ地方にならつて、選舉された伯は饗宴の肉切り役同様第一着の投票權を持つところでは金で其れを賣る。貴族も祭日の休戦日をまもるものなら、ボヘミア王ばスラヴ人で、之れが選舉候となつてゐる。誰れしも吾れ劣らじとせ、一杯にのび上り、此處でも其處でも拳の正義や恐怖や暴力ぢや。足で踏みつけた、犁は槍の白刃とかはる。大鎌は戰場に出で、畑の收穫を忘れる。火の手は到る所で上る、ツンガリ人は破屋の間を打跨いで其の唄をうたひ、外套の下には燧石と鋼鐵片を隠してゐる。ヴァンダル人は伯林を取つた。あゝ、何といふ圖ぢや。異教の軍はダンチヒへ來た。蒙古の軍はブレスラウへ來た。すべて之れ等のものは同時に私に混交と思ひもつかず頭へ上る、——だが之れは考へて見るとぞつとす……おゝこれは汚辱ぢや！更にその上は富ぢや。一切は國も市も界限も總て死に絶える。ストラスブウルの尖塔はあれは如何して仕上げるか。市々の旗

は誰によつて掲げられるか。内亂で金もうけした猶太人によつて掲げられるか、おゝ下司！帝國は併つて大きな支への柱を数々持つてゐた。和蘭、リユギザンブウル、クレエヴ、ゲルドル、ジュリエ……だが之れは皆倒れた！さらにポオランド、ヌロンバルデヤ！吾々は大胆不敵な攻撃を受ける日の爲めあの邪な信心者の垣根の地、ウルムとアウグスブルを持つてゐる、だがシャルルマイニユや信心者オットオの残した仕事は今はない。西方の吾が境はロレエンの高地がアルサス伯のものとなり、ロレエンの低地がルウヴァン伯のものとなつたがため消え失せた。チウトンの組合も同様ぢや。ガウヴェンには唯だ二十七人の騎士と百人の兵よりない。ところが一方では丁抹が脅かす。英吉利が日耳曼帝政黨と伊太利艦とを煽動ける。ロレエンは謀反ぢや、ブラバンでは不平をいふ。チュリンでは火をかゝふ。佛王フィリップ・アウギニストは手剛い。ジェノワは外國の資金をねらふ。教會破門者は毎日首をつられる。そして羅馬の聖なる父は椅子に坐つて鼻高々とわけの解らぬ夢を見る。ところで斯る運命に面してゐて、此處には一人の主もないのぢや！そしてんで散亂のこの選舉侯共は自分の方だけ自分の傷をめい／＼深めて行き、吾れに支拂ふものに冠をさづける。怒うして四邊の馬でゆる／＼手足を引き放たれ、血に塗れ、張り裂かれて死ぬ罪人を今さながらに、アンヴェルスよりラティスボンヌまで、またルベツクよりスピイルまで、四人の皇帝に吾が帝國は四つの身體に引き裂かれる！おゝ日耳曼！日耳曼！日耳曼！何たることぞ！……

と、乞食の頭はその胸に垂る。と、次いで緩かなる足にて舞臺正面を通り立去る。オトベルトは此の少し前より入り来りありて、その背後を見送る。乞食は山廊の迫持揃ひの下にぐえなくなる。

と此の時オトベルトの面は突然歡喜と驚愕の表情に閃く。彼の乞食の立出でし其れとは反對の舞臺面奥の側よりレギナの姿あらはる。レギナは幸福と健康に光輝けり。

第二景

オトベルト、レギナ

オトベルト おゝ、之れは如何したことぢや。私怒うして見てゐるのは、レギナ、お前に違ひないが。

レギナ オトベルト、オトベルト、私は生きてゐる。話をする。呼吸を吸ふ。私の足は歩けるわ。私の口は笑へるわ。私にはもう苦しみはない。私にはもう怖れもない。私は生きてゐる。私は嬉れしい。そして私は皆貴方のものなのよ！

オトベルト (相手を見まもり) おゝ嬉しや！

レギナ 昨夜私は眠つた。しかし熱はない。もし何か私が口を開いたとて貴方の名が一つこの唇から出るだけだらう。おゝ何といふ甘いあの睡り！本當に私は何も苦しまなかつたのよ。日が上つて眼が覺めると、オトベルト、オトベルト、何だが蘇つたやうな心持がする。室の窓の下では雀の樂しげに轉つてゐるわ。花はその香ひを漏れゆくがまゝ空に放してゐるわ。そして此の私は自分の魂を歡喜のなかに包んで、恚ういふ綺麗な息を送つてくれるものを、又この限り知れない天然の中で眼をうたつてゐるものを、見廻して見たわ。そして眼は涙で溢かして聞きとれない位低い聲で恚う言つ

た。『おゝ優しい小鳥、それは私だよ。優しい花、それも正しく私だよ。私はお前を愛する、おゝ私のオトベルト！』

彼女は男の腕に身を投げる。そして吾が胸より薬の壘を取出して、

この壘は生命が這入つてる。そしてお前は私を癒してくれたのだわ、オトベルト。お前は死にかけてゐた私を蘇らせてくれたのだわ。だから今度はハットオを私のために防いで頂戴！

オトベルト レギナ、私の美、私の輝かしい天使、私の歡喜！さうぢや、さうぢや、私はこの仕事の終りのつけ様は知つてゐる。でも私を買ひかぶつてくれるな。私には勇氣がない。私には心の力がない。私にあるのは唯だ一つ愛だけぢや。お前は生きた、私は自分の目の前に新らしい日の開けたのが見える。お前は生きた、私は自分のなかに新しい魂が出て來た氣持になる。だが私の顔をちつと見ておくれ、おゝ之れはまあ如何した事ぢや、彼女は何て美しいんだらう。本當にお前はもう苦しみはせぬな？

レギナ えゝ、ちつとも。もう其れは濟んだのだよ。

オトベルト おゝ、有難い！

レギナ オトベルト、本當に有難うよ！

二人は相抱擁せる儘暫時無言の時を續ける、次いでレギナはオトベルトの腕より身を離し、でもあのよいヨブ伯が待つてゐらつしやるわ。——私の大切な人、私は唯だ貴方を愛すると一言ひたくて來たのだわ。左様なら。

オトベルト も一度來ておくれ！

レギナ えゝ直き。で、私驅けて行つてよ、あのお祖父さまが待つてゐるわ。

オトベルト (不意に地に膝を突き、眼を天にあげ) 感謝す、主よ彼女は救はれました！

グアンヒユマラ 舞臺正面奥に現はる。

第三景

オトベルト、グアンヒユマラ

グアンヒユマラ (オトベルトの肩に吾が手を置き) お前、それで氣がすんだかい？

オトベルト (驚愕して) おゝ、お前はグアンヒユマラか。

グアンヒユマラ 私はあの通り自分の約束の分は果したよ。

オトベルト おれとして自分の誓ひは立するつもりだ。

グアンヒユマラ 容赦もなく？

オトベルト 萎みもせず。(獨白)で、その後おれは自殺をしてやる。

グアンヒユマラ では今夜の夜中にお前を待つてゐるものがあらう。

オトベルト 何處で？

主 城 黒い旗の塔の前で。

オトベルト それは誰れ一人通る者のない恐しい場所ぢやな。何でも岩に氣味の悪い痕が残つてゐる

城

るといふ……

グアンヒユマラ 流れにのぞむ一つの窓から壁に垂れたる血の痕ぢや。

主 オトベルト (戦慄して) おゝ其れは血か！お前は其の血が壁に染みついてるのを見たのか。

グアンヒユマラ その血は垂れて、濁きを醫す！

オトベルト よいわ、よいわ。お前の奴隷に何なり命令けるがよい。でその定め(さだ)の場所でおれは誰れに逢ふのぢや。

グアンヒユマラ 假面をかぶつた一人の男——唯だ一人の男に逢へばよい。

オトベルト で其のあとは？

グアンヒユマラ その男について行くのぢや。

オトベルト よし解つた。

と此の時グアンヒユマラはオトベルトが腰にさげ居る短剣を活如として捉へ、鞘より抜き放ち、凄惨な目つきしてその刃を眺め、次いで上空に其の眼をあぐ。

グアンヒユマラ おゝ廣き空！聖なる奥所！濃青の天井の陰森たる静けさよ！また悲哀の中に壯嚴の氣を宿せる夜よ！又吾が忠實なる伴侶、吾が鐵鎖りの古き枷、永き路浪の間にもつひぞ此の身を離るゝことなかつたお前！私はこの枷を證人に立てるぞよ。またお前がた、城壁よ、城の廓よ、旅人の足に暗い影をそゝぐ椋の樹々よ。吾がいふことを其方がたも聞け、私はこの刀にフオスコの復讐をとめるぞよ、夜よお前のやうに影暗く、偉大な椋の樹よ、お前のやうに老果てた森と岩と平野

とこのその男爵を！

オトベルト そのフオスコといふのは誰れぢや。

グアンヒユマラ やがて此の世を去る吾が相手ぢや。

と彼にその短剣をわたす。

お前(まへ)の手で、時は今日の夜。

とグアンヒユマラは舞臺奥の方の廊下より、その反対側より入り来るヨブとレギナを見る、ことなく退場。

オトベルト (獨りとなり) おゝ、之れは何とする。

第四景

オトベルト、レギナ、ヨブ、

レギナ (走せつゝ場内に入り来り、次いでまた緩き足どりにて吾が後に従い来るヨブ伯の方へ立戻り) えゝ、私は驅けられるのですわ、ほら慙んなに、殿。

と、次いでオトベルトの方へ近寄る。オトベルトは今はグアンヒユマラの最後の言葉耳に残れる様に、入り来れる二人のもの眼に這入らず。

城 二人でやつて来ましたわ、オトベルト。

オトベルト (夢より不意に覺めし體にて) おゝ殿……姫……

主 ヨブ 今朝私は吾が悲哀の又重なる心持して過してゐた。つまり私の客人あの乞食の者の昨日いふ

たことが、一瞬一瞬電光のやうに私の中を通つたのぢや。

と次いでレギナに向ひ、

で其のとき私は今死にかけてゐるのを見るお前のごこと、また吾々のまはりを立迷ふ悲しい影、即ちお前の母のことを思ひまはしてゐた……

と此度びはオトベルトに向ひ、

すると丁度その時私の室へ之れが——此の子が楽しげな顔をして、勝ちほこれる様子をして、活々とした薔薇色をして這入て來た。おゝ何たる不思議！私は笑つた泣いた、よろめいた。『オトベルト殿へ行つて御禮を致しませう』と此の娘はいふ。そこで『驅けて行つてオトベルトにお禮しやう』と私は答へたのぢや。恙うして私達は此の古い廢れた城内を横切つて、そして……

レギナ (いそぐと) そして二人ですつと此處まで驅けて來たのよ！

ヨブ (オトベルトに) だが之れは何たる奇蹟ぢや！この病癒えたる私のレギナ！……私は之れに黙つてゐねばならぬことはない……一體どんな事して此の娘を恙う助けられたのぢや。

オトベルト それは氣力の藥、此處にゐる或る女奴隷が賣つてくれた秘密の藥なのです。

ヨブ その奴隷は放してやれ。私はそれに百リイヴルの黄金、崙、葡萄園を與へる。この愁嘆の城内に死の命を受けた罪人を釋してやる。千人の百姓に此のレギナの選むがまゝ税金を免じてやる。

と、次いで二人の手をとり、

あゝ私の心は歡喜でもつて一杯ぢや！

と、二人をこめて二人を優しく見まもり、

恙うして又お前達二人を見ると、之れで私はもう心が足らぬ！

次いで舞臺前面に數歩出で、深き思ひに沈みし體にて、

おゝ正しくあれは誠ぢや、私は確かに呪はれた。私は一人ぢや、私は年老いた、私は心悲しむ、私は彼の吾が祖先の住む天守閣に身を隠し、其處に心沮喪し靜座し點々とし魂暗く、この闇暗の吾が周圍を考深く眺めるのぢや。おゝ悲し！一切は唯だ黒い。眼を日耳曼の方へ遠く見廻しやれば、其處には嫉視や、暴虐や、屠りや、愚かな闘ひや、罪より外に何も見えぬ。おゝ今にして之れに手をのばす巨人のやうなものが其の路に出なければ、千百の手によつて推されて行き、今將さに深淵に陥らんとする憐れな國よ！それを思ふと私の心は病んで來る。吾が民、吾が家、吾が一族の子、見廻せばどれも之れも皆……嫌悪ぢや、卑劣ぢや、向ふ見すぢや！ハットオはマグヌスに逆ふ。ゴルロワはハットオに逆ふ。恙うして狼の下にはもう狼の子が齒嚙りしてゐる。之れを思へばこの吾が民に私はぞつとする。また私は自分のなかを見まはして見る。吾が一生、おゝ之れは何ぢや、吾が恐怖を誘ふ記憶が眼の前を通りすぎ、其の顔向けならぬ恐しい假面を取外す度に、私は戰慄し顔は色を失ふ。さうぢや、まさしく一切は黒い。焰にくるまつた吾が國內の惡魔、吾が一家内の怪物、吾が魂の中の妖怪！恙うして吾が打惱める眼がこの三重に重なりあふ暗間の三重の幻を追ひ、神と光を求めて遂に靜かに見上げる時、この夢た深淵より立出で、直ぐ身の傍に見たくなるものはお前達といふ二つの淨い光に似たもの、地獄の閻魔に立現はれた輝く二つの影に似たもの、又お前

達といふ顔に多分の眩ゆい光をやどした子等、即ちお前といふ雄しい若者、お前といふ優しい娘、その二人の眼が私の方へ向けられた時、さながら打のめされた魔王の上に寛仁に坐つてゐる二人の天使とも見られるそのお前がたを見たくなるのぢや！

オトベルト (白) あゝ痛ましい！

レギナ おゝ殿！

ヨブ 小供達、私はお前がた二人を腕にかゝへて抱きしめる！

と次いでオトベルトの悪眼を優しげに打ち見まもり、

お前の眼は眞面目ぢや。目を目がけて飛ぶ鷲や磁石に吸ひつく鐵のやうに、誓ひに雄々しい信心者といふ氣をさせる。一旦約束したものは必ず、此の子は果すのぢや。

と、レギナに打向ひ、

さうではないか？

レギナ だから私は此の人に生命を救はれて居ります。

ヨブ 私も墮落をする前は、之れに似寄つたものだった。處女のやうに又劍のやうに落ちついて澄んで淨かたで又誇りが高かつた。

と次いで窓邊に行き、

あゝ、風は心持よく、空は微笑み、日は安らかに照りわたる。

とま、レギナのもとに到りて、オトベルトを差示し、

どうぢやレギナ、あの氣高い姿を見ると私はあの子、吾が憐れなる末子のことを思ひ出す。神が私にあれを授けてくれた時、私は自分の罪が免されたと思ふた。ところで其れから早やも二十年経つ。老に生れた一人の子！おゝあれは何たる天の恵みぢや！私は止む間なく其揺り籠のもとに行つた。その睡つてる時さへ、よく物を言ひかけた。何故と言つて人はひどく年をとると、まるきり小供になつてしまふ。晩には膝にその金栗色の頭をのせる……。——よいか、私はその時分のことをお前に話す。お前はその頃未だ生れてはゐなかつた。ところで其の子は人も微笑む片言をもう其の頃風に言ふて居た。年は未だまる一歳にもならなかつた。でも魂は持つてゐた。彼、私をよく見覚えてゐた！之れを何とお前に言つて聞かせよう。其の子は私を見ると笑ふ。私は又その笑ひを見ると、この憐れな年寄りが心に日が照り輝く思ひがする。此の子を一人の勇者、一人の丈夫、一人の勝利者にしやうと思つた。で、その名を私はジョルジとつけた。或る日のことぢや——あれを思へばこの胸が苦くなる！——あの子が昌で遊んでゐると……、おゝ母となつても吾が手許から遠く小供を離して遊ばせるなよ！私はその子をそこで攫はれた。——數人の猶太人ぢや、一人の女ぢや、何の爲めかは知らぬ。人の話では之れは安息日の供への爲め、赤子の咽喉を切るのだといふ。それから後といふものは私は泣く、二十年このかた初めの時のやうに泣く。おゝ悲し！私は彼れをどれ泣愛したらう。それは私の小さい王であつた。その小さい手が私の眞白い髻に觸ると、私は狂し、私は酔ひ、天が一つの魂に語ると思ふありとあらゆるものを、私は吾が心の中で感じたのぢや。——私はその後またとその子を見た事がない。つひぞ一度も出逢つた事がない！——そして私の心は老い

朽ちた！

と、オトベルトに向ひ、

あれは丁度お前の年の頃であらう。あれはお前のその美しい面を持つてゐるやう。あれはお前のやうに無垢であらう。おゝ此處へ来てくれ！私はお前を愛してゐる。

此の少し前よりゲアンヘエマラ入り来り、此方より見らるゝなしに舞臺正。奥より此方をうかよふ——
ヨブはオトベルトをひしと抱きしめ、そして泣く。

時々お前を見てゐると私は『これは屹度あの子ぢや！』と獨り言をいふ。不思議にもまた喜ばしい奇蹟のおかげで私はあの子の事を吾が弱り果てた魂もつて、思ひ起し、お前の公明もお前の態度も、お前の眼も、お前の聲も何から何まで私の思ひ出せるもの、私の打忘れてゐたものが、そのお前のものと一緒にゐる。あゝ之れが吾が子であらん事を！

オトベルト おゝ殿……

ヨブ 之れが吾が子であらんことを、どうぢや、解るか？お前といふ譽れと美德に燃えた雄々しい子、私も知つてゐるが何處の者でもなく、父はなし母はなし、唯だ大きな空想が宿つてゐる大きな心の子、そのお前に私が『若者よ、之れが私の子であれ！』といつたら、私が言ひたいと思つてゐるもの、私がお前にいつてゐるものは何だらう。私が言ひたいのは……

とオトベルトとレギナの兩人に、

さあよく聞いてくれ。私の言ひたいのは、怨うぢや。墓に顔を向けた憐れな老人の許で日々を過し、

且より夕になるまで空の中さながらに暮らすことは、それが美しい娘であり、又それが美しい男である時には、氣散じといふことを知らぬでもない此の老人の頭越しに、時には二人で顔を見交したり、少しは微笑み交したりする事がなければ、人の心にそむく厭はしくも恐しいものにならう。そこで私のいふのは怨うぢや。その老人はそれに心を動かされた。私にはその者同志の愛し合ふのがよく解つた。そこで、私はお前方を婚姻さしようと思ふのぢや。

レギナ (喜びに吾れを忘れ)おゝ如何しやう！

ヨブ (レギナに)私はお前の平癒をすつかり果してやらうと思ふ。

オトベルト え？

ヨブ (レギナに)お前の母は私の姪で、死んでお前を私に遺したのぢや。そこで私は其れと共に吾が子の内の第七男、あの愛し子、永遠に盗み去られたあのジョルジャ、また吾が愛した唯一の者たる最後の妻の消失も皆悲しくも見送つたのぢや。やみ問なく怨うして追ひゆく月々、季節より季節と引續く不幸、又家に入り込む彼の黒い衣を見ることは、永く生くる者に課せられた之れは刑罰ぢや。お前はせめて幸福に暮らせよレギナ。また小供等よ、私はお前達を娶はせてやる。ハットオがお前を痛むるか、哀れな鐘愛の花よ！お前の母親が死ぬ時私はいふた。『安心して死ねよ。お前の娘は私の子ぢや、だから萬一さういふ要があれば、私はこの子の爲めに血をも注がう！』と。

レギナ おゝ優しい私のお祖父様！

主 城
ヨブ 私はそれをば誓つたのぢや！

と又オトベルトに向ひ、

息子よ、お前は出て行つて、身を高め、戦さを起せ。お前は何を持つてゐなくとも、私は引出物に
ヘツベンヘツフの塔の吾が、城、カンメルベルグ采邑をやる。ネムロド、シエザル、ボンベエが進
軍した如く進軍せよ。私は二人の母を持つぞ、即ち私の生の母と吾が劍ぢや。私は或る伯爵の庶子
ぢや。だが私の功勳の正統の嫡子ぢや。私がしたようにするがよい。

と、次いで獨白にうつり、

だが悲しくも、其れは總て罪惡であつた！

と、また高聲にうつり、

吾子よ、正しくそして又善良なれ。私はこの婚姻は永いこと頭のなかに調へて居た。大丈夫、自由
の弓手のオトベルトは、自由の騎士たるヨブと縁を結んで差支へない。嘗てお前は何時か獨りで
いふてゐた。『何たる恥であらう。私は何時までも老いたる獅子の犬ぢや。老いたる伯の小姓ぢや。
彼が生きてゐるかぎり、彼の前の捕虜ぢや』と。だが大丈夫ぢや。私はお前を愛する、だが其れはお
前のためではあつても、私の爲めではない。おゝ！年とつた者は傍で思ふほど横着なものではない
ぞよ。落合つて、萬事を取りきめよう。だが私はハットオが氣がよりぢや。靜かに！此處では何も
洩らさない様に！それは刃物を弄ることであらう。

と次いで聲をひそめ、

私のゐる天守閣は城の濠に通じてゐる。私はその鍵を持つてゐるのぢや。オトベルト、今夜よい護衛

をつけて二人で立つがよい。後はお前の勝手次第ぢや。

オトベルト でも……

ヨブ (微笑んで) どうぢや、いふ事聞かぬかな？

オトベルト 伯爵！あゝ貴方が開けて下されたものは、それは天國です！

ヨブ では私のいふやうにするがよい。だが今一と言いはしてくれ。日が暮れたら、お前は猶豫
なく逃げ出すのぢや。私はまたハットオを抑へつけてお前達を追驅けて、かせぬやうにする。一方
お前達はカウベの町で婚姻するのぢや。

黙々として此の時迄耳傾けつゝありしがアンヘユマラ舞臺を去る。一方ヨブ老伯は二人の手……吾が手のし
とに執り、優しき心に兩人を見まもる。

ヨブ 愛しい者達、私には唯だお前達は嬉しいといふてくれよばよい。この私はこれから先きは唯
だ一人後へ残る。

レギナ おゝお祖父様！

ヨブ 最後の微笑のなかで最後の愛の一と言を私に言はせてくれ。お前前が出て行つてしまつた時、
吾が過去と吾が罪惡が何時も重苦しく落ちかゝつて來た時、悲しくも私はその後どうなるであらう。

とレギナに打向ひ、

何故と言つて、私の鳩、私がこの荷を擡げたとして、又しても之れは私の上に落ちて來るのぢや。

と次いでオトベルトに、

吾が附添ひの僧グニテルをお前方につけてやらう。私は萬事巧く行くことと思つてゐる。そしたら其の日また何時か逢ひに来てくれるのぢや。泣いてはいけない。私の勇氣を取つて仕舞はずにくれ。お前は嬉しい筈だぞよ、お前は！それ位の年で互ひに愛し合ふ身になつたら泣いてる年寄り一人位は何でもない筈ぢや。あゝ！お前は今二十歳ぢや。ところで私はもう神も永いこと之れから先きは苦しめて下さるまい。

と老伯は二人の手を引き放つ。

暫時私を待つてくりやれ。

とオトベルトに向ひ、

お前はあの戸は見識つて居るな。私は行つてその鍵をさがし、其れを渡しに又此處へ来る。

と老伯左り手の戸より退場。

第五景

オトベルト、レギナ、

オトベルト (心迷ひし様にて出てゆく老伯の後を見まもり) おゝ之れは何とする。あらゆるものが取り亂した私の心に紛れ込む。レギナと逃げ出す！この荒れた城より逃げ出す！おゝ、若し之れが夢なら戀人よ、私を憐れんで覺まさないでくれ。だが之れはまさしくお前であり、吾が魂である。天使よ、お前は私のいふ事は何でもきく。さあ日の暮れぬ前に逃さう。いや今此處からでも直ぐ逃げ

出さう！——若しお前が之れを知つてゐてくれたら！……！向ふには光輝くエデン、吾がうしろには深い淵！私は幸福を目がけて逃がれるのぢや、咎めの前を逃がれるのぢや！

レギナ 何をいふてるのぢや。

オトベルト レギナよ、何も心配することはない。私は逃げようよ。だがあの誓言！おゝあれは何とする。レギナ、私は誓ひを立てた。何、構ふものか！おれは逃げ出さう。脱げ出やう。正しい神よ、私を判け、あの老人は良いのぢや、あの人は尊いものぢや、私が愛するものぢや。さあ行かう、直ぐ出やう。萬事は私等に今一緒に力をかす。何ももの私の行く手をさへぎるものはない筈ぢや……

この最後の言葉の間に正面奥の廊下にグアンヒユマラ入り来る。彼女はハットオを案内し、抱擁しつゝあるオトベルトとレギナを指もて彼に差示す。ハットオは合圖をなし背後に公爵、城主、領主、兵など群をなし来る。侯ハットオは身振りにて愛人兩人を示し、又この愛人兩人は相の瞳視に心奪はれ、何ものも見ず、又何ものも聞かず。と不意にオトベルトは吾れに歸つて、レギナを後に庇ひし瞬間、ハットオは其の前に立ちほだかる。グアンヒユマラは又姿を隠す。

第六景

オトベルト、レギナ、ハットオ、マグヌス、ゴルロワ、諸城主、諸公、ジアニラロ、兵卒、次いで例の乞食、また其の後にヨブ、

ハットオ (オトベルトに) 之れでお前はすむか。

レギナ 如何しやう、ハットオぢや！

ハットオ (弓手の兵に) この男と女を引つ捕へる。

オトベルト

(劍を抜き、手で兵一同を制し) 侯爵ハットオ、私はお前がほんの一人の恥知らず過ぎ

ないのを知つてゐる！私はお前が裏切り者で、不信實で、厭な奴で卑劣であるのを知つてゐる。私はまたお前の陋い心の底に塵埃の汚水溜や又罪惡が後に残して行つた泥土や溝土が見つからぬものかも知りたいと思つてゐる。私はお前が慫うはやつてるがほんの臆病者に過ぎないのであり、これらの貴族の人々——どの人だつてお前よりいゝ！——その人々は之れから先きお前の見かけ一遍な大膽者の正體をこの私が拂ひとつてやつたら、お前の面上に出るお前の卑怯さを見るだらうといふ疑念を持つ！今私は此處でその至上の撰擇に叶ひ、由ある家の娘にしてライン伯の出たるレギナになり代つていふ。公よ、彼女はお前を拒んだのだ。そして娶らんとしたのは私なのだ。おいハットオ、私はお前に勝負を挑む、徒歩で、此處から三哩先なるウイスベルの芝生の上、獲物は何でもよし圍ひ中で、豫猶もなく、容赦もなく、助命もなく、兜と頸當ては、傍へやり、頭は裸出し、川のふちで、その打負けたものは川中へと投げ込まう。さあ殺すか死ぬるかその一つだ。

レギナ氣を失ふて倒れる。お附きの女の者ども之れを運ぶ。オトベルト吾れに近づかんとする弓手の兵の道路を塞ぎ、

誰も此處へは一步も出るな！おれは此の貴族の人々に物を言つてゐるぢや。

と次いで諸公の方に向ひ、

さあ皆聞かれたか、この山に來られた諸侯の方、ゲルハルト公、ウテル殿、ブレタイニユの侍大將、城主ゲリウス、城主カドウアラ、私はあなたの方の眼のまへで此處にゐるこの殿の頬邊を叩いてゐる。その恥ある行ひを罰するため、自由騎士たる伯爵方の面前で、自由の弓手の兵の權利を暫時私は主張するのぢや！

と彼はハットオの顔を目がけて吾が手袋を抛る。——この時例の乞食入り來つて、連席の人ごみ中に紛れ込む。

ハットオ それでお前の話は充分か。

と次いで低聲にて貴族の群集中吾が傍にありしシアニラロに打向ひ、

神は知るシアニラロ、私の劍は鞘のなかでむづ／＼してゐる！

と次いでオトベルトに、

さて今度は私からお前に言はう。お前はそれでは一體誰れぢや、吾が勇士？私に果合ひを挑むなんて、お前は王の子か、元首の子か、國境の君の子か。お前の名を唯一つ言へ。お前はそれを知つてゐるか。お前は自分で弓手のオトベルトと名乗つたな。

と次いで貴族に向ひ、

この男は嘘をついてゐる。

とまたオトベルトに向ひ、

お前は嘘をついてゐる。お前の名前はオトベルトでない。私はお前にどこからお前が來て、どんな家

に生れて、どんな價値のものだか言つて聞かさう——さて閣下よ、お前の名はヨルギ・スバダチエリぢや。貴族でさへお前はないのぢや。さて私はお前の身の上は知つてゐるぞ。お前の祖父はコルシカ人だ。お前の母はスラヴ人だ。お前は取るにも足らぬ嘘つきで、奴隷で、また家代々奴隷の小悴だ、退れ！

と次いで一坐の面々に、

貴族の方々、貴方がたの中には怎ういふ殿もあるかも知れぬ。若し此奴の肩を持つなら、それは私が皆お相手に申受ける、足には足ぢや、此處なり庭なり、手には短劍二本、胸はあらは、私は何處へでも罷り出やう。

と又オトベルトに向ひ、

だがマキ(コルシカ島内の權木帶、屢々強盜等の隠れ場所となす)から逃げ出た下賤なコルシカの悪黨、

もオトベルトの手袋を足にて蹴飛ばし、

お前の手袋は下郎にまでも投げろ！

オトベルト ふん、憐れな奴！

乞食 (一步前に出て、ハットオに向ひ) 侯爵、私は今年九十二歳になる。だがお前の頭を引つこ抜いてやらう——劍を一つ貸してくれ。

と乞食は吾が手袋を投げつけ、壁に掛れる甲冑の内一つより劍をとる。

ハットオ (からくく)と笑ひ出し、今度の宴會に道化役が一人なかつたが、やつと今頃出て來た哩、貴

族の方々、だがその年寄りには之れは一體どういふ身分の者ぢや。吾々は旅廻りの惡漢から今度は乞食の手へ渡つたわい。

と乞食に向ひ、

お前の名は何といふ？

乞食 スアブのフレデリック、日耳曼帝國の皇帝ぢや。

マダヌス おゝバルベルス！……

滿座驚愕と呆然たる様 一同皆その立てる所を離れて乞食をめぐりて大なる環を作る。乞食は頭にかけたる十字架を襜褕の間より取出し、右手に捧げ、左手は床に突刺したる劍に置き、

乞食 此處にシャルマン大帝の十字架がある。

一同の眼は十字架に注がる。暫時沈黙。次いで又言葉を續ける。

私こそは誠フレデリック、その生れたる山の主、撰を受けし彼の羅馬の王にして、戴冠の帝、の劍の捧げ手、ブウルゴイニユとアルルの王、シャルマン大帝の睡れる墳墓を掠奪し、之れがために贖罪の苦業をし、膝おりまけて砂漠のなかに二十年、泣いて呻いて祈つて過ぎし、空の水と岩間の草とに命をつなぎ、牧人共を畏怖せしめて近々らせなかつた一人の幽鬼、世は押しなべて吾れと死者のなかに下れるものと信じてゐる。併し私は吾が祖國が吾れを呼ぶのを聞く。そこで吾が心のまゝに流浪ふて思ひ耽つてゐた吾が闇所なかを立出で、今こそ私は吾が頭を地上にあけんとするものである。この私をお前達は認めるか、どうぢや。

マグヌス (傍へ寄り) お前の腕が見たい、羅馬のシイザル!

乞食 お前の一家のものが腕に焦きつけたあの三つ葉か?

と吾が腕をマグヌスに差しつけ、

さあ見よ。

マグヌス前に屈んで入念にこの乞食の腕を吟味し、次いでもとの姿勢に立ちなほり、

マグヌス 私は此處で聲言する、吾が見た眞實は其處へ私をやる、此處なる人は皇帝フレデリック

ク・バルベルスに相違ない。

一座の愕然たる様極度に達す。人の環は更に廣くなる。帝は大なる劍に吾が身を支へ一座の人々に身を向け、怒れる眼を彼等の上に放つ。

帝 お前達は私が嘗つて踵のしたに黄金の拍車を打鳴らし、この鎧を進軍したのを聞いた事があらう。お前達は私に見覚えがあらう、城主達よ、吾れこそその當の主である。歐羅巴を討ち従へ彼の朗かなる眼の女王、オットオ大帝の日耳曼を再び生れかはらしたものだ。また良き皇帝として良き貴族としてメルスブルにては三人の王に、羅馬に於ては二人の法主に、その至上の審判のため擇まれて、彼等の額を黄金の笏でもつて撫で、シユエーンには冠を、ヴィクトルには法王の位を授けたもの。またヘルマンの古き王坐を覆へし、そしてシレシヤにまたイコニヤにイサク帝とアルスラン回々教々主を次ぎより次ぎと打克つたもの。又ゼーアとビザとミランを抑へつけ、戦ひと叫びと叫りし卑しき裏切りとを防ぎとめ、その大いなる手の中に以太利の百の市を取つたもの、その間は

今お前達に物言ひかけつゝ此處にあり、その人間は今お前達の前に不意に現たのである!

と、帝は一步前へすゝむ。一同は後へさがる。

私は王達を裁くことが出来た身である、故に狼共をも狩り立てることが出来る。私はロンバルデヤの七つの市の市長共を絞りに首にした。熊のアルベエルは千の戟の兵で双向つて来たが、之れをも打破つた。私の足はあらゆる路に向つてゐる。私はこの手で獅子のヘンリイを引裂いた。彼等の公爵領をもぎ取り、彼等の所領地をもぎ取り、其の壞れ物で十四の公爵を叩へた。その後愈々四十個年間に吾が青銅の手でもつて私はライン内のお前共の天守閣を礫一つ残さず皆粉碎した。お前達は私を忘れはせぬ、山賊の輩よ、吾れ來つたのはこの帝國の苦しみを憐れに思ひ、お前達の生きとし生けるものをあらん限り屠つて、その汚はしい灰を四方の風に吹き散らさん爲めである!

と、兵卒等に身をむけ、

お前達の兵卒も吾がいふ事に耳傾けてゐるに違ひない。彼等は私のものぢや。私は之れを味方とする。彼等は今の憂き恥に身を置く前、嘗つては光榮のもとにあつた。この恐怖の時世を前にして彼等が使へるのは私のもとをおいて外になく、又數あるものはその以前の皇帝を忘れはしない。どうぢや、老兵ども、どうぢや、吾が道づれよ!

と又諸城主に打向ひ、

あゝ不信の輩よ、奸悪者、市々の劫掠者! 吾が死はお前達を蘇へらせに。併し觸れよ、見よ、聞けよ、之れは正しく吾れである!

と大股に彼等のなかに入る。一同その前を逃れ去る。

多分お前達は自分を騎士だ心得てゐるやう、『おれは偉大な男爵や大貴族の息子ぢや。で吾々もその後をついで居る』と獨り語いはう。お前達がその後をついでゐる！お前達の父親は何時にも傲然として、又つひぞ怯るんだことなく、大きな戦ひをやつて退けたぞよ。彼等は隊伍を起し、敵方が臺を壊して置いた橋は大跨に飛びこえ、槍兵や騎兵をもともせず、先頭には軍樂をつけ喇叭を打鳴らし、敵の全軍に面を合はせては、平野の戦を仕終せた。更に塔や山には如何に高くともその峻しく堅い城一つとるために木梯子一つで心が足り、吾が重味で其れを撓はせながら硫黄を流し下す壁へと足をかける。またその他には結つ玉をつけた綱をも使ひ、人より鬼のその戦士どもは、淵の暗間で夜は身をつるし、風に吹かれて山の腹に、右に左に揺られてゐる。また夜襲は卑怯とこれらの隊長どもは、晝中平地で皇帝に闘ひをしかける。そして二十に一の小勢でもつて闇間にすつくと立ちどまり、日よ登れ、帝よ來れと待構へてゐる。恚ういふ奴等なればこそ、城をも市をもまた土地をも吾が手のなかにせしめたのぢや。そこで三十年間の戦ひの後、この荒仕事の手練者を突つめて見ると、小さい者でも公の器量、大きいものでは王の器量ぢや。だがお前達はどうか——躊躇んで口黙りで賤しい狐犬か吝な野のやうに、木立や川べりの茂みに隠れ、汚い水溜りのなかや大道端で、犬でも通つて咬みはせぬかと怯々然しながら夜々物騒な路に出て旅の足音や螺馬の鈴の音をと偵察つてゐる。お前達では一人の力のない人間の頸根を掴まへるにも百人ゐるのぢや、一と打ち喰りはした兼て用意の古巢へとあたふためいて逃げてしまふ。それでお前共は自分の親共のことをい

ふ、——だがその親共は強いが中でも剛毅で、後ぐれたが中でも大きくて、皆勝利者であつたのだが、お前達となると皆泥棒ぢや！

諸城主は沮喪と噴激と驚愕の暗き表情にて頭を垂れてゐる。帝はなほ言ひ續ける。

もしお前達に鳥渡でも心があり、もし鳥渡でも魂があつたら、お前達は未だしも恚う言はれよう。『本當にお前達は餘り恥知らずぢやぞよ』と。事實またどういふ廻り合せて卑劣にも、お前共男爵よ、この盜賊といふ商賣をする事になつたのぢや。今日耳曼はその最後の呼吸を引きとる際へさしかつてゐる！……お、不面目者、悪しき子等よ、お前達はそのお前達の母を劫掠して悶絶させてゐる。彼女は涙を流し、天に其の硬つた手をあげ、弱々しい途切れ／＼の聲でお前達に恚ういふのぢや。即ち『呪はれよ！』と。この彼女が低いふ事を私は今高い聲で其れをいふ。私はお前達の帝ぢや、私はお前達のもはや客人でない。呪はれよ！吾れは今日吾が威權のもとに立ちかへる。そして吾れ自らの罰を受けた故、今は他をば罰してやる！

と、二人の國境の主プラトンとギリサに目をとめ、眞直ぐに二人の方へ進み、

モラヴィヤの侯爵、ルスサの侯爵、ラインの縁なる兩人の者よ！彼處はお前達の任地かな？お前達をこの山賊共が笑つて響應してゐる内にも、土耳其に近い東の方には馬の嘶くのが聞えるぞよ。國境へ行け、侯爵よ！さあ行ね、私はお身達が髯のアンリイと、胸甲のエルネストを忘れぬやうに祈るぞよ。吾々は城砦を護る。お前達は濠をやるのぢや、行ね！

とまたシアニラロに目をとめ、

ジアニラロ！お前の姿を見ると、私は言葉も何も出ぬわぢや。お前は此處へ何しに來た？ゼノア人よ、ゼノアへ歸へれ！

と次ぎにブレタインの侍大將に、

お前は何の用ぢやユウサア？ふゝ、ブレトン人まで此處に居る、此處には本當に世界中の傭兵が居る！

とまたプラトンとギリサの兩侯に、

國境の主は十萬マルの罰金を拂はしてやらうぞ。

と、つぎにルプス伯に、

偉大な若者も、だがその邪惡は更に偉大ぢや。お前のものは皆とりあける。私はお前の市を解放してやる。

と次ぎにザルハルト公に、

イサベエル伯爵夫人はその伯爵領をなくした。その盗人は取りもなほさずお前ぢや、公爵！お前はバアルに出て行け。吾々は其處で帝國議會を召集するのぢや。そして其の場でお前は一人の猶太人を兩手に抱へ、大勢の前で一里歩かせることにしやう。

次ぎに兵卒の方に向き、

捕虜を解き放て！そして其の奴隷の手で彼等の鎖を此の城主共の頸根に結かしてやれ！

とまた諸城主に、

おゝお前達はよも恚んな夢の覺めやうは待設けはしなかつたらう。お前達は杯片手に愛と永たらしむ饗宴の唄をうたつて居た。お前達は大きな叫びを放ち、歡喜のなかにゐた。お前達は其の餌食に心樂しげに吾が爪を突込んでゐた。お前達は吾れには斯くも親しみ深い民のものを、痛しくも引裂いてた。そして肉の片々を分けあつた！それが今不意に……、今不意に此の人の這入り込み様もない巢窟に怒つて身が慄へおのゝく恐しい復讐者が現はれた。皇帝はお前達の塔の上に足をかける。一羽の鷲は來つて秃鷹の群りの中に身を落して來た！

一同は唯だ驚慌と恐怖に打たるゝ體に見ゆ。このあたり少し前よりヨア入り來り黙々として騎士の中にまぎれ入る。マグヌスは帝の言葉を唯一人些かも混じることなく聞き、また帝は語るあひだ彼を凝然と見まると止めずありしが、このバルベルスの言葉終るや、彼は更に頭の上より足のさきまで今一度熱視して、不意にその顔に歡喜と狂暴の相を帯び來る。

マグヌス (皇帝に目を据ふ) さうぢや、正しく之れは皇帝ぢや！——皇帝は生きてゐた。

と、彼は凄じき手振りにて兵卒や貴族を拂ひのけ、舞臺眞正面に進みゆき、六段の階段を二た足にて飛びあがり、廊下壁間の追間に双の拳をかけ、雷のごとき聲にて外に叫ぶ。

哨兵を三倍にせよ！弓の手の者は天守閣をまもれ！石の手の者は城の兩翼にまはれ。門はあけよ。釣格子は降ろせ。大弩には彈をこめよ。窪地には千人伏し、道間には千人つけよ。兵卒等よ、森に走り出で、花崗石と大理石を切り出し、その内一番巨大な石材をとり、その内一番巨大な材料をとり、この世に恐怖をまく彼の山上に、皇帝をあぐるに足る首切り臺を吾が家のために一つ作れ！

と次い、下に降り来り、

皇帝は向ふから身を委せて来た。彼は捕虜となつた！

と兩腕を組んで、帝を眞面に見まもり、

私はお前を不思議に思ふ！お前の配下は何處にゐるか。その帝國の宿の取定め役は何處にゐるか。吾々はお前の喇叭が吹奏されるのを直ぐ聞くことになるだらうか。お前は自分を破滅せしむべき天守閣にのほつて、その北風吹きすさむ廢屋の内でルベツクの時同様鹽を撒き、ビザの時同様麻を撒くのか。併しそれは何である、私の耳には何も聞えない。お前は此處で唯だ一人ゐるのか。軍隊はないのか、おゝシイザル！私は之れがお前の常例の業であつて！手には劍をさけ、門を突破つて唯だ一人吾が名を高く呼ばはりながら、タルスやコリをお前が取つたのも、この種のものであるのを知つてゐる。ゼノア、ウトレヒト、廢類の羅馬を攻略するには、お前の足を唯だ一步出せば足りた。お前の叫びを唯だ一と聲出せば足りた。イコニヤはお前の前で膝を折つた、ロンバルデヤはミランで鐵の葉の木々がお前の地獄の呼吸で戦くのを見たら、慄へあがつた。吾々は之れを皆知つてゐる、併しお前の方は吾々が何ものであるやを知つてゐるか？

とマグヌスは兵を指さし、

私は今しがた此の者共に『老兵よ、道づれよ』とお前のいふた事は聞いてゐる。其れは至極結構な言葉ぢや。だが唯だ一人も動かなかつたのは如何したことぢや。此處ではお前は何でもないのぢや。恐れられるのは吾が父一人であり、愛せられるのは吾が父一人である。彼等は神のもとに出る

前にさへ、伯ヨブのもとに出るのぢや！シイザルよ、客人は盜賊にとつても神聖なや、だがお前はもはや客人でない、お前自身で既に之れは言つた。

とヨブを指さして、

聞け、お前の見る之れなる老人は、之れは吾が父である。お前に三角の鐵の焦き印をおして、お前の額に塗られた彼の神聖な油よりも、この蔑すみの記號を名高くさせたのは、この人ぢや、お身達二人の中の怨恨はお身達二人の年と共に古い。お前は彼の首に代を賭けた。彼もお前のものに代を賭けた。然るに今彼はそれを持つ。お前は此處に唯だひとり素手素肌で現はれた、おゝホオヘンシユタウフェンのフリツツ、吾れ等一同に仔細に眼を向けよ！おん身が此のドリウス、カドウアーラ、ゴルロア、ハットオ、マグヌス等の猛しき騎士の面々が黙々と居並ぶ環の中に、またタヌスの城主偉大の伯爵ヨブが這入つて来たことば——吾れ誠におん身を憐れむがゆえに斯くはいふ、——おん身のためには寧ろ悪い、おゝブウルゴイニユとアルルの王、何人を相手に今語りつゝあるやも知らず、血まよふたとてあるべき筈の見さかるもなき皇帝よ、おん身の此處へ這入つて来たのは、彼の夜が葬禮の翼をひろげ、おん身のまはり所在の奥所に、おゝ王よ、不意に獅子や虎やが闇間より立ち現はれる彼の阿弗利加の洞窟よりも未だ未だ悪い。

マグヌスの語り續くる間に、諸城主の人垣の環皇帝をめぐるにせば余るにせば来り来る。城主の背後には鼻の先きまで甲冑に身を固めし兵卒等黙々として三重に重りあひ、頭上に大なる城の旗をさゝぐ。黒赤染分けの旗にして赤地に銀糸もて刺繡せる斧を縫ひつけ、この斧の下に *Monti comam, viro caput* の文字

銘記しあり。皇帝は一步も後へひかず、威儀嚴に此の群集に對す。と、此の時マグヌスの言葉終るや、城主の一人不意に劍を抜く。

カドウアラ (ハその劍を引き抜き) シイザル! シイザル! シイザル! 吾等が城砦を吾々にかへせ!

タリウス (之も續いて劍を抜き) 燕の巢と化した吾れ等が城を!

ハットオ (劍を抜き) 濠の蘭草を吹き渡つて、冷き夜風が嘆くとき、此の天主閣を訪れる吾が死に

失せし友をかへせ!

マグヌス (その大劍をとつて) あゝお前は墓から出て來た、併し私はまた突き戻してやる。時は來の

間ぢや。バルベルス。世は百千の聲々に『彼は生きたり』と語り傳へて言はうとも、反響はかへして『彼は死ねり』といふ。——そこで身をわなゝかせよ、吾れ等が頭上を脅かす亂心者!

諸城主は劍を高く上げ、凄じき叫びをあげてバルベルスを推し行く。ヨアその群集中より出で、手を揚げる。一同靜まる。

ヨア 帝よ、吾が子マグヌスの言葉はあれは誠ぢや、帝は私の敵である。嘗つて噴れる武士として、往昔帝の身に手を置いたのも其れは私である。私はおん身を恨む。併し私は日耳曼の出現を欲す。吾が祖國は今深い暗へと打のめり、傾いてゐる、あゝ之れを救へ! 私はこの場で膝打ちしき、神を導く吾が皇帝のまへに跪く!

と伯はバルベルスの前に跪き、次いで諸公諸城主の方に半ば身を向け、皆々跪け! — 劍を下に打握るよ!

一同マグヌスの外皆劍を棄て、身を伏せる。ヨアは跪いて皇帝に語る。

おん身は打ちのめされたる國民には大切な身であり、またおん身一人が大切な者であり、おん身なくては國が安危の際にのぞむ。日耳曼には今なほ二人の人あり、それはおん身。私である。おん身と吾れあれば他は不用ぢや、帝よ、統御せよ。

と、ヨアは一坐の面々を身振りにて指し示し、

之れ等のものには私に言葉をまかせよ。彼等は若い、彼等を容し給へ。

と次いで未だ立てる儘なるマグヌスに、

マグヌス!

マグヌスは執れとも決し兼ねる様にて、躊躇ふ。父伯は身にて制す。マグヌス急に身を倒し跪く。ヨア伯

また言葉を續ける。

男爵と百姓、兜かぶれる額かぶの者と裸足の足の者、即ち獵り手と働く者は絶えず怨みを交す。そして山の手輩は平地のものに戦ひを仕掛けて行く、之れはお前共も知つてゐる。だが私は苦もなく此の是非は見わけやう。之れは男爵がたが悪いのぢや、山の手輩に咎があるのぢや!

次ぎに立上つて、兵に向ひ、

奴隸を解き放て。

兵等は黙々として命に従ひ、此の景の間、舞臺正面の廊下りやに集れる囚人の鎖を解き放つ。ヨア伯再び目を開く。

御身達、諸城主よ、シイザルの命によりこの囚人の鎖と枷を取れ。

諸城主怒つて起ちあがる。ヨア殿なる威様にて彼等を睨む。

先づ私よりかけよ。

と一人の兵に吾が首に鐵鎖りをかき手つきをなす。兵頭を垂れ、眼をそむける。ヨア再び手を以つて示す。兵命に従ふ。他の城主も各何ら抗ふことなく鎖かけらるゝ儘になす。ヨアは頸に鎖をかけ、皇帝の方へ身を向け、

おん身の欲するものになりて一同此處にあり、威嚴ならびなき帝よ。年老いしヨアはその持城の宮殿内にあつて奴隷たり、そしておん身にその頭を捧げる。若し嵐と之まで闘つた額がまたしも哀憫に値ひするものなら、主よ、吾がいふことを耳に入れよ。即ち此の後もし帝が國境の戦ひに赴くとあらば、あゝ王よ、吾れ等に免しをあたへ、吾れ等に最後の恩恵を施し、物の具つけし隊伍たると共にあくまでも囚人として吾れ等を引連れよ。吾れ等はその鐵鎖りを具けてゐる。併し又悲しくも又しこやかにおん身の敵なる最も勇剛なるものにも、又最も野蕃なるものにも顔と顔とを突きあはず。そして敵は匈牙利人にもあれ、ヴァンダル人にもあれ、マヂヤアル人にもあれ、春の霞や冬の雪より數多くとも、また原野の穀物よりも繁くとも、おん身は吾等が打しほれ、眼は下にさけ、今は噴怒とかはる苦き悔もて魂を充し、おん身の前の雲霞の勢を血まみれの手をし鐵鎖をかけ物凄じくも追ひ散らし、——それが私の憤ひである！——その頸枷にては囚人たり、その劍にては勇士たる吾等一同を見るであらう！

城内の弓手の兵の隊長、ヨア伯の方 進み、伯の指揮 受りんとして低頭し、殿……

ヨアは頭を振つて、皇帝に申出でよと指もて示し、舞臺中央に不動の姿にて黙々として控ふ。隊長は皇帝のかたに向ひ、恭しく敬禮す。

皇帝……

帝 (諸城主 指し、獄屋に引け！)

兵卒等 帝の手眞似に依り居残れるヨアをのぞき、貴族を引立て行く。一同すべて退場。彼等たゞ二人となれる時、フレデリック帝はヨアに近寄つて、鎖を解く。ヨア呆然として帝のする儘にまかす。暫時沈黙。

帝 (ヨアの顔をうちまもり) フオスコ！

ヨア (愕然として身をふるはし) おゝ何と！

帝 (指を口にあて) 何もいふな。

ヨア (獨白) おゝ如何したことぢや！

帝 其方の前晩行くところへ行つて、今私を待つて居よ。

第三幕

消滅の洞

圓天井の頭の上低き暗き洞窟、打濕りて物凄き様子。年ふりて蝕けたる襦袢の壁かけ壁上加りあり。右手には鐵格子はまれる窓ひとつあり、その内三本の鐵棒打砕かれて手荒く引き裂られし體あきらかに見分けらる。左手には荒削りの石造の卓子腰掛け各一つ宛。正門暗間には廊下らしきものあり、落ちこみし天井を支ゆる數個の柱透見らる。時刻は夜。窓より、月の光入り、反對側の壁に劃然せる白き影を描く。幕あくと洞にはヨブ一人石の腰かけに坐し、暗き物思ひに沈み居るさまにて据えあり。點火せる燈一個足もとの敷石置かる。伯は灰色の粗毛布にて作れる一種の衣を着しあり。

第一景

ヨブ 唯だ一人

皇帝は私に何と言つた、また私はそれに何と答へた？私は何も解らない。——さうぢや少しも解らない。私は聞き違へをしたのだらう、昨日以來私のなかには唯だ闇と疑ひがあるはかりぢや。私は

蹣跚き蹣跚き思ひついたやうに進む。すると私の路は足のしたで直ぐ消えて行く。でも私は行く、この悲しい年寄り……。こころで眞の姿は霧にかくれてしまひ、空しく影のなかに沈んでしまふ吾が錯つた眼は、夢のなかさながらに薄ぎぬの奥でふるへてゐる。

と深い思ひを辿り、

悪魔といふものは小氣をはたらかして色々なたくみをする。さうぢや、あれは紛ふべくない皆夢ぢや。さうぢや夢ぢや。だがその夢は怖い。悲しくも三重の刃に突き刺された吾が心は、美德が睡れば、罪惡が何時もさうした夢を作り出す。人は若ければ勝利を夢み、老ゆれば刑罰の夢を見る。運命の二つの端の二つの夢、——最初のは嘘ぢや、では次ぎのは眞か。

暫く間、

私の今知つてるものと言へば、この何人にも犯させぬ吾が家が一切顛倒したことぢや。フレデリック・バルベルスが吾が家の主になる。おゝ、それは苦痛ぢや。——だが何關はう。私は立派にやつてのけた、私がしたのは正しかつた。私は私の祖國を救つたのぢや。私は吾が領國を救つたのぢや。とまた深き思ひに辿り、

皇帝よ！おん身と吾れとは互ひに一人の幽靈になり合つてゐる。そして消え果てた世の二個の巨人として、殆ど眩み切つた眼でもつて互ひに見まもてゐる。事實またこの深淵に残つてゐるのは、おん身と吾れと唯だ二人ぢや。吾々は過去の二重なりの暗い頂なのぢや。そこで新しい世紀は一切を水の底めに沈めてしまつたけれど、その波は吾れ等が面を覆はない。それは彼には余りに高くて手が

及ばないからぢや。

と次第にその幻想に沈みゆき、

その一つも今は倒れかゝつてゐる。それは私である。暗い影は私をおかして来る。おゝ恐しい出来事ぢや。吾が山の顛覆ぢや。明日になつたら古い日耳曼の世の父なるライン河は、この異變や経過や、また老ヨブと老バルベルスの荒い猛しい地響き、その偉大な勝負もいかにして終れるやを語るであらう。私は最早や明日になつたら、子もなし、配下のものもない身となる。廣大な闘ひよ、さらば！黒い襲撃よ、さらば！光榮よ、さらば！明日耳をすましたら、通行人が途上で私を嘲弄し、私を嘲笑ふのを聞く。そしてありとあらゆる者が、恚ういヨブを見る。つまり百年の間嗣をとなへ、ラインの岩一つ一つを足にかけて護りおふせたヨブ、——シイザルが來ても羅馬が來ても呼吸をついて生きてゐるヨブ、——そのヨブが帝國の鷲によつて打克たれ、生々ながら推しつぶされ、そして今は何れも近寄ることの出来る伏せり姿の大獲物となつて、この最後の城主がその最後の岩に釘づけされて人目に出る！

と言つて立ちあがり、

はて、それが伯のヨブぢや。其れが打倒された私の身の果ぢや！……傲慢よ、静まれ！せめては墓でもう物いふな！

と吾が身のまはりに目を放ち、

それは此處ぢや、胸をとゞろかして物いふこの壁の下、そして下度恚ういふ夜……おゝ今では永い

昔ぢや、でも何時も昨日のやうに思はれる！おゝ身の毛もよだつ恐しさよ！

と、再び石の腰掛けに身をおろし、双の手もて顔を覆ひて泣く。

あの日以来私の罪惡はこの圓天井のしただ、人のいふなる彼の悔恨といふものゝ血の汗を、滴をなして垂らして居る。私が死人と耳あてゝ話をするのも此の場所ぢや。あの時以來おゝ神よ、一と夜まんぢりともせぬ不眠が鉛の指をば私の喉の窪みに置き、よし眠れたときも吾が睡りを、紅い血そゝいで二つの影が、絶えず横にと過ぎて行く。

と起ちあがつて、舞臺前面に進み來り、

世は私をば偉大と思ふ。山々はその雷の音の遠退く中に、齡百歳になるそのねぢけ者が擲の眞白くなるのを見た。歐羅巴はまたその峰々にすつくと立ちはだかる吾れをば稱へる。だが殺人者は何ものをなすを得やうが、その禍事に塞がられた良心はつひぞ吾が光榮を以つてしても騙かれはしない。民のものは私を勝利に酔ふてゐると思ふてゐた。併し夜、——この六十年越しの夜といふ夜、私は此處で非嘆にくれ、悔の膝をば折つてゐたのぢや！尤も斯くも名高いこの城の眞黒、——此の四方の壁は吾が充ちみてる表面の偉大よりして、その忿怒と悲哀の内部を見ぬてゐた。喇叭が吾がまへにて長い調べで響きわたり、私は力に満ちて前に行き、旗を高く掲げ、朝廷に對しては伯であり、吾が家の巢にあつては獅子である。併し吾が踏む所が一切空しかつた一方に於て、この顔向けならぬ醜くゝも恐しい一寸法師、即ち吾が罪は私の中に巢を食ひ巨人となり、吾がき頭が賞めたゝへられる時冷笑ひ、心の底で吾れを狡み、私に叫んで『憐れな奴め』といふではないか？

と次いで両手を上にあげ、

ドナト！ジオヴラ！劍の餌食！お前方二人は神が吾々を取るとき、この屠殺者を容してくれるか。お、石の上に膝ついて胸を打て、泣け、悔いよ、祈りに魂を充たして命をつなげ、それでも未だ足りぬ何事も私を免してくれぬものはない、さうぢや、私は自分が呪はれたのを知つてゐる、永遠に葬られたのを悟つてゐる！

と再び坐りなほし、

私は孫子も持つてゐた、又先祖もあつた。だが私の城も亡び、吾が子は老い、その子の子供はまた皆裏切り者ぢや。でもあの末の子、——あれは私は見えなくした、あの最後の寶を！オトベルトとレギナ、吾が心が弟に愛むので、又あの娘が神々しいので、私が今なほ愛して來たもの、あれも私の破滅の風のまゝに、多分は吹き散らかされて仕舞ふたのぢや。今まで探して見たなれど、二人そろふて姿を消したもうよい。死なば皆々一緒に死なう。

と帶より短劍を引きぬき、

私の心は始終誰れか此處で私のいふ事を聞いてるやうに思ふたものだが、

と洞窟の奥に向きなほり、

だが私はこの場に當つてお前に頼む、容してくれ、お、ドナト！私の死ぬまへにお前の情をかけてくれ！ヨブはもうゐない。今あるのはフォスコぢや。お、このフォスコを容赦してくれ！

何ものかの聲

（暗中より。唸くが如く弱々しく）弟殺しのカイン！

ヨブ

（慄然として）誰れか物をいつたやうぢや。——いや反響であらう。誰れか私に物言ひかける

としたら、それは墓の中からした事ぢや。この細長い地下の室に、この日の目も差したことない秘密の廊下に、生あるものでは私を置き、誰れも今日では這入る術を一人と知つた者がない。知つてゐる人は六十何年か前夙に死んでしまふてゐる。

と舞臺奥のかたへ足を一步出し、

お前が方へこの手を扼つてさし出す。殉教者よ、フォスコの罪を免せ！

以前の聲 カイン！

ヨブ （驚愕として、ひたと立ちどまり）之れは不思議ぢや！確かに誰れか物いふた。だがさういふお

前は影でもあれ、幽霊でもあれ、お前に私は頼むぞよ。さあ打て、私がフォスコと言つた時、私に

答へるその反響を、この眞黒闇の穴なかの恐い反響を今一遍聞く位なら、私は一と思ひに死んで

しまふぞよ。

その聲 カイン！（夜も奥の深き所にて掻き消ゆるが如く弱々しくなり）弟殺しのカイン、カイン！

ヨブ あの大きいなる神よ、大きいなる神よ！私の膝は下へ折れ曲る。之れは夢ぢや！狂氣に變るこの苦痛が、最後に地獄の酒で私を酔はすのぢや。お、私の中の悔恨のうちから、苦い笑ひが聞えて來る。さうぢやこの恐い夢こそ之れから後々引續いてやつて來て、吾が身をひしぎ、此の物凄場所、場所で層一層醜惡になつてくる夢なのぢや。お、墳墓のなかより出づる其の薄氣味わるい聲、私は此處に慙うしてゐる。如何いふ間に此處で私は答へたらよいのぢや。如何いふ申譯を其方は私に欲

しいのぢや。語れ、言ひのがれなどせず答へてやるぞよ！

顔覆ひツエールをかけ黒衣をつけたる一人の女、舞臺の奥よりランプを手にし姿を現はす。左手の柱後方より彼女出づ。

第二景

ヨブ、グアンヒユマラ

グアンヒユマラ (顔覆ひをかけし儘) 『爾たんぢはその兄弟はらからに何事をなしたるや？』

ヨブ (恐怖しつゝ) この女は之れは何ものぢや。

グアンヒユマラ 向ふでは女奴隸、だが此處では女王。伯爵よ、人は彼れ之れ廻り持ちぢや。お前は此の城が二重の作りで、この巨い幾つかの塔などはその室々の下がさらに洞になつてゐることを知つてゐらう。その内日が照るところは皆お前の律おきてのうちぢや。だが暗を充してゐるそれら、おゝ城主よ、之れは皆わたしのものだぞよ。

と彼女は徐ろに伯の方にすゝみ、

私はお前を掴まへた、もう私の所は逃げられぬ。

ヨブ お前は何者ぢや、女。

グアンヒユマラ それには恥知らずな一つの所業を知らせてあげよう。其話は……—すつと昔、その後數多の者が死に失せた昔のことで、今百歳を數へるものが、未だ三十代の頃のことだが——

と洞窟の片を指さし、

二人の戀人同志は彼處あそこにゐた。さあ此の室によく目をとめよ。時は丁度今夜のやうな九月の一夜ぢや。寒い月の光が暗い部屋内にさし込んで、眞白い壁に死人の經帷巾けいゐきんを描いてゐたが……

と振向いて月光に照らされたる壁を伯に指さし、

とんと其の儘ぢや。と此のとき不意に劍を提けて……

ヨブ 容してくれ！澤山ぢや澤山ぢや！

グアンヒユマラ お前は此の物語は知つてゐるな。でもよいわ、フォスコ、あのドナトが劍を刺されて倒れた場所は、

と石造の腰掛けを指し、

此處ぢや。——そして刺した手といふは、

とヨブの右手を掴み、

之れがさうぢや。

ヨブ それを叩いてくれ、だが口はもうきくな！

グアンヒユマラ そして抛り込んだ其の場所は……

と窓の方へ伯を荒々しく引立て行き、

主 城
さあよいか、此の窓ぢや。あのお附きの騎士のシュフロンダチと、その主のドナト。ところて兩人の死骸を通してやるため、

と彼女は腐蝕せる三本の鐵棒 指し、

その人斬り役の一人が鋼鐵の手でもつて、その鐵格子を打ちこわした。

と再び伯の手を抑へ、

その手は今日では葦の葉も同然だが此處にあるぞよ、伯爵！

ヨブ 容赦してくれ！

グアンヒユマラ あの時誰れかも容赦を願つたのぢや。おゝ恥しい！一人の女が手を振りしほつて、

慈悲を叫んだのぢや。だが殺害者はせゝら笑つてその女を縛りあけ……

と足にて唯ある敷石を示し、

此處のところぢやぞよ！それからわざぐゝ自分で手をおろして、奴隷の足枷を女にはめた。その枷は此處ぢや！

と着物の裾をまくつて素足にし、かと緊め込みたる枷を示す。

ヨブ おゝ其方はジネヴラか！

グアンヒユマラ 死んだ顔、凍んだ手、窪んだ眼。さうぢや、私の名前はコルシカの言葉では美しいジネヴラぢや。でも此の険しい北國ではそれをグアンヒユマラにした。私等を凍らせ、私等を鎖

寄らす老と其の他の北の諸國は、優しい眼の娘を生きた色ない幽霊にした。

と顔髷ひをあげて其の棘々しく凄き形相をヨブに示し、

お前はこれから死なしてやるぞよ。

ヨブ 慈悲ぢや！

グアンヒユマラ でも老人、慈悲を乞のは未だ控えたがよい。……お前の息子のジョルジは生きてゐるぞよ。

ヨブ おゝ、何といふ？

グアンヒユマラ あの子を引摺つたのは餘人でない、この私ぢや。

ヨブ おゝ上天の加護！

グアンヒユマラ 彼の子は頸に慙んな環をかけてゐたぞよ。

と胸の奥より小兒の黄金と眞珠の飾りの小さき頸環をとり出し、伯に投げつける。伯は拾ひあげて接吻を浴せ、ついで不意に下に跪づき、

ヨブ 憐憫ぢや。私はお前の足をも抱いて接吻しやう。あの子を私に見せて貰ひたい！

グアンヒユマラ 其れも之れから見られやう。その子こそお前を此處で一と突き刺し貰くため、これから此の場へやつて来る。

ヨブ (慄然として起上り)おゝ如何したことぢや。産みの父親を殺す了見を起させるなどゝ、お前は憤怒にまかせて鬼にでもその子を仕立てたか？

グアンヒユマラ それは餘人でない、オトベルトぢや。

ヨブ (兩手を組んで天にさし)おゝ祝福されよ、吾が神！私はさうと兼々夢てゐた。だが彼れには一切のことは皆貴い。彼れは邪惡が少しもない。お前は愚かしくも吾がオトベルトに見込みをつけ……

グアンヒユマラ いやよく聞け。お前は目を目掛けて進んだが、私は自分の路を夜分拾ふ。お前は私が匍匐はらばつてちり／＼進んでることなど、気がつくまい。蛇のとぐろの中ちや、フオスコ、眼を覺ませ。皇帝のことでお前が夢中になつてゐる間に、私はレギナのところへ行き、お前の部屋へ這入り込み、また別にあの娘には強い薬を私の術策てんざてで飲ませて置いた。で、私は今あの娘を連れて唯だ二人ゐる……さああれに暫く目をとめよ！

奥のかた右手の廊下より覆面の黒衣の男兩手に黒き布切れもて纏むすひし棺を運びて入り來り、舞臺の奥のかたへと除かに横切り行く。ヨブ兩人の方へ走り寄る。兩人の者立ちどまる。

ヨブ おゝ之れは棺ぢや！

とヨブは慌然として黒衣を取る、覆面の者共はヨブの爲すがまゝに任す。伯はその死體を捲ける布を取去り、中なる蒼白おちての面を見る。中なる人はレギナなり。

おゝレギナ！

とまたグアンヒユマラに向ひ、

人非人ひとでなし、お前は之れを殺したのだな！

グアンヒユマラ いや未だ殺しはせぬ。慙なげういふ業は私の始終することぢや。この娘は一切の人間には死んで見えやうが、伯、私の眼には睡つてゐるのぢや。若し私がしたいとなれば……

と蘇生の身振りをして見せる。

ヨブ その覺醒めざめには何がお前に入用ぢや。

グアンヒユマラ

お前の生命いのちちや、それはオトベルトが知つてゐる。執とちらを採とるも彼の心こゝろにある、と次いでその右手を棺にのばし、

不正が後に残す永遠の惱みにつけて、黄金の空と、焦きこける太陽のコルシカにつけて、早瀬に眠る彼の冷つめたい骸骨につけて、また鉛色の血潮のあとを呑んでこの壁にかけて、私は誓ふ、此處なるこの棺の空からになることなきを！

棺の擔かぎ手なる兩人の者は再びもとの動作にかゝり、その入り來れるとは反對の側 姿を消す。

ギユアンヒユマラは次いでヨブに、

また彼の娘かお前かを彼が選かまんことを！——もしお前がこの兩人を棄て、逃れるなら、逃げたがよい。さすればオトベルトとレギナは兩人共死んでしまはう。二人は私の支配にある。

ヨブ (兩手をもつて吾が顔を覆ひ おゝ、恐しい！)

グアンヒユマラ お前は人にされるが儘にさせて死ねよ。さすればレギナも助かるのぢや。

ヨブ だが待つてくれ、之れが一つの吾が願ねがひぢや。死ぬことなどは何でもなし。私をとれ、壽命を取れ、血をもとれ。だが清淨潔白なものには罪を犯させるな。女よ、犠牲は唯一人で満足して私には今違つた世界が目に見えて來るのぢや。私の罪が此處この闇黒くろくのなかに又山の下に地獄の芽を生やし、その醜怪な毒蛇の巢が鬼に引つ搔き廻されてゐるのが見える。ところでこの蛇共はこれこそ吾が抜き放ちた劍が敷石の上に、したゞり落した彼の因果いんぐわな滴しづくから生れ出たものぢや。人を殺した者は後日その惡を刈入れる種の蒔き手ぢや、私はそれは覺悟をきめてゐる。お前はそこで地獄

の環のなかに私を取り込んだ。だが此の上に何が欲しい。私はお前の餌ではないか。それは正しい。お前はよくやつた。私は歡んでお前を迎へる。この私といふ者は子には呪はれ、孫曾孫には呪はれた身の上ぢや。だがその子は容してくれ、その末の子を！——如何したことぢや、お前はあの清らかで氣高くて汚點のない身で彼を此處へ這入らせて置いて、今度はカインといふ私の負ふてるやうな恐しい目じるしをつけて、出してやらうといふのか。ジネヴラ、つまりお前はこの私といふ老い果てゝ唯だあの子一人が自分の希望であつた者の私、乃至はまた既に吾が墓が身に近づいてるのを感じてゐた者の私から、彼れを取つてやらねばならぬと思つたので、——私は此處でお前を誑らうとはちつとも思はないが——とう／＼お前は攫つて行つて、別に苦しめるといふこともなく、お前の傍であの可憐な美しい子を勞つてゐたのでないか。たゞお前の幸福は私は羨しい。彼の子が世の中の事を根掘り葉掘り聞きたいとて鷺の眼を見開くのも、お前の温い胸をその美しい額で探すのも、乃至はその若々しい魂の生ひ立つのも、お前は皆見られたのぢや、……だからあれはお前の子ぢや。私と等しくお前の子ぢや、私は眞實これはお前に誓言するのだぞよ！おゝ私はもう之れ迄の間に數々苦しんだ。それは確かにさうぢや、私はこれで罰せられたのぢや！人が來てジョルジが見えなくなつたとか、誰れか連れて通つたのを見たとかいふ知らせを受けた日……私は自分が狂亂したと思つてゐた。私は誇張はしない。人は皆之れは知つてゐる。私は唯だ一と言『失くなつた子よ』と恚うばかり吐鳴つてゐた。想像してくれ、私は敷石の上に倒れたのぢや。——哀れなる！——その子のことを思ひ出す。するとその子は薔薇の間を走つてゐる。戯れてゐる。どういふものも之れ

程懊惱させるものではないか。苦しんだか苦しまぬか判断して見よ。だが私の惡にまさる慄然とする惡はさせてくれるな。未だ清らかで神々しいその魂を汚してくれるな、おゝ！もしお前の胸に心臓の波打つてゐるのがお前に聞えたなら……

グアンヒユマラ 心臓？私にはもう其んなものはない。お前が私からむしり取つて仕舞つたのぢや！

ヨブ さうぢや、私とてこの隠れた墓で奇麗に死んでしまひたい……彼の手にかゝらす。

グアンヒユマラ だが此處では兄が弟を殺したのぢや、息子も親を殺すであらう！

ヨブ (膝まづき、腕をとりしぼり、グアンヒユマラの足に搦みつきつゝ) 如何いふ憂き目も忍ばう頼みぢや、他の死を私に定めてくれ！

グアンヒユマラ あゝ呪はしい！私もさうしてお前に頼んだ、膝を折り曲げ、腕を露き出し、身も世もあられなく、物狂はしくさういふことをお前に言つた、果ては氣も心も取亂れて立上り、『私はコルシカ人ぢや』大聲に叫んでお前を嚇しつけた、それをお前は覺えて居るか。その時お前の犠牲者を濠に投げ込み終つて、異様な笑ひを含ませながら、足で私を推しこくりお前は私に恚う言つた。『出来るものなら、この返報しろ』と。そこで私は今それを返へす！

ヨブ 依然膝づきし儘 私の子はお前に何もしない！容赦せよ！私は泣いてゐる……これ此の通りぢや！私が嘗つてお前を愛したのも考へてくれ。あれは嫉妬ぢや！

グアンヒユマラ お黙り！

と眼を天の方にやり、

恐れ縮む戀人同志を深い淵に掻消やしてしまふといふ、未だ此の上の悪い事を散々してゐながら、この膽冷えるもの周圍を取りかこむ慕のなかで、未だしもお前の神聖な名、愛を厚かましく口走るなど、これは大それた了見ぢや！

と又ヨブに向ひ、

成程、だが私とて今空虚になつて居る心の中に昔愛したものがあつた。さあ私に私のドナトを返へせ！彼の人を返へせ、弟の殺戮者！

ヨブ 打沈みながらも思ひあきらめし體にて身を起し、オトベルトは其の父を殺すことになつて居るのは知つて居やるか？

グアンヒユマラ いや。レギナを救ふため闇の中で、お前の素生も知らずに打つであらう。

ヨブ オトベルト！なさない夜ぢや。

グアンヒユマラ 首斬り人同様、彼は唯だ途ある一人の罪人を仕置きしてやるのだと心得てゐるのぢや。其の余は更に何も知らぬ。若しその氣があつたら、顔を覆ひ、口を嚙み、物を言はずに死ぬ。その方がよいぞよ。

と其の黒き頭敷ひをとり、老伯に投げる。

ヨブ (その顔覆ひを掴み) おゝ忝けない。

グアンヒユマラ 何か足音が聞えるやうぢや。お前の魂を神にさしける。あれはあの男ぢや。私は

歸へる。だが話は皆聞いてゐるぞよ。レギナは私の巢に預つて置く。二人ともさつさと事を御さしよ。

と奥の方左手、彼の棺を擔ぎし者共の見えなくなりし所より退場。

ヨブ (石の腰掛けの傍にくづ折れて) おゝ正しき神よ！

とヨブは黒き巾にて顔を覆ひ、祈禱の姿勢にて其の儘静止し居る。右手の廊下より最前の兩人のものゝ如く黒衣をつけ、覆面をなし、炬火を持てる一人の男入り来る。彼はその後に従ひ來るも、中に入れといふ合圖をなす。この従ひ來れる男はオトベルトなり、顔色蒼白、心とり亂れ、放心せる體。このオトベルト入り來れる折りも、また彼が物言ひかける時も、ヨブは些も身を動かさず。オトベルト入り來ると共に、彼の覆面の男は忽ち姿を消す。

第三景

ヨブ、オトベルト、

オトベルト お前がたは何處へ私を連れて來たのぢや。この暗いところはこれは何ぢや。

と身のまはりを探り見て

や、失敗つた。覆面の男はもうゐぬやうぢや。之れは如何する、私の今ゐるところは何處ぢや。此の邊が知らん。——おゝ、もう來たのぢや！慄然とする。あゝ眼が昏む！

と此の時ヨブの姿目に入り、

あの黑暗中くらがりなかに見えるのは彼れは何ぢや。おゝ何でもない。よく聞といふものは、

と黒闇々たる方にヨブを目掛けて進み、

見間違ひをするものだが……

とヨブの頭に手を置き、

おゝ居た！正しく生きものぢや。

ヨブ依然として身を動かさず。

之れは如何しやう。私の身は罪の汗の爲めまるで凍えてしまふやうぢや。此處は之れは首斬り場か、之れなるものは之れはその餌か。不運なフオスコ、之れが今日私が斬ることになつてゐる人ぢや。おん身はさういふ名の人か？答へよ……—何も言はぬ。正しくそれは此の人ぢや。お前は誰れであらうか、物を言つてくれ。私は身も心もぞく／＼する。私はお前に何も用があるのではない。私は何も知らぬ。私は何故お前がさうやつてぢつとしてゐるか、又何故私の前で景色ばんで立ちもしないのか解らない！私はお前が私の知らぬ人なやうに、お前のまた知らぬ人なぢや。だがせめて此の私の手が恠ういふ事のため出来た手でない事は、察してくれ。私は或る怖い復讐と或る黒い刑罰の道具なのぢや。お前はその死の襲に私を取り込んで、この闇間を引く經帷巾が私の足を踏みなやませてゐるのを知つておくれか。はて、お前は私の戀人、あの天使、その面が私の心に浮ぶと日の光に逢ふ氣がするレギナを見覚えてゐるやうかな。彼の娘は私が、り終せなければ死、殺してやれば助かる事になつて、拖布まきぬにくるまつて彼處にゐるのぢや。私を不憫に思つてくれ、老いた人！お

ゝ、何か口をきいてくれ。私の惑ひや私の怖れが解るといふこと、またこの恐しい殉難をゆるしてやると言つてくれ。せめてはうんといふしるしに其のお前の聲を聞かしてくれ。容しの唯だ一と言葉、老人おゝ私の心臓は裂れてしまふ、唯だ一と言葉でそれでいゝ！

ヨブ (起らあがつてその顔覆ひをとり) オトベルト、私のオトベルト、吾が子！

オトベルト おゝヨブの殿！

ヨブ (情激せる様にてオトベルトの手をとり) さうぢや、私の存在は唯だすべてお前の方へ走つて行く。恠うしてこの恐しい沈黙をまもつて行くことは、堪えがたい苦しみぢや。私は涙に充ちた弱い土まみれの一人の年寄りに過ぎない。だがお前を抱かなくては死ねないのぢや。さ、此處へ来い！

とオトベルトの顔に涙と接吻を浴びせる

吾子よ、お前の顔を見せてくれ。この六月餘り毎日々々逢つたけれど、お前の顔を見たとは信じてくれるな、私はお前をまだ見なかつたのぢや。

と酔へるがごとく彼を見つめ、

今こそ私は初めて見る。若い男、年は二十歳、おゝ何といふ美しいことぞ。お前のその濁りのない顔に接吻させてくれ。心ゆくはかりしみ／＼お前の顔を見さしてくれ！お前は今までものを言ふてゐた、そして又私のがは黙つてゐた。だがどれ位お前のいふたものが私の五臓を引つかき廻したかお前の方は知らなからう。オトベルト、その壁には私の大きな劍がかゝつてゐる筈だ。私はそれをお前にやる、子よ。私の兜、私の騎士の旗、之れは數度凱歌を奏したものだ、之れは皆お前

のものども。私はどれ位お前を可愛がつてるか解つて貰ふため、私の心の底ひが讀んで貰ひたいのぢや。おゝ私はお前を祝福する。神よ、彼はおん身のあらゆる恩恵を私に與へしと同じく、されど吾が恩恵の如く暗黒ならざるものを與へよ、靜かにして耀しくまた旺んる運命を持たしめよ、その父に似て同じく敬虔なる數ある子等が、美しき髮白髪となる時まで堅固にして慄く足を愛に充ちし支へしめよ。

オトベルト おゝ殿！

ヨブ (彼に手を置き) 私はこの子のなせし事を又この後なさんとする一切を祝福する、おゝ天にかけ地にかけ、幸福なれ。——さてオトベルト、私がいふ事をよく聞け、私はもはや父ではない、私はもはや王ではない、吾が一家は今捕虜となり、吾が塔は既に落ちたのぢや、私は吾が子等を引渡さねばならなかつた。頭を下けてこの日耳曼を救はねばならなかつた。——だが私は死なねばならぬ。唯だ私はこの手がふるへる。私に力をかしてくれ、私を救ふてくれ……

とオトベルトが腰にさげたる短劍を抜き、オトベルトに差出して、

この至上の勤めを頼みたいのは、其れはお前ぢや。

オトベルト (愕然として) おゝ私が！でも私が此處で求めるのはあの何とがいふ……

ヨブ フオスコであらう、其れは私である。

オトベルト 何、貴方が！

と後へさがつて眼を周囲の暗黒のなかにやり、

吾れを取りかこむ幽霊どもよ、吾々を見てゐる悪魔どもよ、お前がたは何であらうが、私が崇め私が愛してゐるのは此の人ぢや、この老人ぢや。この最後の時にゐる吾々を憐れと思へ。——おゝ皆だまつてゐるな？——おゝ之れは何とする、それはヨブぢや、こよない恐しいことぢや！

と絶望と嚴肅の風を帯び、

私はお前の身に手は上げられませぬ。おゝ老人さま、ラインの神、その聖なる頭！

ヨブ だが吾がオトベルト、吾がために墓の口を開いてくれ。お前に皆々打明かしたくないが、私は罪人なのぢや。この世ではお前の妻、あの世ではお前の妹たる彼の娘、即色蒼め、冷え凍えた美しいレギナが彼處にゐる。愛は行ひぢや、彼の娘のためには何事もなし、如何なる折りにも其れを救ひ、火焰の淵を開く悪魔に墓の口で出逢ひ、お前の魂をそれに渡しても其の天使は贖ひとら言つて約束したではないか。死は今あの子を擱へて居るのぢや。死は今その呪はしひ小手をあけて、彼女をめぐる暗は刻々にひろがつて行くのぢや。彼の娘を救へ！

オトベルト (思ひ惑ひて) あれを私が救はねばならないと思ふのですか？

ヨブ 何の躊躇することがあらうぞ。一方の私は、あらゆるものが既にその終りをつけるよと呼んでる額の禿けた、永却に罰せられた老人で、悪漢一人をも持て余す勇者、雀一羽にも劣る鷲の私、その濁つた血なまぐさい一生は幾度か神の足のしたで雷のつぶやきを起させた私、老い朽ちて、惱ましく、罪重私である。ところで片一方は清淨無垢で、行ひ正しく、年若く、愛に充ち、美に溢れそれはお前といふ者を愛してゐる一人の女であり、又お前といふものに縋つてゐる一人の小供であ

る。おゝ威厳なく譽れなき土まみれの檻と、『主』のもと、天使の麻の衣との相違に、未だしも疑ひ、未だしも迷ふは狂者の業である。彼の心は生くるを願ひ、私は死ぬるを願ふ。おゝ何たる事ぢや、唯だ一と打ちで二つの救ひがやり終ふせられる時ないに、おゝは迷ふてゐるのである。もしお前が私共をいとしと思ふなら吾々二人を……

オトベルト おゝ、如何しやう！

ヨブ 吾々二人を救けてくれ！いざ、打て！聖なるシギスモンド帝は腫物の根を絶やしてやる爲めボレスラスを殺した。併し之れを誰れが悪くいふものがある。吾がオトベルトよ。悔恨といふものは魂の腫物ぢや。私のこの悔恨の根を絶やしてくれ。

オトベルト (刀をとり) でも……

と口を嚙む。

ヨブ でも何でやらぬのぢや？

オトベルト (短剣を鞘におさめ) 貴方はこの私の心の中に起つた怖しい考へを御存じない。貴方には旅の女に攫はれた一人の子がある、——之れは今朝貴方が御話し下さいました。——ところがこの私といふものがまるきりの小供の時分一人の女に捕はれた身なのです。若し私はその子であつて、貴方がその父親でありましたら、此の今の場合といふものは、妙なことになつたと思ひます。

ヨブ (獨白) おゝ之れは如何ぢや！(とまた登高く) オトベルト、惱みがお前を惑はせ、お前を昂らせる。お前はその子でない。私はお前にそれを誓ふ！

オトベルト でも貴方はよく私を息子と仰有いました。

ヨブ それはお前を至極愛するからぢや。それは癖ぢや、次ぎには又何より情のこもつた言葉でもあるのぢや。

オトベルト 私は何か其處のところに感じます……

ヨブ いや何もない。何も……

オトベルト 私の耳には或る一つの聲が私に……

ヨブ その聲も嘘をついてるのぢや。

オトベルト 殿、殿、でも若し私が貴方の子であつたら！

ヨブ でもお願いぢや、せめて其れを信じまいといふ氣にはなつてくれ。私には證據がある……—おゝ神、之れは如何すればいゝのぢや。猶太人どもは酒宴の坐でその子を殺したのぢや。その死骸が私のところへ送りかへされたのぢや。私はそれは今朝がたいふた。

オトベルト いゝえ。

ヨブ いや思ひ出してくれ。お前は私の子ではない、オトベルト。私のいふ事をお前は聞いてくれねばならぬ。この證據がなければ私とて、確かにお前のいふ通り私とて、お前同様さういふ考へが起つたかも知れぬ。誠また一人の知らぬ手が引攫つて行つた子は……。私はまたお前の心を永却に引放つやうにと、その女がやつて来たといふ事も心得てゐる！だから若し私が死んだあかつきには、誰れかしらん、誰れかしらん瞞着者が出て来て、お前の憐れな魂の静けさを引掻きまはす爲め、ヨ

ブこそお前の父親ぢやといふかも知れぬが……—おゝ其れは汚名ぢや！そんな事は信ずるな。お前は私の子ではない、いや／＼子ではない、私のオトベルト！知つての通り人は年とすると物覚えが悪くなる。だがあの安息日の日にはお前も知つての通り赤兒の咽喉を切る。私のジョルジが殺されたのも其の爲めぢや。ところで其の猶太人のことは私が證據を握つてゐる、オトベルト、しかとさう思つてくれ、落ちついてくれ、吾が……。子おゝまたしてもお前を子と言つた。だが之れは、そう私の辯ぢや！おゝ馬鹿ぢや、年をとると心のとり様がつひおろそかになるのぢや。迂散に思ふな、懸念なく話をきいてくれ。そう、私はお前の顔に接吻してゐる、この胸にお前の手をおしつける、私を今に斬る手、未だ罪に染まぬこの手を！吾が子よ！——あんな夢は見えてくれるな。之れは私が誓ふ。だが如何ぢや、思廻して見よ。お前は物をよく考へる、何時でも物の誠の側を見つける。で、私はそんな怖しい廻り合せを見て見ぬ振りをして居るのかな。よく分別してくれよ。そんな事は一體出来る事かな、結局私は今も言ふたやうな理由で、確かにさうと信じてゐる。オトベルト、吾が至愛のもの、お前はどうかつても私の子ではないぞ！

聲 暗のうちより）レギナはもう小半時より猶豫がない。

オトベルト あゝレギナ！

ヨブ 不幸者！お前はレギナが死んでもよいと思ふか？

オトベルト 萬能の主よ、おゝ私は、神よ、私は力も何も抜け果てた。惑亂し狂亂してしまひさうぢや。この荒れさびれた場所で、昔の悪事がまた新しいのと入り交り、殺人の瘴氣の氣がこの頂上

へのぼる。此處で吸ふ空氣はこれは毒氣を含んだ空氣ぢや。

と心亂れし體にて、

この古い壁はまだこの上に血が飲みたいのか。

ヨブ （再び彼の手に刀をわたし）飲みたいのぢや。

オトベルト どうぞさう私を迫き立てゝ下さるな！

ヨブ さあやつてくれ。

オトベルト 私は今深い淵に之つてゐるのぢや、その罪惡の縁へゆくまで、私は自分この上何も手が出せぬ。何だかこの一瞬的思ひ切り足を大きく踏み出して、恐しい事もしてしまひさうぢや！……おゝ、さう迫いて下さいませぬ。

ヨブ 罪なきものを救ひ、罪あるものを罰せよ！

オトベルト （刀を取り）だが貴方は私がそれをやり兼ねないといふ事が解つて居りませぬか。貴方は之れを御承知か。私は自分の物の判別も半分なくしてしまひました。あの者共が何の毒かは知らねど、あの者共、あの覆面の化物どもが私に氣力をつける爲め彼處で私に飲ませたのです。今その毒が私の心にあの酷たらしいコルシカ魂を授けてゐる。それからまた私はレギナが死にかけてゐるのも知つてゐる。最後にあの牝の狼が彼處あの黑暗のなかにゐる、あの虎の牝は渴いてゐる。貴方は之れを御承知か。

ヨブ 時が來た。吾が罪惡が贖はるべき時が來た。ドナトは此處で『私は悪い』と言つて私に命乞ひ

をした。オトベルト、お前もその時無情であつたやうに、無情にやれ。私は年老いたる魔王ぢや。お前は打克つたる大天使になつてくれ！

オトベルト 本意なくも唯だこの手だけで、神よ、悪事が一つ爲しとけられます。

ヨブ (オトベルトの前に躊躇つき) 何たる私は人非人であるかを思へ。私は彼を短剣で突き刺した。斬れ。私は彼を殺したのぢや。あれは私の弟ぢや！

オトベルト 吾れを忘れ、狂へるごとなりて刀を振り上げ、まさに打たんとす。その時何人が來つてその腕を抑へる。彼れ振りかへつてその皇帝たるを知る。

第四景

前と同じ人々、皇帝、次いでグアンヒユマラ、次いでレギナ、

帝 私ぢや。

オトベルト 短剣を思はず取り落す。ヨブ立ち上つて皇帝を瞻視す。グアンヒユマラ左手の柱のかけより頭を出し、見まもり居る。

ヨブ (皇帝に) おゝおん身か。

オトベルト 皇帝ぢや。

帝 (ヨブに) 吾々の父にしてお前の王たる公爵は、おん身の邸に私を昔隠匿させた。何のためかは私は知らぬ。

ヨブ ではおん身は私の兄弟か！

帝 血塗れにはなつてゐるが、未だ呼吸ある私を、おん身はその鐵の格子から釣り下し、『お前は墓へ行け、私は地獄ぢや』と私に言つた。この言葉は唯だひとり私に淵瀬の上で耳に這入つた。それから下へ落ち……。

ヨブ (双の眼を振り) それは眞實ぢや。あゝ天は私の罪惡を徒にしたか！

帝 牧人共が吾が命を救つたのぢや。

ヨブ (不意に皇帝の前にくづ折れて) 私はおん身の前に膝を折る。私を罰せよ。私に復讐せよ。

帝 兄弟よ、一つ抱擁しやう。お前のその墓の戸口でなす一番よい事は何ぢや。私はお前の罪を免す。

と帝はヨブを引きおこし、抱擁する。

ヨブ おゝ萬能の神よ！

グアンヒユマラ (一步前へ出て) 短剣は落ちた。ドナトは生きた。私はその足もとで最後の呼吸を引きたらう。お身達の愛してるものすべてを、吾が凍れる嫉みの手が捉へたすべてを、此處にて再び引きとれ。

とヨブに向ひ、

おん身にはおん身の子ジョルジを！

とまたオトベルトに、

またおん身にはレギナ、おん身の妻を！

と彼女手眞似す。レギナ白衣をつけ、蹶躑よろろきつゝ、恰も目見えの如く舞臺正面左手の廊下より、二人の覆面の男に支へられつゝ立ちあらはる。次いでオトベルトを認め、大なる叫びを放ち、その腕のなかに倒る。

レギナ おゝ天よ！

オトベルト、レギナ、及びヨアの三人吾れを忘れて互ひに抱く。

オトベルト レギナ！父上！

ヨア (目を天の方にあげ)おゝ神よ！

グアンヒユマラ (舞臺奥のかたにて)私はまた私でこの世を去らう。暮よ、吾れを迎へよ。

と小壇を屏へ持つて行く。皇帝急に其の傍へ驅け寄り、

帝 そちは何をしたのぢや。

グアンヒユマラ 私はこの棺を此處で虚にはせぬといふ誓ひをたてた。

帝 おゝジネヴラか！

グアンヒユマラ (帝の足もとに倒れ)ドナト、この毒は效驗がはやい……。さらば！

とグアンヒユマラは死す。

帝 (再び立ちなほつて)私も此處を立ち去らう。——ヨアよ、ラインを支配せよ。

ヨア とゞまれ、吾が帝よ。

帝 私はこの世の至高の權を子孫に授く。先つがた彼方より帝國の使者が來つて、吾が子フレデリクをスピイル市にて諸公が帝に選みしことを告げに參つた。あれこそ憎みに染まず、過失あやまちには離れし誠の聖者ぢや。吾れはその子に王座を譲り、孤獨の境に立ちかへらう。さらばぢや！生きよ、支配せよ、踏み堪へよ。時代は荒い。ヨアよ。十字架の前にひれ伏して吾がまさに死なんとする時最後の時、私の欲してゐるものは唯だ一つ、王としては即ち民の上に、兄弟としては又おん身の上に、この至高にして後見うしろみなす手を擴けることであつた。その運命は如何にともあれ祝福に堪ゆるものよ、幸福なれ！

一同皇帝の祝福の言葉のもとに踞すまづく。

ヨア (帝の手をとつて接吻し)罪を免すことを知る人は偉大おほいなり！ (終)

作者の頌

バルベルスに續け、おゝヨアよ！同胞はらなちよ、ともに打連れ立ちて進め。

しかしておん身等の王の外套ゴータにておん身等の爲め二枚の經帷巾をつくれ。

もたれつ寄りつおん身等の歩みを支へ、古き日耳曼の二個の柱を擔はしめよ。

おゝ大なるものよ、世はおん身達のために餘りに小さい。

ひそやかにして悲しく心持よき物音のうちに、孤獨の世界よ、この二人の巨人が闇に隠れ入るをのるせ、

ア　ン　ゼ　ロ

岡村千秋譯

主　　城

地は静かにして暗きおん身の夜の領より、
敬ひもて又殆ど怖れもて打眺めよう、
この偉大なる城主をまた偉大なるこの帝王の入り行くを！

人物

アンゼロ・マルビエリ、知事。
 カタリナ・ブラガージニ。
 ラ・チスベ。
 ロドルフォ。
 オモデイ。
 アナフェストー・ガレオフア。
 オルデラフォ。
 ガボアルドー。
 レジネラ。
 ダフネ。
 黒衣の扈從。

夜番の者。
 門衛。
 バドゥ聖^{サンタ}アントアンの司祭堂。
 大司祭。

バドゥ、一五四九年——フランチスコ・ドザトーの大統領たりし時代。

第一日

夜宴のために燈飾された庭園。右手に音楽と燈光の満てる宮殿。その戸口は庭に臨んでゐる。そしてその同じ地平面に^{せりもたせり}迫持捕の廊下があつて、夜宴の人々がそれを廻^{めぐ}つてゐる。戸口の方には石のベンチが一脚、左手にももう一脚のベンチがあつて、その上に人の眠つてゐるのが暗いながらも見分けられる。奥には樹木を越えて十七世紀のバドゥの黒い姿が明るい空に浮き出してゐる。この幕の終る時分に日が出る。

第一景

ラ・チスベ(きらびやかな夜會服)。アンゼロ・マリビエリ(公爵の^{チヨウキ}胸着、金の^{エトール}金翠)。オモデイ(眠つてゐる男、前で合はす半毛の長い褐色の服、赤スボン、その傍にギター)。

ラ・チスベ さうです、貴方は此處の御領主様でございます。あなたは立派な知事様でございます。貴方は生殺與奪の權を、すべての勢力を、すべての自由を握つてゐらつしやる。貴方はゼニスから派遣されておいで遊ばしました。貴方の姿の見える所ではどのやうな所で、あの共和國の表構と威嚴とが見えるやうに思はれます。貴方が街をお通り遊ばすと、窓がしまつてしまひます、通行人は身をかへして逃げてしまひます。そして家内中が震へあがつてしまひます。えゝ！假にこのあはれなバドウ人たちがコンスタンチノーブルの人民で、そして貴方が土耳其だと致しましても、この人たちは貴方の前へ出ると、それよりもつと、大様な安らかな様子といふものがまるでなくなつてしまふのでございます。さうです、さういふ風でございます。えゝ！私もプレスチアへ行つたことがございます。別なことではございますけれども、ゼニスにはバドウを扱ふやうにプレスチアを待遇致すまいと存じます。プレスチアは防備するだらうと存じます。ゼニスの手が飛んで來たらプレスチアは噛みつくこととございませうが、バドウは只舐めるだけでございませう。えゝ、たとへあなたが此處では皆の王様でありませうとも、また私の主人になることをお望み遊ばませうとも、お聞き下さいませ、殿様、私はほんとうのことを申し上げてゐるのでございますの、私は。國家のことではありませんから、さうこはがることはございませぬわ。貴方御自身のことなものですもの。えゝ、さうですの、私、あなたに申しあげますけれど、貴方は見も知らぬ方でございます。私はあなたがちつとも解りません、貴方は私に惚れてゐらつしやりながら御自分の奥様には嫉妬心を持つてゐらつしやるのですもの！

アンゼロ 俺はまたお前に對しても嫉妬を持つてゐるのだ。

ラ・チスベ あれまあ！私にそんなことを仰有らなくともようございませぬわ。そしてまたそんなことを仰有る權利もございませぬわ、だつて私はあなたのもものではありませんもの。此處では私が何かあなたの寵姫おひめ、あなたの全能的な寵姫おひめかなんどのやうに思はれて居りますけれども、私決してさういふ者ではございませぬわ、あなたもそのことはよく御存知遊ばしてゐらつしやるでせう。

アンゼロ 今日の夜宴はなかく盛大だなあ、チスベ。

ラ・チスベ あゝ！私は芝居の道化役者に過ぎないのだ、私などはたゞ元老院議官様方の饗宴に使はれるものとされてゐるのだ、私は私たちの御主人を興がらすことに一生懸命だ、しかし今日はそれもどうやら果せさうにない。あなたのお顔は、私の覆面紗マスカが黒く見えるよりも、もつと暗い顔をしてゐらつしやる。ラムブや蠟燭をもつとどつさりになければなりませんわ、あなたのお額の上には暗黒が籠つて居りますもの。私が音楽で貴方にさしあげるものを、貴方は愉快にして返しては下さいませぬのね、殿様。——さあ、それでは一寸お笑ひ遊ばせ。

アンゼロ うん、笑ふよ。——お前と一緒にこのバドウに伴れて來たあの若い男を、お前は兄弟だと言ひはしなかつたかね？

ラ・チスベ はい、それから？

アンゼロ 今しがたお前はあの男と話をしてゐた。それぢやあの男と一緒にゐたもう一人の男はあれは何者か？

ラ・チスベ　あれはお友達でございますの。アナフェストー・ガレオフアといふギサンスの人ですの。

アンゼロ　そして何といふのだ、お前の兄弟は？

ラ・チスベ　ロドルフォ、殿様、ロドルフォと申します。もうそんなことは二十度も貴方にお話致しましたわ。貴方にはそれ以上、私に愛想の好いことを仰有つて下さることは何にもお有り遊ばさないのでせうかしら？

アンゼロ　許しておくれ、チスベ、もう聞きほじくるまい。昨日、お前は神様の不思議なお加護でロスモンダを演じた、この町はお前を有つてゐるので非常な幸福だ、お前を嘆賞してゐる伊太利全國はチスベ、お前のあれほどこぼすこのバドウ人たちを羨んでゐるのだ、お前はさういふことを知つてゐるだらうね？あゝ！お前を喝采するあの群集が俺にはすべて煩はしいのだ。お前が多くの人を眼を惹く程美しく見える時、俺は嫉妬で死んでしまひさうになるのだ。あゝ、チスベ！——今夜二つの扉の間でお前の話をして居つたあの覆面マスケをしてゐた男はあれは一體何なのだ？

ラ・チスベ　許しておくれ、チスベ、もう聞きほじくるまい、——全く好いわねえ。あの人はね、殿様、ギルジリオ・タスカですの。

アンゼロ　俺の副官か？

ラ・チスベ　貴方の警吏よ。

アンゼロ　そしてお前があつたの男に何の用があつたのだ？

ラ・チスベ　貴方にそのことを話すのが私に面白くないと思はれれば、あなたはすつかり購される

ことになつてしまひますわ。

アンゼロ　チスベ！……

ラ・チスベ　ですけれど、ちよつと、私は氣前の善い女でございますの。お話があります。あなたは私が唯だ素性の賤しい者の娘で、道化役者で、今日貴方の御寵愛を頂きました、明日はたゞき壊されてしまふ品物に過ぎないことはよく御存じでございます。何時も弄ばれてゐて。えゝ、たとへしがないものでございまして、私にも母が一人ございました。母があるといふことはどんなこととだか御存知でございますか？あなたにも一人はございましたせうか、貴方にも？子供であるといふことが、弱い、裸かの、貧しい、飢えた、世界に獨りほつちのあはれな子供であるといふことが、そして御自分の傍に、御自分のまはりに、御自分の上の方に、そして貴方の歩くときには歩き貴方の立ち停るときには立ち降り、貴方の泣くときには微笑む人のあるのを感じるといふことがどういふことであるか、貴方は御存知でございますか、女です……いゝえ、それが一人の女であるといふことは人はまだ知らないでございます、——其處にゐて貴方を見守つたり、貴方に話をすることを教えたり、笑ふことを教えたり、それから又、愛することを教えたりするその天使！それは貴方の指をば手で、體は兩膝の中で、靈はその心で暖めて下さるのでございます！貴方のおちひさい時にはお乳を下すつたでございますし、おみ大きくおなりになれば一生の間生命の糧を下さいます、貴方はその人をお母さんと言ひます！そしてその人は貴方を坊やと言ひます、その二つの言葉で神様がお喜び遊ばす程に柔らかな調子で！——はい！私にもさういふ母親が一人ございま

したの、夫もない哀れな女でございました、アレスチアの人の集り場所でモルラキイの歌をうたつて居りました。私も一緒に参つたのでございます。そしていくらかのお鳥目を投げて下さいました。かうして私は始めたのでございます。母はガツタメラタの立像の下でやる習はしでございました。或る日のこと母が何にも心づかず歌つてゐた歌の中に、何かゼニスの殿様を侮辱するやうな文句があつたと見えまして、ある公使館の方々が私たちのまはりでそれを笑つておいでになりました。そこへ元老院議官の方が通りかゝりました。その人はちつと凝視して聞いてゐましたが、やがて引き連れてゐた隊長に、あの女を絞首臺へ！と言ひつけました。ゼニスゼニスの國ではさういふことが立ちどころに行はれるのでございます。私の母は直ぐ捕へられました。母は何とも申しませんでした、どうしたら好からう？母は大きな涙を泛べて私を抱いてくれました、その涙が私の額の上に落ちて來ました。自分の基督十字架像を取つて、そして縛られてしまひました。私にはいまだにそれが、その十字架像が眼に見えます。磨き銅で。その底には私のチスベといふ名が小刀の尖端で彫つてございました。私は、私はその時十七でございましたが、夢の中のやうに、ものを言ふことも、叫ぶことも泣くことも得せず、ちつと凍てついたやうに、死んだやうになつて、その人たちが母を縛るところを眺めて居りました。群集もやはり黙つて居りました。ところが其處に若いお嬢さんが一人元老院議官の手に引かれて居りました。そりや若い綺麗なお嬢さんでした、殿様。いちらしいお子さんたら！お嬢さんは議官の足下に身を投げ出してひどく泣くのでございます、切に哀願する涙と美しい美しい眼とでお嬢さんは母の助命を願つてくれたのでございます。さうです、殿様、母は細

を解かれるとその十字架像を取つて、——私の母はその綺麗なお嬢さんに、お嬢様、この像をお持ち下さいませ、お仕合なことが参りませうから、と言ひながらあげたのでございます。その後母は亡くなりました、ほんとうに聖らかな女性でした。私は私でお金持になりました、あの時のお嬢さんを見たりしました、母を助けて下さつたその天使を。誰が知つてゐませう？お嬢さんも今は女です、だから不幸せでございませう。お嬢さんも今度は多分私の必要な時がございませう。私は自分の行くあらゆる町で、巡查や警部や警察の人たちを招いてはその話をした上に、私の尋ねてゐるやうな女を見つけてくれた者には金貨で一萬セキンあげやうと言ふのでございます。今も今、二つの扉の間で貴方の警吏、ギルジリオ・タスカと話をしてゐたと言ふ譯はかういふ次第でございませう。御得心が参りました？

アンゼロ　金貨で一萬セキン！するとその女が見つかつたら、その女自身には一體何をやるつもりなんだい？

ラ・チスベ　欲しいと仰有れば命でも。

アンゼロ　けれどもその人にお前は目標めじるしでもあるのか？

ラ・チスベ　母の十字架像がございませう。

アンゼロ　馬鹿な！そんなものは失くなくしてしまつてゐるだらうよ。

ラ・チスベ　どういたしましたして！あゝいふ風にして貰つたものは失くすものではございませぬ。

アンゼロ　（オモディを認めて）おい！おい！彼處に男がある！あそこに男のゐるのをお前知つてゐる

か？あの男は一體何かお前知つてゐるのか？

ラ・チスベ (笑聲を擧げて) え、おやまあ！え、彼處に人がゐることは知つてゐるの、まだ眠つてゐるよ！よく寝ること！あそこゐる人をおどかさなで下さいましね？あれは私のあはれなオモデイでございますの。

アンゼロ オモデイ？それは一體なんだ、オモデイとは？

ラ・チスベ さあ、そのオモデイといふのは、殿様、御覽のやうな男でございますの、ラ・チスベといふのは女でございますの。オモデイの、殿様、サン・マルクの歌長さんのやうにギター弾きでございますの、歌長さんは私の友達などを力にしてゐます。その人がこの頃手紙を持たせてよこしたのでございます、その手紙は貴方にも御覽に入れることに致しませうね、嫌なやきんちやさん！而もその手紙には贈物が添へてございましたの。

アンゼロ どんな？

ラ・チスベ それがね！ほんとうのゼニス式の贈物。たつた二本、一本は白でもう一本は黒い壘のはいつてゐる函。白の中には一ときに十二時間も死んだやうになつて眠る非常に強い麻醉剤がいつて居ります、黒の方には毒薬が、あのマラスピナが蘆薈の丸薬で法王に吞ませたあの恐い毒薬がいつてゐるのでございます。歌長さんが何かの時に役に立つことがあるかも知れないと書いてよこしてくれたのでございます。御覽の通りのお土産です。それにまだその手紙と贈物を持つて来たあのあはれな男は、愚鈍だといふことを知らしてよこしてくれました。その男といふのはあそこに

居ります、そして臺所で物を食べたなり、自分勝手に行き當りばつたり處かまはず寝たり、ギヤンスへ行く日を待つてゐる間弾いたり歌つたりしてゐるのが、十五日前から貴方のお眼にはいらなければならなかつたのですがねえ。あの人はゼニスから来たものでございます。あゝ！私の母もあのやうにさまよつてゐたのでございます。あの人の好いだけみとりをしてやります。今夜 幾時間か皆様のお慰さめになりましたが、私共の夜宴はあの人に面白くないので寝込んでしまひました。あゝ云ふ風に極く卒直なのでございます。

アンゼロ お前はあの男のことを俺に請合つてくれるのだね？

ラ・チスベ あら、貴方はお笑ひなさりたいの！その驚いたやうな風をしてお見せになるには丁度好い時分でございますわ！ギター弾き、愚鈍者、眠つてゐる男！あゝさう！ですが知事様、貴方はまあ一體どう遊ばしたのでせう？貴方はあゝだかうだと穿鑿するために世を送つてゐらつしやるのね何にでもお疑をおかけ遊ばす。嫉妬でせうか、怖いのでせうか？

アンゼロ 両方ともだ。

ラ・チスベ 嫉妬、それは私にも解ります、二人の女を監視なさらなければならぬのですものねえ。けれども恐怖と申しますと殿様、御領主様たるものが、全世界に恐怖を起させるべき貴方が、あべこべに！

アンゼロ びく／＼する第一の理由といふのは彼女に近寄つて小聲に語る——聞いてくれ、チスベ、さうなのだ、お前は言つた、さうなのだ、俺は此處では何でも出来る。俺はこの町の領主だ、専制

君主だ、君王だ。俺はゼニスからバドウに派遣されて来た行政長官だ、牝羊にかけた虎の爪だ。さうだ。全能だ、しかし俺のやうに全く絶對的なものが俺の上にも、ね、チスベ、暗黒に満ちた大きな恐ろしいものがあるのだよ、ゼニスがあるのだ。ゼニスがどういふものであるかお前は知つてゐるかい、チスベ？ゼニス、俺はお前にその話をして聞かせよう、それは國家の糺斷所だ、十人議會だ。あゝ十人議會！小聲で話さうよ、チスベ、多分吾々の話を聞いてゐる何かの役向が其處らにゐることだらうからね。吾々が誰れも見知らないのに而も吾々を見知つてゐる奴等。どんな會議にも姿を現はさないのにあらゆる斷頭臺に出て来る奴等。あらゆる人の頭を、お前のも俺のも、また大統領の頭まで悉くその手の中に握つてゐて、知事の服も、^{ネトル}金翠も、冠も、人の眼に解るやうなものは何にも持つてゐない、彼奴がそれだ！と言はせるやうなものは何にも持つてゐない奴等、たかだかがその着物の中での不思議な合圖一つ。到る處に警官、到る處に巡查、到る處に首斬役人だ。サン・マルクの鐘の下にあの憔悴した青銅の口が何時も開いてゐるやうに、ゼニス市民の中では決して變つた顔を見せたことのない奴等、群集は啞だとはばかり思つてゐるが、非常に高い非常に恐ろしい聲で物を云ふ宿命の口なのだ、と云ふのはあらゆる通行人に向つて「宣告せよ！」と言つてゐるではないか。——一度宣告されれば捕縛されて了ふ、一度捕縛されれば、萬事休矣だ！ゼニスでは萬事が祕密に、不可思議の中に確實に行はれるのだ。宣告、執行、見るべきものも聞くべきことも何もない。叫ぶことも不可能なら、眼も不用なのだ。受刑者には猿轡、首斬役人は覆面紗^{マスク}を被つてゐるのだ。今俺は斷頭臺のことでお前に何を話してゐたのだらう？俺はまちがへてゐた。ゼニスでは斷頭

臺の上で殺されるのではない、見えなくなつてしまふのだ、或る家族の中の一人が忽然としてゐなくなつて了ふのだ。その男はどうなつたのか？それを知つてゐるものは重石^{オウシ}か井戸かオルファノ河なんだ。時に依ると夜中に水の中へ何か落ちるらしい物音の聞えることがある。さう言ふ時には早速通り過ぎてしまふが好い！その外、舞踏、饗宴、炬火、音楽、ゴンドラ、芝居、五月の謝肉祭^{カーニバル}、其處にゼニスがある。お前は、チスベ、俺の美しい道化役者、お前はさういふ方面しか知らないであらうけれど、俺は、元老院議官たる俺は、もう一つの方面をも知つてゐるのだ。ね、あらゆる宮殿には、大統領の宮殿にも俺の宮殿にも、住んでゐる者の知らない祕密の間道が、あらゆる座敷、あらゆる部屋、あらゆる寢所の永遠の内通者があるのだ。ほか／＼の戸口だけはお前たちも知つてはゐるが、何處にあるのか正確に解らないでたゞ身の周りを廻つてゐるのが感ぜられる暗い廊下。何事かを見知らぬ人の行つたり來たりする不思議な對壕。さういふあらゆることに入り交つて、その暗黒の中を進む個人の復讐！夜でも俺は度々床の上に起き直つて耳を傾けてゐると、の中に足音が聞えるのだ。かうした或る壓迫の下に俺は生活してゐるのだ、チスベ。俺はバドウの上に立つてゐる、けれども其奴は俺の上に立つてゐるのだ。俺はバドウを統禦する使命を帯んでゐる、俺は恐怖せられるようにすることを命ぜられてゐるのだ。俺はたゞ暴君となる條件で專制君主となつてゐるだけなのだ。何人であらうとも俺には決して恩恵を求めてくれるな、お前には拒絶する術さへも知らぬ俺には。お前のために俺は殺されてしまふのだ。俺には罰することなら何でも任されてゐるけれども、許すことは何にも任されてはゐないのだ。さうだ、かういふ風だ。バドウの暴君、ゼニ

スの奴隷。俺は非常な監視をうけてゐるのだ。あゝ！十人議會！酒倉の中へ職人を唯一人入れて鏡を造らして御覽、その錠が出来あがらないうちに、十人議會ではその錠を疾うにポケットの中に入れてゐるから。チスベ、チスベ、俺の用を足す奴隷までが俺を探偵してゐると云ふ始末だ、俺に挨拶する友人も俺を探偵してゐれば、俺に懺悔をさせる牧師も俺を探偵してゐるのだ。俺にものを言ふ女も、お前は可愛いが——さうとも、チスベ——さういふ女も俺を探偵してゐるのだ！

ラ・チスベ　まあ！貴方！

アンゼロ　お前は決して俺を愛してゐるといふことは言はなかつた。俺はお前のことを言つてゐるのではないのだよ、チスベ。さうさ、俺は繰返して言ふが、俺を見てゐるものは十人議會の眼なのだ、俺の言ふことを聞いてゐるものは悉く十人議會の耳なのだ。恐るべき手、其奴はまづ最初長い間探つてゐる、そして突然に素早くひつゝかむのだ！あゝ！俺のやうな立派な知事でも、明日は俺の居間に賤しい警吏が不意に現はれて一緒に来いと言ふのに出會さないと限らない、それは一箇の賤しい警吏には過ぎないであらうが、而も俺はそいつについて行くことであらう！何處へ？俺を入れると再び出て行つてしまふ或る奥深い場所へ。チスベ、ゼニスゼニスの者と云ふことは一筋の糸に操られてゐるといふことなのだよ。お前がバドウと言つてゐるこの熱い窟の上につり下げられてゐるといふことは、チスベ、俺の境遇のやうに辛い悲しい境遇なのだよ、機會と用心と恐怖とに取りまかれて、暴君といふ自分の仕事をしながら、練金術士が自分の毒藥で死ぬやうに、絶えず何かの爆裂を恐れ、絶えずみじめな最後をすることを震へ恐れてゐながら、何時も假面を被つてゐる顔！——

俺に不平を言へ、だが俺の震へおのゝく譯は聞かないで置いてくれ、チスベ！

ラ・チスベ

まあ！ほんとにあなたのお身分は何といふ不仕合せなお身分でございませう。

アンゼロ

さうだ、或る人々が他の人々を苦しめる、俺はその道具なのだ。さういふ道具といふものは直ぐ使はれて直ぐ壊されるものだ、チスベ。あゝ！俺は不幸だよ。俺には唯だ世界に一つきりと云ふ好いものがある、それはお前だ。けれどそのお前も俺を愛してゐてくれないことはよく解つてゐる、けれど少くともほかのものをお前愛してはゐないだらうね？

ラ・チスベ

えゝ、えゝ、落ちついて下さいまし。

アンゼロ

お前はその「えゝ」を言ひまちがつてゐるのだ。

ラ・チスベ

決して！私はさうだからさうだと言ふのでございませう。

アンゼロ

あゝ！俺のものになつてくれないでもよい、俺はそれで満足する、しかし他の人のものにはなつてくれるな！チスベ！どうかして聞きたくないのはほかの人が……

ラ・チスベ

さういふ風に私を御覽遊ばす時のあなたのお美しさをお信じ遊ばしたら！

アンゼロ

あゝ！チスベ、何時になつたらお前は俺を愛してくれるやうになるのだらう？

ラ・チスベ

此處の人が誰もかも貴方を愛するやうになつた時。

アンゼロ

噫！——そんならおんなじこつた。バドウにゐておくれ。俺はお前にバドウを去らせた

くない、解つたかい？若しお前が行つてしまふやうなことがあつたら、俺の人生もそれつきりだ。

——おや！俺等の方へ來る者があるぞ。もう永いこと話をしてゐるから一緒に話してゐるところを

人に見られたかも知からない。ゼニスに疑を起させるやうになるかも知れない。俺は歸ることによろ。 (彼は立ち上りながらオモデイを指して)——お前はあの男のことは請合つてくれるね？

ラ・チスベ 彼處でねんねをする子供と致しましてはね。

アンゼロ こつちへ来るのはお前の兄弟だつた。お前はあの人と一緒に置いて行くことにしよう。
(彼は出て行く)

第二景

ラ・チスベ。ロドルフォ。黒の服を着ず、嚴肅な顔、帽子には黒い羽を挿してゐる)オモデイ(尙ほ眠つてゐる)

ラ・チスベ あら！ロドルフォだ！あゝ！ロドルフォだ！あつしやい、私は貴方が好きさ、貴方が！(アンゼロが出て行つた方を振り返つて見る)——いゝえね、阿呆の暴君さん、兄弟なものですか、情人だわ！——いらつしやいよ、ロドルフォ、私の勇ましい兵隊さん、私の追放貴族さん、私の勇士さん、私の顔をよく見て下さいよ。貴方は美しい、私は惚れた。

ロドルフォ チスベ……

ラ・チスベ どういふ譯で貴方はバドウに來たくなつたんでせう？貴方もよくお氣づきだらうが、私たちはかうして良にかゝつてしまつたのよ。今はもうこれから抜け出ることとは出来ませんわ、貴方の方でも、何處へ行つても私の兄弟だと思はせるやうになさるなければいけないわ。あの知事はね、貴方のあはれなチスベに焦れてゐるの。私たちはあの人に擱まれてゐる。あの人は私たちを放さう

とは思はないのです。貴方が何なのだかあの人が見つけ出しやしないかと思つてしよつちのう委はびく／＼してゐるのよ。あゝ！どんな刑罰が！えゝ！構ふものか、あの暴君に私のことが何だつて解るものか！その方のことに就いては貴方は全く安心よ、さうでせう、ロドルフォ！けれどね、かういふことを貴方に心配して貰ひたいと思ふのよ、先づ第一貴方に私嫉妬をやいて欲しいの。

ロドルフォ 貴方は貴族で美人ですよ。

ラ・チスベ あゝ！私の方こそ貴方の嫉妬やいてるんだわ、ねえ！だけれど嫉妬つて言へば！あのアンゼロ・マリビエリ、あのゼニス人も私に嫉妬の話をしたわ、あの人は嫉妬やきだと自分にも思つてゐるのよ、そして何のやうなことも皆んなそんな中へこんがらかしてしまふのよ。あゝ！嫉妬を起すとゼニスが見えなくなります、十人議會が見えなくなります、警官たちも間諜もオルファの河も見えなくなつてしまふものね。私も、ロドルフォ、私も貴方がほかの女なんかと話をしてゐるところをば黙つて見てはゐられませんが、唯だ話をするだけでも私は病氣になつてしまひますわ。貴方の言葉にその女たちがどういふ権利を持つてゐるのでせう？えゝ！一人位の競争者なら！決して私の敵手にはしやあしない！私殺してやるわ。ね、私は貴方に惚れてゐるの！貴方は私の今迄に惚れた唯一人の男だわ。私の生活は長い間陰氣だつた、けれど今は光り輝いてゐる。貴方は私の光明だ。貴方の愛は私の上に昇りかけた太陽です。他の男たちは私を冷たくしてしまひましたの、どうして私は十年前に貴方を知らなかつたのでせう！冷たさに死んでゐた私の心のあらゆる部分がまた蘇生へるやうな氣がします。一瞬間でも二人きりで話をする事が出来るといふのは何て嬉しい事

でせう！バドウなんぞへ来るなんて何て馬鹿らしいことでせう！かういふ窮屈な所でも私たちは生きてゐる！私のロドルフオ！さうよ、ほんとうだわ！私の可愛い人！え、全くさうよ！私の兄弟よ、私、氣儘に貴方に話をしてゐると嬉しくつて氣が狂つて了ふわ。私の氣狂女だことはよく知つてゐるわね！貴方私を愛してゐてくれる？

ロドルフオ 貴方を愛しない人があるだらうかねえ、チスベ？

ラ・チスベ 私に向つてまだ「貴方」なんぞと言ふなら利きませんよ。さう／＼！私お客様たちに一寸顔を出しに行かなければならないわ。ねえ、さつきにから貴方はふさいでゐらつしるやうねえ。さうぢやない？ふさいでゐらつしやるんぢやない？

ロドルフオ いゝや、チスベ。

ラ・チスベ 苦しいのぢやなくつて？

ロドルフオ いゝや。

ラ・チスベ 嫉妬ぢやないわねえ？

ロドルフオ いゝや。

ラ・チスベ さう！嫉妬であつてくれゝば好いに！さうでなければ全く私を愛してゐるんぢやないわ！さあ、ふさがないでね。えゝ、さう、實際のこと私何時もびく／＼してゐるの、あなた、心なことがあらんぢやないのね？貴方が私の兄弟ではないといふことは誰も此處の人は知らないんでせうね？

ロドルフオ アナフェストーを除けては誰あれも。

ラ・チスベ お友達。あゝあの人には安心です。

アナフェストー・ガレオファがはいつて来る。

「……ほんとうにあの人が来たわ。ちよつとの間あの人にあなたを預けて行きませう。(笑ふ)——アナフェストーさん、この人がどの女とも話をせぬやうに氣を附けて下さいな。」

アナフェストー (ほゝゑむ) 御安心なさい、夫人。

ラ・チスベ去る。

第三景

ロドルフオ。アナフェストーガレオファ。オモテイ(尙ほ眠つてゐる)

アナフェストー (彼女の行くのを眺めながら) あゝ！美しいなあ！——ロドルフオ、君は仕合せ者だぜ、あの女は君に惚れ込んでゐるんだぜ。

ロドルフオ アナフェスト、僕は仕合せでもないのだよ。僕はあの女を愛しちやるないんだもの。

アナフェストー えゝツ！何だつて？

ロドルフオ (オモテイを認めて) あそこに眠つてゐる男は一體全體何なのだ？

アナフェストー 何でもないよ、ありや君も知つてゐる例のあはれな音楽家さ。

ロドルフオ うん！さうか、あの馬鹿か。

アナフェストー 君はチベスを愛してゐないんだつて？ほんとうのことかい？君はどうとか言つたね？

ロドルフォ ふん！そんなことを僕が言つたかねえ？そんなことは忘れてくれ。

アナフェストー ラ・チスベ！嘆美すべき女だ！

ロドルフォ 實際嘆美すべき女だよ。けれど僕は愛してゐやしないのだ。

アナフェストー どうして？

ロドルフォ 僕には訊かないでくれ。

アナフェストー 僕、君の友人が！（ラ・チスベ、再び出て来て、笑ひながらロドルフォの方へ駆け寄つて）一言あなたに言ひたいばかりに戻つて来たの。私貴方を愛してゐてよ！ちや私行つて来るわ。（彼女は走つて出て行く）

アナフェストー （彼女の出て行くのを眺めて）可愛さうなチスベ！

ロドルフォ 僕の生命の底には僕唯一人しか知らない或る秘密があるのだよ。

アナフェストー 何時の日にそれを友人に打ちあけるつもりなのだ、え？今日はまた嫌にふさいでるぢやないか、ロドルフォ。

ロドルフォ うん。暫時うつちやつといてくれ。

アナフェストー 去る。ロドルフォは戸口の石のベンチの上に腰かけて、頭をたれ、手で抱き込む。アナフェストーが去つて了ふと、オモデイが眼を開いて立ちあがる。それから静かに歩き寄つて、空想に耽つて

ゐるロドルフォの背後に立つ。

第四景

ロドルフォ オモデイ。

オモデイはロドルフォの肩に手をかける。ロドルフォは振り返つて果然と彼を眺める。

オモデイ 貴方はロドルフォと言ふのではない。貴方はエツツエリノ・ダ・ローマーナと言ふのだ。貴方はこのバドウに君臨したことのある古い家柄であるけれど二百年前に追放せられて了つたのだ。貴方は名をたばかりで市から市にさまよつてゐる、時には大膽にもゼニスゼニスの國へ入り込むこともある。七年前、その時貴方は二十歳だつた、ゼニスで或る日或る教會で非常に美しい娘を見た。サン・ジヨルジュ・ル・グラン教會で。貴方はその娘の後を尾行けて行かなかつた。ゼニスでは、女の尻を追つかけるといふことは短刀の一太刀を求めることなのだ。しかし貴方も教會へは繁々と通ひつめた。貴方は女に對して、女は貴方に對して戀の網に囚はれた。名も知らずして、貴方はその時までまだ知らなかつたし、またその時もまだ解らなかつたので、その娘をたゞカタリナとだけ呼んでゐた。貴方は女に手紙をやり、女がそれに返事をよこす方法を考へ出した。貴方は女の計らひでベアト・ツエチリアと云ふ婦人の家で逢曳することを得た。貴方と女との間には熱烈な戀が燃えてゐたけれど女は尙ほ純潔であつた。その若い娘は貴族であつた。女のこと貴方の知り得たことはこれだけだつたのだ。ゼニスの貴族の娘はゼニスの貴族か王かでなければ結婚することが出来ない。貴方

は今はゼニス人でもなければ王様でもない、しかも追放人なのだ。貴方は欲求することが出来なかつたのだ。或る日娘は逢曳に來なかつた。貴方はベアト・ツェチクアからの女の結婚させられた事を知らされた。併しながら貴方はその父親の名を知らなかつた如くに、その夫の名前も知ることが出来なかつたのだ。貴方はゼニスを去つた。その日以來貴方は伊太利全土から逃げ出してつたのだ。しかし貴方は戀に追ひかけられた。貴方は自分の生活を快樂に慰藉に狂愚に罪惡にほうり込んでしまつた。貴方は他の女を愛するように努めても見た、他の女をたとへばあの道化役者のラ・チスベを愛してゐるのだとさへ信じて見た。けれどもそれは無駄だつた。昔の戀が何時も新しい戀の下に姿を現はして來るのであつた。貴方は三ヶ月前にラ・チスベとバドゥに來て、女にその兄弟だと稱せしめられてゐる。知事は、アンゼロ・マリピエリ氏はあの女に感傷して了つてゐる。そして貴方は、此處にかういふことが貴方に出來して來たのだ。或る晩、二月十七日だ、或るゴールを被つた女がモリノ橋で貴方の側を通つたことがあつた、その女は貴方の手を取つてサン・ピエロ街に伴れて行つた。その街には貴方の先祖エツツエリノ三世のために破壊されたマガルツフイ宮殿の廢墟がある。廢墟には一軒のあばら家がある。そのあばら家の中で貴方は七年前に貴方の愛されもし、愛しもしてゐたゼニスの女に會つたのだ。その日が始まりで、その小屋の中で一週間に三度貴方は女に出會つてゐた。その女は貴方の愛に對して貞節であると同時に、また自分の名譽にかけても甚だ貞節であつたのだ。しかしその名はまだ隠してゐた。カタリナ、唯だそれだけだつたのだ。月が經つた、貴方の幸福は不意に絶たれて了つた。或る日女は小屋の中に見えなかつた。女が見えなくなつ

てから五週間になる。女は夫に警戒されて、番人に押籠められてゐるに違ひない。朝が來たな、日があがつて來る。——貴方は到るところを探察してみたが解らなかつた、決して貴方には解りつこはないのだ。——今夜その人に逢ひたいとは思はないのか？

ロドルフオ (ちつと彼を見つめて) 貴方は誰です？

オモデイ はあ！質問か？僕はさういふことには返事をしない。——ちや今日あの女に會ひたいとは、はないんだね？

ロドルフオ いや、いや、いや！會ふ！會ひたい！天に誓つて！一日會へば死んだつて！

オモデイ 會はしてあげよう。

ロドルフオ 何處で？

オモデイ 女の家で。

ロドルフオ けれども、ねえ、あの女は？あの女は誰なんです、あれの名は？

オモデイ あの女のところから聞いてあげようよ。

ロドルフオ あゝ！貴方は天から降りて來て下すつたんだ！

オモデイ そんなことはちつとも僕には解らない、——今夜、月の出しほが、——眞夜中が、都合が好い、——サントー・ウルバノ街のアルベール・パオンの屋敷の角まで來たまへ。僕が手引してやらう、眞夜中だよ。

ロドルフオ 有り難う！そして貴方はどなただか僕に聞いて頂きますまいか？

オモデイ 僕が誰だと？馬鹿者さ。(彼は去る)

ロドルフオ (一人後に残つて) あの男は何だらう？ええ！構ふものか！まよなか！真夜中！今から真夜中までの長いことは！あゝ！カタリナ！あの男の約束した時間のためならこの生命もやつて了つたらう！

ラ・チスベ入り来る。

第五景

ロドルフオ。ラ・チスベ。

ラ・チスベ また来てよ、ロドルフオ。今日は！私もう永い間貴方を見ないでゐることは出来ませんわ。貴方から離れられませんわ。私は何處にゐても貴方なのよ。貴方に依つて私は考へもした見えもするの。私は貴方の體のよ、貴方は私の靈よ。

ロドルフオ 氣をおつけよ、チスベ、僕の家は宿命的の家なのだ。僕等の上には豫言があるのだ。父から子へ殆ど避け難く傳つて来る運命があるのだ。僕等は僕等を愛してくれる者を殺して了ふのだ。

ラ・チスベ ええ、ええ、貴方が私を殺す。それから？貴方が可愛がつてくれるなら！

ロドルフオ チスベ……

ラ・チスベ 貴方は直ぐに私を泣かすでせう。私そんなこともう澤山よ。(彼は女の手に接吻して徐々と

去る)

ラ・チスベ あれ！どうして行つて了ふのよ！ロドルフオ！行つて了つた。一體どうしたんだらう？(ベンチの方を眺めながら)あゝ！オモデイが眼を醒ました！

オモデイ舞臺の奥に現はれる。

第六景

ラ・チスベ。オモデイ。

オモデイ あのロドルフオはエツツエリノと言ふのだ、あの冒険者アドベンチュリエは公爵だ、あの馬鹿者は幽霊で、眠つてゐる男は窺つてゐる猫なのだ。眼はふさぎ、耳は開けて。

ラ・チスベ 何ですつて？

オモデイ (自分のギターを指しながら)このギターにはお好み次第の音を出す絃があります。男の心にも女の心にも人の弾くことの出来る絃があります。

ラ・チスベ それは全體どういふことなの？

オモデイ 奥さん、それはね、貴方が若しどうかしてあの帽子に黒い羽を挿してゐる若い好い男を今日なくすやうなことがあつたなら、次の晩貴方があの男を見つけ出す場所は僕が知つてゐると言ふのですよ。

ラ・チスベ 女の家？

オモデイ 髪の褐色の。

ラ・チスベ

えつ！貴方は何か言ひたいことがあるの？貴方は誰よ？

オモデイ

そんなことは僕は知らない。

ラ・チスベ

貴方なんぞ妾は信用してやしない。妾は何て不合せだらう！あゝ！知事もそれを疑つてゐたのだ、貴方は恐い人だ、貴方は誰よ？え、貴方は誰よ？ロドルフォが女の家！次の夜！それが貴方の言ひたいことなんだね！え？それが貴方の言ひたいことなんだね？

オモデイ

そんなことは僕は知らない。

ラ・チスベ

ふん！嘘をお言ひ！そんなことがあるものか！ロドルフォは妾を愛してゐますのよ。

オモデイ

そんなことは僕は知らない。

ラ・チスベ

えゝ！畜生！ふん！嘘をおつき！何て嘘を言ふんだらう！貴方は罰當りだ。あゝ、では私にも敵があるんだよ、妾に！けれどロドルフォは私を愛してゐるんですよ、私を泣かせようつたつて駄目なことだ。お前なんぞ誰が信するものか。貴方の言ふことが私には何の效能もないのを見て、貴方は腹を立てねばなりませんまいよ。

オモデイ

知事が、アンゼロ・マクベエリ氏が頸の鎖に、藝術的に細工した金の玉をつけてゐることに無論貴方も気がついてゐるだらう。その玉は鍵なのだ。それを寶玉のやうに羨ましがる風を見せて、吾々がそれで仕事をするやうなことは話さないでそれをお貰ひなさい！

ラ・チスベ

鍵だと言ふのですか？そんなものは私貰ひますまいよ。何にも貰ひますまいよ。ロドル

フォ！私そんな鍵なんか貰ひたくない！あつちへゐらつしやい！私は貴方の話なんか聞いちやゐませんよ。

オモデイ

折よく知事がやつて來た。貴方があの鍵を手に入れれば、明日の晩、貴方の仕事にどんなに必要なのだか僕が説明してあげやう。十五分経つたらまた來るからね。

ラ・チスベ

畜生め！一體私の言ふことを聞いてゐなかつたのかい？私はそんな鍵なんか欲しくはないと言つてゐるんぢやないか。私はロドルフォに信頼しきつてゐるんですよ、私は。そんな鍵なんか、そんなことに手を出すものか。知事にそんなことを一言だつて言ふものか。だからまた來たつて無駄なことよ！貴方そんなに信用してやしないのよ。

オモデイ

十五分経つたら。

彼は去る。アンゼロ入り來る。

第七景

ラ・チスベ。アンゼロ。

ラ・チスベ

あら！おいでなすつてね、殿様。貴方誰かを探してゐらつしるの？

アンゼロ

うん、ギルジクオ・タスカを、一口言つて置きたいことがあるんだ。

ラ・チスベ

へえ、貴方は何時でも嫉妬やきですのねえ？

アンゼロ

何時でもさ、チスベ。

ラ・チスベ 貴方は氣狂だわ。どうしてそんなに嫉妬やきでせう？嫉妬をやくなんてことは私には解らないわ。私が誰かに惚れたとしても、私決して嫉妬なんかやかないわ。

アンゼロ それはお前が誰をも愛してゐないからだよ。

ラ・チスベ いゝえ、私だつて誰かに惚れて居りますね。

アンゼロ 誰に？

ラ・チスベ 貴方に。

アンゼロ 俺を愛してゐる！そんな事があるだらうか？俺をからかつてゐるのだな、神様！あゝ！お前が今言つたことを、もう一度言つてみておくれ！

ラ・チスベ 私は貴方を愛してゐます。(彼は歡喜して彼女の方へ近寄つて行く。彼女は彼の頭にかゝつてゐる鎖を取る)——ねえ！この寶玉は一體何でございませう？私今迄氣が付きませんでしたわ。美しいこと。好い作り。あら！ペーエヌートーが刻んだのね。綺麗ねえ！いつたいこれは何でございませう？女物に丁度好いわ、この寶玉は。

アンゼロ あゝ！チスベ、お前は唯一言で俺の心を喜びで満して了つた！

ラ・チスベ 好いわ、好いわ、けれどこれは一體何なのだかそれを聞かして下さいな。

アンゼロ それか、それは鍵さ。

ラ・チスベ へえ！鍵なの。さう、私決してさうだとは解らなかつたでせうよ。へえ！さう、成る程、これで開けるんですね。へえ！鍵なの。

アンゼロ さうだよ、チスベ。

ラ・チスベ 好いわ、鍵なら私欲しくはないの、持つてゐらつしやいよ。

アンゼロ おや！お前これに氣があるのかい、チスベ？

ラ・チスベ まあさうなの。よい細工の寶玉だと思ひましてね。

アンゼロ ふうむ！持つておいでよ。(彼は頭からその鍵を外す)

ラ・チスベ いゝえ、私鍵だと知つてゐたらあんなことを申上げるんぢやありませんでしたわね。欲しくないと云ふのよ。屹度あなたの御入用なものでせう。

アンゼロ あゝ、それも極く稀だ。しかし俺はまだもう一つ持つてゐるんだよ。持つて行つたつて好いのだ、こつちからお前に頼む。

ラ・チスベ いゝえ、もう欲しいとも思はなくなりました。その鍵で扉でも開けるんですの？大變に小さいのねえ。

アンゼロ そんなものは何にもならないのだ、かういふ鍵が潜しのび錠のために造つてあるのさ。こつちのは寢室の戸の間にあるいくつかの扉を開けるのだ。

ラ・チスベ ほんとう！それぢや！どうでもやらうと仰有るんなら、私頂いときますわね。(彼女は鍵を取る)

アンゼロ あゝ！ありがたい。何て幸福だらう！お前が俺からものを貰つてくれたなんて！ありがたう！

ラ・チスベ　實際、私、ゴニスにゐる佛蘭西の公使のモントリユック様が丁度こんな持つてゐらしたことを覚えてゐます。モントリユック元帥さんを御存知でございますか？ 潤達な方ね？ 貴方がた貴族様方は公使たちに話することが出来ない。私はさう考へて居りませんでした。同じことでもございますわ、あのモントリユック様はカルギン教徒に優しくはなさらなかつたのでございます。若しあの人手に入れるものがございましたら！ それは大膽なカトリック教徒でございます！——ね、あなた、貴方の探してゐらつしゝるギルジクオ・タスカが彼處にゐるやうでございますわ、向ふの、廊下のところに……

アンゼロ　さうかい？

ラチスベ　あの人に話すことがあつたのではございませんの？

アンゼロ　うん！ お前から俺を引放すとは憎い奴だな！

ラ・チスベ　（廊下を指しながら）あそこに。

アンゼロ　（女の手に接吻しながら）おい！ チスベ、では俺を愛してくれるんだな！

ラ・チスベ　彼處に、彼處に。タスカが貴方を待つて居りますわ。

アンゼロ去る。オモデイが舞臺の奥に現はれる。ラ・チスベは彼の處へ走り寄る。

第八景

ラ・チスベ。オモデイ。

ラ・チスベ　私、鍵があるわ！

オモデイ　見せて御覽。（鍵を検査する）よし、これに違ひない。——知事の屋敷にはモリノ橋に臨んでゐる廊下がある。今夜其處に忍んでおいでなさい。家具のうしろへでも、窓かけの陰へでも、貴方の好いたところへ。真夜中過ぎの二時には、僕が尋ねて行きます。

ラ・チスベ　（財布を取り出して）もつと御褒美をあげませうが、それまでの間この財布を取つときなさい。

オモデイ　どんなに貴方を喜ばせることか。しかし僕にやりとけさせて下さい。夜中過ぎの二時です。貴方を尋ねて行きますから。その鍵で開かねばならぬ第一の扉を貴方に教へてあげませう。それから僕は別れることゝ致しませう。後は僕がゐらなくなつたつて出来るのだ。貴方はたと前へくと進んで行けば好いのだ。

ラ・チスベ　第一の扉をあけると何があるんでせう？

オモデイ　第二の扉が、それも同じくその鍵で開けるのだ。

ラ・チスベ　そして第二の扉の次ぎには？

オモデイ　第三の扉、その鍵で扉は皆んな開くのだ。

ラ・チスベ　そして第三の扉の次ぎには？

オモデイ　見せてあげませう。

第二日

基督十字架像

金で引き立つて見える緋羅紗をゆたかに敷きつめた一室。左方の角には曲つた柱に吊られてある天蓋の下の臺坐の上に立派な寢床が一つ。天蓋の四邊には猩々緋の幕がさがつてゐて、それ、締めると寢床がすつきり隠せるやうになつてゐる。右手の角には窓が開いてゐる。その方の側に張布の被せてある屏、傍に祈念臺、その上の方に磨き銅の基督十字架像が壁にかゝつてゐる。奥には二枚屏のついた大きな入口、その戸と寢臺との間にもう一つ非常に飾の多い屏。テーブル、安樂椅子、燭臺、大戸棚。外には庭、塔、月光、卓上にはよろひぐさ。

第一景

ダフネ、レジネラ、暫時の後にオモデイ。

レジネラ さうよ、ダフネ、全くのことよ。私夜の門衛のトロイローから聞いたのよ。その話はつひ近頃、奥様がこの前エニスへ御旅行遊ばした時にあつたんですつて、警吏のやうなものが、碌でなしの警吏づらが！奥様をすつきり思ひ込んで、手紙をよこしたり、ね、ダフネ、會ひに尋ねて來たりして。其奴はさう思つてゐるやあがるのか知ら？奥様ははねつけておやり遊ばしたの、そりや氣

味好くおやりなすつたのよ。

ダフネ (祈禱臺の傍の屏を少し開いて) それはよかつたわね、レジネラ。しかし奥様が祈禱書を待つてゐらつしやるのよ。

レジネラ (卓上の數冊の本を揃へながら) もう一つの出来事と言ふのは、そりやもつと恐いことなの、それを私も確かだと思ふの。家の中で間隙に出會したことを主人に知らしたものだから、あの氣の毒なバリヌーロは直ぐとその晩死んでしまつたのよ。毒藥よ、ね。用心のためによく教へといてあげませう。まづこの屋敷の中では自分の言ふことによく氣をつけなければいけないのよ。壁の中で誰かしら何時も聞いてる奴があるんだから。

ダフネ さあ、急いで。お話はまた今度に致しませう。奥様が待つてゐらつしやるわ。

レジネラ (尙ほ揃へながら、ぢつと眼を卓上に遣つて) 貴方そんなに急しければお先へゐらつしやい。私は貴方よ。(ダフネ去る、屏がしまる、レジネラはそれに氣もつかないで)——だけれども、ねえ、ダフネ、こんな呪はれたお屋敷では黙つてゐるのが好いのよ。安心してゐられるのは唯この部屋ばかりだよ。此處ならまあ、安心だわ。言ひたいことも言へるわ。話をして立聞きされる憂のないのはたゞ此處一間ばかりよ。(彼女が最後の言葉を喋つてゐる時に右手の壁に背を向けてゐる戸棚が自然に廻つて、其處からオモデイが現はれて出るけれども、彼女はそれに氣もつかない、戸棚は再び元に戻る)

オモデイ 話をして立聞きされる憂のないのは、たゞ此處一間ばかりだよ。

レジネラ (振返つて) あれえ！しつ！(彼は服を開いて天鵞絨の胸衣を表はす、それにはC、D、Xの三字

が銀で刺繍してある。レジネラは震へあがつてその文字と人を見較べる——吾々の一人を見て、その見たことを何かの合圖で、たとへどのやうな人にでも知らせるやうなことがあるれば、その日の果てぬうちに生命はないぞ。——人民の中では吾々の噂をしてゐる、お前もかういふ風にして起るものだといふことは知つてゐる筈だ。

註 C、D、XはConceil des Xの略。Xは羅馬數字にしてフランス語のXに相當す。即ち「十人議會」の略字なり。

レジネラ イエス様！いつたいこの人はどこの戸からはいつて來たんだらう？

オモデイ どこの戸でもない。

レジネラ イエス様！

オモデイ 俺の尋ねることを悉く返答しろ。そしてどんなことにも嘘を言つてはならない。お前の生命がなくなるぞ。この戸は何處へ行くのだ？（彼は奥の大戸を指す）

レジネラ 殿様のお寢間へ。

オモデイ （大戸の側の小さな戸口を指しながら）ではこの方は？

レジネラ 御殿の廊下に通じてゐる祕密の階段へ。その鍵は殿様だけがお持ちです。

オモデイ （祈禱臺の傍の戸口を指して）そしてこつちのは？

レジネラ 奥様の御祈禱室へ。

オモデイ その祈禱所には出口があるか？

レジネラ いゝえ、祈禱室は小塔の中にあります。それには格子窓が一つあるだけです。

オモデイ （窓口へ歩み寄つて）こつちと同じ高さにあるんだな。よし。圍から尖峰まで八十呎と。そして下がブレンタ河か。鐵格子などは贅澤だ。——しかしこの祈禱室には小さな階段があるな。何處へあがつて行くのか？

レジネラ 私の部屋へ、そしてまたダフネの部屋とも言へます。

オモデイ その部屋には出口があるのか？

レジネラ いゝえ、貴方、格子の附いた窓が一つ、それから祈禱室へ降りる戸口、その外にはもう出入口はありません。

オモデイ 奥さんはいつて來たら直ぐにお前は自分の部屋へあがつて行け、そして何にも聞かず何にも言はずつとしてゐるのだ。

レジネラ 承知しました。

オモデイ 奥さんは何處にゐるのだ？

レジネラ 御祈禱室に。御祈禱を遊ばしてゐらつしやいます。

オモデイ 直ぐに此處へまた來るのだらうな？

レジネラ 左様でございます。

オモデイ 半時とはかゝるまいな？

レジネラ はい。

オモデイ よし。お前は行け。——黙つてゐるのが肝腎だ！此處で起ることは少しもお前には関係ないのだ。猫が鼠をおもちやにするまでだ、それがお前に何うするものか？お前は俺に會はなかつたのだ、俺の存在してゐることも知らないのだ。どうだ、解つたか？一言口を滑らかしても、俺には聞えるのだぞ。眼瞬きしても俺には見えるのだぞ。身振、合圖、握手、俺にはそれも感じられるぞ。それでは行け。

レジネラ あゝまあ！此處で死ぬ人は一體誰だらう？

オモデイ こら、口を利くなら。(オモデイの合圖で、彼女は祈臺の傍の小さな戸口から出て行く。彼女が出て行つて了ふとオモデイは戸棚に近寄る。戸棚は再び自然に廻つて、暗い廊下を見せる) ——ロドルフオさん！もう來ても好い。九段あがるのだ。

戸棚に隠れてゐる階段に足音がする。ロドルフオが現はれる。

第二景

オモデイ。ロドルフオ(マントにくるまつてゐる)

オモデイ おはいり。

ロドルフオ 私は何處へ來たんだらう？

オモデイ 君は何處へ來たんだらう？——大方斷頭臺の上だらうよ。

ロドルフオ 何ですつて？

オモデイ このバドウにはたとへ花や香や恐らくはまた戀に満たされてゐようとも、或る一室が、恐るべき一室のあることが、貴方にも得心が行きましたか？何人も其處へは、たとへ貴族であらうと家來であらうと、また若からうが年寄りだらうが、其處へはゝいることは出来ないのだ。其處にはいつたら、その扉を少しでも開いたら、それは死罪にあたる罪なのだ。

ロドルフオ さうだ、知事夫人の部屋だ。

オモデイ 當つた。

ロドルフオ さては、この部屋が？……

オモデイ 其の部屋に君はゐるのだ。

ロドルフオ 知事夫人のところに！

オモデイ さうだ。

ロドルフオ 僕の愛してゐる女は？……

オモデイ バドウの知事、アゼンロ・マリビエリが妻、カタリナ・ブラガージニと言ふのだ。

ロドルフオ そんなことがあらうことか？カタリナ・ブラガージニ！知事の夫人！

オモデイ 恐しくなつたらまだ時間はある。此處に扉が開けてある。歸りたまへ。

ロドルフオ 僕の身は恐くはない、併しながらあの人が。誰が貴方の事を僕に話してくれるだらう？

オモデイ 俺のことを話してくれるもの、お望みとあれば俺がその話をしませうよ。八日前だ、夜

も更け渡つた時分のこと、君はサン・プロドチモの廣場を通つたことがあつたらう。君は一人きりに

つた。その時君は教會の裏手に當つて劍の響と曳呀うみき聲とを聞きつけたのであらう。君は其處へ隠けつけた。

ロドルフオ さうだ、そして僕は覆面した一人の男を殺さうとかゝつてゐる三人の刺客を追拂つてやつたのだ……

オモデイ その覆面した男はものをも言はず、禮をも言はず行つてしまつた。その覆面した男、それが俺だつたのだ。其の晩からエツツエリノさん、俺は君に好いことをと祈つてゐた。君の方こそ俺を知らないけれど、俺の方では君を知つてゐるのだ。俺は君の愛する婦人に近づいて君を尋ねた。これはその恩返しを。それ以上に別儀はない。もう君も僕を信用してくれるだらうね？

ロドルフオ あゝ、さうでしたか！それは有難う！僕はあの人を裏切る奴ではあるまいかと心配してゐた。心の上に重荷を背負つてゐるが、君がそれを取つてくれる。あゝ！君は僕の友達だ、永久に僕の友達だ！僕が君にしてあげたよりも君はそれ以上の事をしてくれるのだ。あゝ！カタリナに會へない位ならもう何時までも生きてやしなかつたんです。僕は自殺してしまつたでせう、ね、永劫の罰をうけるでせう。僕は君の命を助けたゞけです、それだけなのに君は僕の心を救つてくれるんだ！僕の靈を救つてくれるんだ！

オモデイ 君はかうしてぢつとしてゐるつもりか？

ロドルフオ ぢつとしてゐる位なら！ぢつとしてゐる位なら！僕は君に信頼してゐると言ふのですよ、あゝ！あの人に會へる！あの人に！一時間、一分間、あの人に會へる！君にはその、あの人に

會へるといふことがどんなものか解るまいが……あの人に何處にゐるんです？

オモデイ あそこの祈禱室に。

ロドルフオ 何處で會ふのです？

オモデイ 此處で。

ロドルフオ 何時？

オモデイ 十五分もすると。

ロドルフオ あゝ！それはどうも！

オモデイ (彼に一つ／＼出入口を悉く見せて) 氣をつけてゐる給へ。あそこの奥には知事の寢室がある。今時分はよく眠つてゐる。そしてこの屋敷内にはカタリナ夫人と吾々とを除いたら今時分誰も起きてゐるものはない。今夜、君の身に危険なことは少しもない、と俺は思ふよ。それから俺たちのはいつて来た戸口のことだが、あの祕密は俺一人が知つてゐるので明すわけにはいかない。けれども朝になれば君は易々と逃けることが出来るだらう。(奥へ歩いて行く)これが夫の戸口だ。君のことだがね。ロドルフオさん、君は情夫いんをとこなのだ、(彼は窓を指す)——あいつの使ひかたは教えないで置かうね。何かの場合に。尖峰へは八十呎、下は河だ。それではもう、僕はお暇するとしよう。

ロドルフオ 貴方は十五分間だと言ひましたね？

オモデイ さうです。

ロドルフオ 一人で來るのでせうかね？

オモデイ 多分さうではありますまい。暫時身を潜めてゐるさ。

ロドルフォ 何處へ？

オモデイ 床の背後へ。おつと待つた！露臺の上へ。潮時を見計つて出ておいでなさい。何だか祈禱所で椅子をいざらかしてゐるらしい。カタリナ夫人がはいつて来る。お分れする時だ。左様なら。

ロドルフォ (露臺の傍で) 貴方が誰であらうと、かういふお世話をして貰つたからには、僕の持つてゐるものは、財産でも、此の命でも、すべて貴方の自由になさつて下さい！(露臺に出る。彼の姿は其處へ消える)

オモデイ (舞臺の前へ戻つて来て、傍白)あの女はもう貴方のものではございませんよ。

彼はロドルフォがもう見て居ないのを見て、胸のところから手紙を一通取出して卓上に置く。彼は秘密の出入口から出て行く。その後はまたしまる。

——祈禱室の戸口からカタリナとダフネとがはいつて来る、カタリナはエニス貴族の女服を着てゐる。

第三景

カタリナ、ダフネ、ロドルフォ(彼は露臺に潜んでゐる)

カタリナ 一月越しなの！もう一月もまつともなる事をお前知つてかえ、ダフネや、あゝ！もうおしまひだ。私がまだ眠ることでも出来たなら、夢に位は見るとだらうのに。私はもう眠れもしない。レジネラは何處へ行つたの？

ダフネ 今お部屋へ下がりまして、お祈りを始めてゐました。奥様の御用足しに参りますよう呼んでまゐりませうか？

カタリナ 神様の御用をさせてお置き。お祈りをさせてお置き。あゝ！私には、私には祈つたつて何の效もありはしない！

ダフネ 奥様、あの窓を締めて参りませうか？

カタリナ これでは餘り私を苦しめさせるぢやないか、ねえ、ダフネや。もう五週間になるのだよ。あの人に會はぬ永い永い五週間！——いゝえ、窓は締めないでくれ。少しはさめることであらう。私の頭は燃えてゐる。觸つて御覽。——そしてもう私は會へないのだ！押込められて、見張をされてゐる囚はれの身なんだもの。おしまひだ。この部屋にはいると死罪なんだ。あゝ！もうあの方に會ひたくはない。此處であの方に會ふ！思ふだけでもぞつとする。あゝ、あゝ！この戀もそれでは全く科あるものだつたのか、噫！どういふ譯でバドゥへおいでになつたのだらう？あんなに束の間に消えてしまつたあの楽しさに、どうして私はあんなに引かされたのだらう？私は時々あの方に一時間づゝ會つてゐた。あの時間の何といふ短さ、何といふ早さ、あれは私の唯一つの空氣窓であつた。其處から空氣と太陽とが私の生活に少しは入つて来たものを、今はそれも悉く塞がれてしまつたのだ。私に光を投げるあのお顔も、もう私には見られはしない。あゝ！ロドルフォ！ダフネや、ほんとのことを言つておくれ、もうあの方には會へないとお前も確かに思つておいでやはない？

ダフネ 奥様……

カタリナ けれどもね、私はほかくの御婦人がたとは異つてゐるの。快樂、饗宴、娛樂、どれもこれも妾には何ともない。私はね、ダフネや、七年このかた、私の心の中には考も戀、感情も戀、名はロドルフォとしかないのでよ。私の心の底を見ると、ロドルフォ、何時もロドルフォ、ロドルフォを除けては何にもありはしない。私の心はあの方のお姿に馴染んでゐる。ね、ほかくにはありさうにもないことだ。七年の間私はあの方を愛してゐるの。私はまだ若かつた。お前たちもどんなに情容赦もなく嫁入らされることだらうねえ！たとへてみれば、家の旦那様だ、さうだらう、私は話をしようとさへも思はない。こんなことでほんとうに仕合せな暮しが出来るものだと思ひかえ？私は何といふ境遇だらう！まだお母様でもゐて下すつたら！

ダフネ そのやうな悲しいお考へは奥様、もうおよし遊ばせ。

カタリナ あゝ、このやうな晩にね、ダフネや、私たちは、あの方と私とはどんなにか好い時を過したらう。あの方のことを此處で私の話すのがみんな科になるんだらうか？いゝえ、さうぢやないの？さあ、自分の苦しきのためにお前を滅入らせて了つたわね、お前を苦しめたくはない。行つてお休み。レジネラを見に行つといで。

ダフネ そして奥様は？……

カタリナ あゝ、私は一人うっちゃらかしとこう。よくお休み、ダフネや、さあ。

ダフネ 今夜は天が貴方をお守り下さるやうに、奥様！

彼女は祈禱所の戸口から出て行く。

第四景

カタリナ。ロドルフォ(最初は露臺の上にて)

カタリナ (唯一人) あの方のおうたひなすつた歌があつた。あの方は私の足下であの柔らかなお聲でお歌ひなすつたつけ！あゝ！時々あの方に會ひたくなつて來ることがある。そのためならこの血汐もやつて了はふものを！とりわけ私へうたつて下すつたあの聯句は。(侍女はギターを取る)——かう言ふ節だつたと思ふが。(彼女は數節、憂愁な音楽を奏でる)——あの歌詞が思ひ出したい。あの方のこの歌をお歌ひなざるのを聞くためなら、この靈も賣つてやらうものを。あの方に、もう一度！あの方を見ないでも、向ふの方からでも、どのやうな遠くからでも、けれどあの方のお聲は！あの方のお聲を聞くことは！

ロドルフォ (隠れてゐる露臺から。彼は歌ふ)

我がたましいは君が心に授けぬ、

たゞ君がかたえにのみぞ我はあり。

同じさだめは吾等を

嬉しき糸もて結びたれば。

君は諧調、吾は琴。

吾は灌木、君はそよ風。

吾は唇、君はほゝゑみ。

吾は戀ごゝろ、君は美にして！

カタリナ (ギターを取り落す) おゝ！

ロドルフォ (尙ほ隠れたまゝ歌ひ續ける)

時は過ぎ

過ぎ去り行けども

暗中に泣く

我が歌は

ほゝゑむ君が

額ぞかすむる

カタリナ ロドルフォ！

ロドルフォ (彼は姿を現はして、露臺の上でマントを脱ぎ捨てる) カタリナ！(彼は彼女の足下に膝まづく)

カタリナ 貴方は此處にゐらつしやつたの？どうして！此處においでよしたの？おゝ！まあ！私嬉

しいのと驚いたのとで死んでしまひさう！ロドルフォ！貴方は何處にゐるのか知つてゐるの？ほか

ノの家にゐるやうに思つてゐらつしやるの？貴方のお命が危いのよ。

ロドルフォ 構ひませんか？もう貴方に會はなければ死んでしまふのだ。貴方に會ふためなら僕は死

んでも好いのだ。

カタリナ よく仰有つて下さつた。さうよ、さうよ、貴方のゐらつしやるのが本當だつたわね。私

の命だつて危いの。貴方に會へば、ほかの事なんか構はない！貴方とかうして一時間、そしたらそ

の次にはあの天井が落ちて來たつて構はない！

ロドルフォ しかも私たちには神様のお加護があるんです。屋敷では皆んな寐てしまつてゐる。は

いつて來たやうにまた出て行くことは譯はありません。

カタリナ どうしてゐらつしやつたの？

ロドルフォ 命を助けてやつた男です……その話をしてあげませう。私のやつた方法はそりや確か

なんです。

カタリナ さうでせうね？あゝ！大丈夫なら好いけれど。あゝ！それでは私を見つめて下さい、私

が貴方を見てゐるやうに！

ロドルフォ カタリナ！

カタリナ あゝ！私たちはもう二人以外のことは考へないやうにしませう！貴方は私のことを、私

は貴方のことを。私大へんに變つたでせう？その譯を申しますとね、五週間このかた私は泣くより

ほかにどうしようもなかつたのです。そして貴方はその間どうなすつてゐらつしやいました？少

くも悲しかつたでせうね？あゝいふお別れをしましたが貴方にはどんな結果になつたこととせう？

それを話して下さい。ものを言つて下さい。私貴方に話をして頂きたいの。

ロドルフォ ね、カタリナ！貴方に離れてゐることは、眼の上が暗黒になり、心の中が空虚になる

やうなものだ！毎日少しづつ死んでゆくやうなおもひなのだ！土の牢に燈火もなく、夜に星もないさまだ！もう生きてもゐない、もう考へもしない、もう何にも解らないことなんだ！僕、やつたことをと貴方は言ふが、僕はまるで知らないのだ。これが僕の感じたことだ。

カタリナ え！私もよ！私もよ！私たちの心は離れてはゐなかつたのだわねえ。いろ／＼お話しなければならぬことがあるわ。けれど何處から始めたらいいのかしら？私はね押し込められてゐるの。私はもう出ることが出来ないの。私大へん苦しみましたわ。ね、貴方のお襟へ直ぐにも私が飛びついて行かなかつたことを不思議に思つちやいけませんよ、これが私の捕へられてゐた話ですの。あ！貴方のお聲を聞いた時、私は言を言ふことが出来ませんでした、自分が何處にゐるのかももう解らなくなつてしまひました。さあ、其處へかけてください、ね？何時かのやうに。小聲でお話致しませうね。朝までゐらつしやるのでせう。ダフネにお送りさせますわ。あ！何て嬉しい時でせう！え、もう私何にも恐くはない、貴方がすつかり心丈夫にして下さつたんだわ。あ！貴方に會へて嬉しいわ。貴方が極樂か、私貴方が好い、私どんなにか泣いてゐたでせう！ダフネに尋ねてみて下さい。あの人は私に大へんよくしてくれるんですの、あの人に貴方、お禮を仰有つて下さるわね。そしてまたレジネラもよ。ですがね貴方、よく私の名が解つたのね？まあ！何にも貴方の困ることはないわ。何かしようと思ふと、貴方はしないではおかないのね。あ！ちよつとまたらつしやる手段がございませう？

ロドルフォ え、また來ないでどうして僕が生きてゐられませう？カタリナ、僕は貴方の言ふこ

とを夢中になつて聞いてゐるのだ。ねえ！何にも心配しないで。御覽、今夜のまゝ静かなことは、あらゆるものが僕等の心の中では愛だ、あらゆるものが僕等の周圍では休息だ。互ひに注ぎ合つてゐる吾々の靈のやうな二つの靈、カタリナ、それは神も亂すこと欲しない淨い尊いものなのだ！僕は貴方を愛し、貴方は僕を愛してゐる。そして神様が吾々を見てゐらつしやる！今頃起きてゐるものは吾々たゞ三人きりなのだ、何にも心配することはありませんよ。

カタリナ え。そしてそれから人には時々何もかも忘れてしまふ場合がございますわ。楽しい時には双方ともに眩惑されて了ふものよ。ねえ、ロドルフォ、別れてゐると私はほんのあはれな囚人だし、貴方もあはれな追放人に過ぎません。私たちは二人とも天使が羨ましいわね。え！お！いや、天使だつて私たちほどの天にゐるんぢやないわ。ロドルフォ、嬉しさでは死ぬもんぢやないことね、それでなければ私は死んでゐる筈よ。私の頭は何もかもこんがらかつて了つたわ。今私はいろんなことを尋ねましたわねえ、私もう自分の言つたことが一言も思ひ出せませんの。貴方覚えてゐらつしやる？あ！夢ぢやないのかしら？ほんとに貴方は其處にゐらつしやるのね、貴方は其處にゐらつしやるのね、貴方は！

ロドルフォ いぢらしいことを！

カタリナ いえ、ねえ、ものを仰有らないで頂戴、私の考をまとめさせておいて頂戴、貴方を眺めさせといて頂戴！今直ちに返事をしますからね。人にはこのやうに、ねえ、黙つてゐらつしやい、貴方を眺めてゐるんだから。黙つてゐらつしやい、貴方を愛してゐるんだから。黙つてゐらつしやい、

私は幸福なんですから。と、自分の愛する人に言つたり眺めたりしてゐる時があるものですわ。
 (彼は女の手に接吻する。彼女は振返つて卓上の手紙を見つける)——あれは一體何でせう？まあ！私を呼び醒す紙が此處にある！手紙！この手紙は貴方でもあそこへのせてお置きなすつたの？

ロドルフォ オ いゝえ、しかし屹度僕と一緒に來た男でせうよ。

カタリナ 貴方と一緒に男が來た！誰？ねえ、この手紙は一體何でせう？(彼女は手早くその手紙の封を切つて讀む)——『シブルの酒でなければ酔はない人たちがあゝ。精練した復讐でなければ喜ばない人たちがあゝ。夫人、愛してゐる警吏は極く小さいが復讐する警吏は非常に大きいのだ』——

ロドルフォ はてなどういふ意味なんだらう？

カタリナ この手紙を私は存じてゐます。エニスにゐるとき、私に戀して、口説いたり、或日などは私の家へまでもやつて來て、追拂はれた耻知らずです。その男はオモデイと云ふのです。

ロドルフォ なる程。

カタリナ 十人議會の間牒です。

ロドルフォ えつ！

カタリナ 私たちはお仕舞だ！斷頭臺だ、そして此處で捕まるのだ。(彼女は露臺へ行つて眺める)あゝ！あれ！

ロドルフォ 何です？

カタリナ 燈を消して下さい。早く！

ロドルフォ (燈を消して) どうしたんです？

カタリナ モリノ橋の所の廊下に……

ロドルフォ ふん？

カタリナ 私彼處へ行つて燈火の點いたり消えたりするのを見て來よう。

ロドルフォ 俺としたことか何て淺幕な馬鹿者だらう！カタリナ！貴方の滅亡のもとが僕なんだ！

カタリナ ロドルフォ、貴方が私の所へ來て下すつたやうに、私が貴方のところへ行つたことだらうと思ふわ。(奥の小さな扉に耳を寄せて)——黙つて！聞いてゐませう。——廊下に音がするやうです。さうだ、誰か扉を開けてゐる、歩いて來る！——貴方は何處からはいつて來たの？

ロドルフォ 彼處の、あの化物が締めて行つた隠扉から。

カタリナ どうしませう？

ロドルフォ あの扉は？……

カタリナ 夫のところへ通つてゐるの！

ロドルフォ 窓は？……

カタリナ 淵へ！

ロドルフォ こつちの扉は？

カタリナ 私の祈禱室よ、其處には出口がありませんの。何か逃げる手段は。おんなじことだ、此處へはいつてゐらつしやい。(彼女は祈禱所を開く。ロドルフォ其處へ飛び込んで行く。彼女は鍵をとぎす。

獨り残つて二廻りかけて置きませう。(彼女は鍵を取つて胸の中に忍ばせ)——何が起つて来るか誰に解らう? 屹度あの方は私を助けたくなくなつて来るだらう。出てゐらつしやるだらう、そして身を亡してお了ひなさるだらう。(彼女は奥の小さな方の戸口へ行く)——もう何にも聞えなくなつた。おや! 歩いてゐる。立ち停つた。屹度様子を窺ふためなんだらう。お、さうだ! まだ寝てゐるやうな風をしてゐてやらう。(彼女は寢臺の幕をとさす。扉が開く)

第五景

カタリナ。ラ・チスベ。

ラ・チスベが眞蒼になつて、ランプを手に持つてはいつて来る。自分の身の廻りを見廻しながらそろ／＼と足を運ぶ。テールアルの所へ来ると今消したばかりの蠟燭をしらべる。

ラ・チスベ　蠟燭がまだ燃つてゐる。(彼女は振返つて寢床を見つける。其處へ馳せつけて幕を引く)——人きりだ。寐てゐるやうなふりをしてゐるのだね。(彼女は扉や壁を調べながら部屋の中を廻り始める)——これは主人の扉だ。(張布の中にかくされてゐる祈禱所の扉を手の甲で叩く)——此處にも扉がある。

カタリナは床の上に起き直つて、女のすることを呆れて眺めてゐる。

カタリナ　あれは全體何だらう?

ラ・チスベ　あれは? 全體? ふん、私がお前さんに言つて、あけやうと思つてるところなのさ。あれは知事の妻君を掌中に握つてゐる知事の情婦さ。

カタリナ　まあ!

ラ・チスベ　あれは全體何でせう、奥さん? あれは道化役者でございますよ、芝屋の娘でございますよ、貴方がたの仰有るやうに踊りつ子でございますよ。その手の中にはね、私やそのことを言つてあけやうと思ふのさ、偉い貴婦人様を、亭主持ちの御婦人を、尊敬されてゐる御婦人を、貞節家を手に握つてゐるのでございますよ! 手の中にも、爪の中にも、齒の中にも握つてゐるのでございますよ! お好み次第にすることが出来るのでございますよ! 偉い貴婦人様でも、あの御高名な金鍍金屋さんでも。引き裂きでも、粉々にでも、ほろ／＼にでも、片々にでも致すのでございますよ。どんなことになるか知らないが、私はね、其處に、私の足の下に、さういふ人を一人、あなたがたのやうな方を一人ふんづかまへてゐるのでございますよ! わたしや助辨しやしないよ! 静かにしてゐらしやるがようございますよ! そんな女に對しては、其んな奴の顔に私の顔を向ひ合はせるよりか、そいつの頭の上に大樽でものせて置く方が餘程相應してるといふものだよ! さあ仰有い! 奥さん、自分の家へ男を引きすり込んでゐながら私を眺めてゐるなんて圖々しい!

カタリナ　奥さん……

ラ・チスベ　隠してゐるんだ!

カタリナ　貴方は間違つてゐるんだわ!

ラ・チスベ　へえんだ! お言ひでないよ。彼處にゐたんだよ! 貴方たちのゐた場所はあの安樂椅子で後がついてゐるんだよ。お前さんもせめてあれを崩して置けばよかつたんだ。そしてどんなことを

話してゐたのさ？いろいろな甘たるいことを、ね！いろいろな美しいことを、ね？貴方を愛します！貴方は可愛い！私はあなたのものよ！つて……へえんだ！私に觸つておくれでないよ、奥さん！

カタリナ

私には合點が参りませんわ……

ラ・チスベ

而もお前さんがたは私たちより劣つてゐるのだ！私たちが男にまつびる間聲高に言ふことを、貴方がたは嫌らしい、夜中にこそく言つたりして。とつかへつこの時間しかありはしない！私たちはお前さんがたの旦那様を盗む、お前さんがたは私たちの男を取る。相撲なんだ。ようござんすとも、勝負しませう！へん！虚飾、偽善者、寐返り者、貞節顔、お前さんがたは何といふ嘘つき女だらう！いゝえ、ほんとうに私たちとは比べ者にもならないのだよ！私たちはね、私たちはね、私たちは誰も瞞しはしませんよ！それだのにお前さんがたは世間を瞞着する、家族を瞞着する、夫を瞞着する、出来れば神様まで瞞着するつもりだらう！ふん！エールを被つて街をお通りなさる貞節な御婦人様がた！その方たちは教會へゐらつしやる、其處でお並びなさる、そこでお辭儀をなさる、そこで平伏なさる！いゝえ、並ぶな、お辭儀もするな、平伏するな、眞直ぐその女たちに向つてゐらつしやい、エールをひきめくつて御覽なさい、エールの下に假面マスケがあります。その假面を引きめくつて御覽なさい、その假面の下には嘘を言ふ口があるんだ！ふん！そんなことは私にや同じことさ、私は知事の情婦で、お前さんは知事のお内儀さんさ、そして私やお前さんをじくなくしてしまひたいのさ！

カタリナ

まあ！奥さん……

ラ・チスベ

何處にゐるんだよ？

カタリナ

誰が？

ラ・チスベ

あの人だよ！

カタリナ

此處には私一人きりですよ。ほんとうに一人つきり。たつた一人。貴女の尋ねることが一向合點が参りません。私は貴女を知りません、だけれど貴方の言葉が恐いので氷のやうになつてしまふ、奥さん！私が貴方に對してどのやうなことを致しましたか知りませんが、貴方のお利益たぐひになるやうなことは、こんなところにはなからうと存じますわ……

ラ・チスベ

こんなところに私の利益になるやうなことがあるなら！私や全くさう思つてゐますよ、一つあると！お前さんは疑つてゐるでせう、お前さんは！御貞節な御婦人がたには信用の置けないもんだねえ！私が腹を立てゝゐなかつたら、今お前さんに言つたやうに言へるものだらうかねえ？それが私にどうしたといふのさ、私に、私がお前さんに言つたすべてのことがさ？お前さんが偉い貴婦人様で、私が道化役者だといふことが、それが私にどうしたといふのさ？ちつとも違ひはありやあしない、私だつてお前さんのやうに美しいんだよ！私の心の中には恨があるんだと言ふのに、だから出来るだけお前さんに赤恥かゝしてやるんだよ！あの人を何處へやつたんだよ？その人の名前かい？私やあの人に會ひたいんだ！ふん！あの狸寐入をしてゐたことを考へると！ほんとうにお恥しい話さね！

カタリナ

まあ！私どう推察すれば好いのでせう？夫の名にかけて、奥さん！若し貴方が御存じで

したら……

ラ・チスベ あそこに戸口のあることを知つてますよ！確かにあの人はあそこにゐるんだ！

カタリナ あれは私の祈禱所ですよ、奥さん。ほかのものとは違ひます。誰もゐないことは私がお請合致します。若し御存知でしたら！貴方は騙されたのだと思ふわ。私は引き籠つて唯一人、あらゆる人の眼からかくされて暮してゐるのでございますの。

ラ・チスベ ゴールだ！

カタリナ あれは私の祈禱所です、請合ひます。あそこには、私の祈禱臺と祈禱書しかございませ

ん……

ラ・チスベ 假面だ！

カタリナ あそこには誰れも隠れてはゐないことを私が誓ひますわ、奥さん！

ラ・チスベ 嘘を言ふ口だ！

カタリナ 奥さん……

ラ・チスベ それは全くさうなんです。けれどさう云ふ口の利きかたから、傷持つ足の罪人みたいな様子をするなんて、お前さんは氣狂かよ！お前さんは充分に確信して知らぬと言ふのではないのだ。さあ立てるものなら立つて御覽なさい、奥さん、怒れるものなら怒つて御覽なさい。さうしたら知らぬでも通りませうよ！（彼女はふと露臺の側の床の上に脱ぎ捨てゝあるマントを見つくる。彼女は駆け寄つてそれを拾ひあげる）——ほら！ね、もう駄目なことですよ。こゝにマントがある。

カタリナ あつ！

ラ・チスベ いゝえさ、これはマントではありませんかねえ？これは男のマントではありませんか。え？不幸なことにはこれが誰れのもんだか解らないことです、けれどかういふマントといふものはどれもこれも似てゐるものでねえ。さあ、用心をしてその男の名前を言ふが好いのだ！

カタリナ 私には仰有ることが解りませんの。

ラ・チスベ あれはお前さんの祈禱所ですね、あれは？ようござんす、開けて下さい。

カタリナ 何故？

ラ・チスベ あたしも神様へお祈りがしたいのですよ、私も。開けて下さい。

カタリナ あの鍵は失くなしてしまひました。

ラ・チスベ さあ開けろ。

カタリナ 誰れが鍵を持つてゐるのか存じません。

ラ・チスベ ふん！貴方の旦那様が持つてゐるんだな！アンゼロ様！アンゼロ様！アンゼロ様！（彼女は奥の戸口へ駈けて行かうとする。カタリナが飛んで行つてそれを引き留める）

カタリナ いけません！あの戸口へは行かないで下さい！いゝえ、行かないで！私は貴方に何にもしたことはありません。貴方が私に對してどう思つてゐらつしやるのか私には解りません。貴方は私を殺すやうなことはなさらないでせうね、奥さん、私を憫れんでくれるでせうね。一寸待つて下さい。貴方が見に行くんですと。私がお話することに致しませう。一寸、ほんの一寸だけ。私は貴

方が此處へはいつて来た時から驚いてわな／＼してゐたのです。そして貴方の言葉が、私に仰有つたことゝいふものは、私ほんとうに膽をつぶして了つてちつとも解らなかつたのです。貴方は道化役者だと言ひました、私が偉い貴婦人だと言ひました。それからもう解らなくなつて了ひました。私は彼處に誰れも居りませんと誓つて貴方に申します。貴方はあの警吏のことは仰有いませぬが、もとの起りといふのは確かに彼奴だと思ひます。あの男は恐しい男です、貴方を瞞してゐるのです、間牒まはしめ！間牒者なんか信用されはしませんわ！ねえ！一寸聞いてゐて下さい。女同士の中では一寸の間ぐらゐる相見互ひでございませぬ。私が祈るやうな男はさう善い人ではないでせうよ。しかし貴方、憫れんで下さい。貴方は悪い人にしては餘り美し過ぎる。あれは、あの間牒は、あの警吏は賤しい男だと申しました。理解するには充分です、貴方は私を殺させるやうにしたことを直ぐと後悔なさるわ。若し私の境遇を御存知でしたら、貴方は憐れんで下さることとせう。私には罪惡なんてございませぬ、甚だしい罪惡なんてございませぬ、ほんとうに。多分何かゝるはづみなことをしたことはあつたでせう、けれどそれは私にもう母がなくなつたと云ふことです。貴方に白状しますけれど私にはもう母がございませぬ。ね！私を憐れんで下さい、あの戸口へは行かないで下さい、お願いします、お願いします、お願いします！

ラ・チスベ

お仕まひだ。いゝえ！私にはもう何にも聞えませぬよ！殿様！殿様！

カタリナ

待つて下さい！あゝ！神様！あゝ！待つて下さい！私が殺されてしまふことを貴方は知らないです！せめて一寸の間待つて下さい、もうほんの一寸の間だけ、神様にお祈りするだけ！

いゝえ、此處から出は致しません。見てゐて下さい、あそこへ跪まづくのです……（彼女に祈臺の上方にある銅の磔刑の基督像を指してみせる）——あゝ！ね、後生ですから、私の傍で祈つて下さい。どうぞ、ね？そしてそれからまだ私を殺したければ、神様がさういふ考を許してお置きになるならば、貴方のお好きなやうになさるがよい。

ラ・チスベ

（彼女は磔刑像に飛び寄つて壁からそれを外し取る）この磔刑像は一體何です？何處から手

にはいつたのです？何處から手に入れたのです？誰に貰つたのです？

カタリナ

何を？この磔刑像？まあ、勿體ない！あゝ！その像のことをそんなにお尋ねなすつたつて貴方には何のお役にも立ちませぬ！

ラ・チスベ

どうして貴方の手にあるのです？早く仰有い！

燈が露臺の傍の祭器卓クレダニスの上に置いてある。ラ・チスベは其處へ行つて像を調べる。カタリナも彼女の後に續く。

カタリナ

えゝ、それは女です。その底に書いてある名を見たでせう。私の知らない名なんです。

チスベでしたつけ。殺されかゝつてゐたあはれな女です、私はその命乞をしてやつたのです。それが私の父でしたから承知してくれました。ブルスチアです。私はまだほんの子供でした。あゝ！私を殺さないで下さい、私を憫れんで下さい、奥さん！その時その女がその像をくれたのです、これで貴方に仕合せなことが来るだらうと言ひながら。それだけです。確かにそれでほんとにすつかりです。けれどそれが貴方にどうかしましたか？何故用もないものゝ話を聞いたんです？あゝ！私

ラ・チスベ (傍へ) あゝ！お母さん！

奥の扉が開く。アンゼロが現はれる、寢巻を着てゐる。

カタリナ (再び舞臺の前に来て) 旦那様だ！私は殺されてしまふのだ！

第六景

カタリナ。ラ・チスベ。アンゼロ。

アンゼロ (露臺の傍に立留つてゐるラ・チスベには氣もつかず) いったいどうしたんだい？お前の所に今物音が聞えたやうに思ふが？

カタリナ 貴方……

アンゼロ 今時分寝ないでゐるなんて、お前はどうかしたのかい？

カタリナ それは？

アンゼロ おや、お前はひどく震へてゐるね。お前の所に誰か居るんだね！

ラ・チスベ (舞臺の奥から進み出ながら) はい、殿様。私よ。

アンゼロ お前は、チスベか！

ラ・チスベ はい、私よ。

アンゼロ お前がこんなところへ！真夜中に！お前が此處にゐるとは、今時分此處にゐるとは、どうしたことだ、而も妻は……

ラ・チスベ ひどく震へてゐるんですか？私は言ひに来てあげたのですよ、殿様。お聞き遊ばせ。あんなに震へてゐらつしやるのも當りまへでございますの。

カタリナ あゝもう！おしまひだ。

ラ・チスベ 一言です。貴方は明朝暗殺されねばなりませんよ。

アンゼロ 俺が？

ラ・チスベ 貴方は御殿から私のところへお出で遊ばす時、朝何時も一人でおいで遊ばすでせう。私今夜その知らせを聞いたのでございます、だから大急ぎで、明日は貴方のお出まし遊ばすのお留めしなければなりませんよと奥様に言ひに来たのでございます。私が此處に、而もこんな真夜中に此處にゐるといふのは、そして奥様があんなにひどく震へてゐらつしやるのは、かういふわけでございますの。

カタリナ (傍へ) まあ！この人はいつたい何だらう？

アンゼロ そんなことがあることだらうか？よし、そんなことに俺は驚きはしない。俺が危険の中にはさまつてゐるといふことをお前に話して全くよかつた。誰がそんな知らせをしてくれたのだね？

ラ・チスベ 知らない人、逃がしてやる約束でその話を聞いたのです。私はその約束を承知してやりました。

アンゼロ そいつは間違つてゐる。約束しても捕まへるものなのだ。どうしてお前は屋敷へはいつ

て來られたのだ？

ラ・チスベ　その男が入れてくれました。その男はモリノ橋の下にある小さな戸口を開けることを知つてゐたのでございます。

アンゼロ　それ見ろ！そして此處まで入りこんで來るには？

ラ・チスベ　えゝ！それはあの鍵、貴方から何か頂きましたね？

アンゼロ　この部屋を開けるものだとは言はなかつたと思ふがなあ。

ラ・チスベ　いゝえ確かに。貴方はそれをお忘れ遊ばしたのよ。

アンゼロ　(マントを見つけて)あのマントはいつたい何だ？

ラ・チスベ　あれはその男が御殿へはいるのに貸してくれたマントでございます。帽子も持つて來ましたけれど、私どうしてしまひましたか解りませんの。

アンゼロ　さういふ男たちが自分等の好き自由に俺の屋敷へ出入することを考へてみてくれ！俺の生活は何といふものだらう？俺は何時もこの着物の垂れ下りを良にひつかけてゐるのだ。そしてチスベ……

ラ・チスベ　あれ！ほかのお尋ねは明日までお預りね、殿様、お願いですの、こんな夜中に、命を助けて貰つて、貴方は御満足でございますが、私たちには、奥様や私には唯のお禮も仰有らない。

アンゼロ　あやまる、チスベ。

ラ・チスベ　奥が向ふに待たしてありますの。彼處までお手を拜借出來ませんかしら？奥様にはもう

休ませてさしあげませう。

アンゼロ　俺はお前の命令次第だよ。ドナ・チスベ。すまないが俺の居間から行かう、劍を持つて行くから。(奥の大扉に行く)おい燈火だ！

ラ・チスベ　(彼女はカタリナを舞臺の前方の傍の方へ伴れて行く)直ぐあの人を逃がしておしまひなさいまし。私が來たところから。此處に鍵がございます。(祈禱所の方に向つて)——あゝ！あの扉！あ

あ！切ない！若しあの人でございましたら、ほんとうのことは知らさないで下さいまし！

アンゼロ　(戻つて來る)待つてゐるんだよ、おい。

ラ・チスベ　(傍へ)あゝ！あの人を通るところだけでも見られたら！何か手段が！あの方は行つてしまはなければならぬのだ！あゝ！……(アンゼロに)——さあ参りませうよ、殿様。

カタリナ　(二人の出て行くのを眺めながら)あゝ夢のやうだ！

第三日

白に黒

第一部

あばら家の内部。数箇の粗末な家具、片隅に半分編みかけてある藁の籠一つ。奥に戸口。左方の角には、虫蝕だらけの扉が半ば開かれてゐる窓。同じ側にすつかり鎖されてゐる一種の長窓。反対の側には戸口、右手の一隅を鎖してゐる爐。鎖されてゐる長窓の傍に綱、壁に立てかけられてある箕子、大きな石の山。

第一景

オモデイ。オルデラフオ。

オルデラフオ　おい、オモデイ、あの窓からなんだ。(彼は鎖されてゐる長窓を指す下には河が流れてゐる。) 知事だとか何だとかいふお歴々が何奴かをやつつけてしまはふてえと何時でもよ、半死半生になつた奴を此處へ擔ぎ込んで来るんだあな。箕子に縛りつける、その四隅へころ合の石をくつゝける、そしてあの窓からほふり出すのだあな。その後は河の野郎が始末をつけてくれるつてわけさ。エニスにオルフアノ河があれば、バドウ河やブレンタ河がある。どうだい！この家は知らなかつたらうが？

オモデイ　こちららはこの町ぢや全くの新参者と來てゐる。まだすつかり事情が呑み込めない。しかし俺のしようと云ふ仕事にや、全くこの小屋はうつてつけの場所だ。人里は離れてゐるし、あのレジネラ奴が屋敷へ歸る道ぢやあるし。

オルデラフオ　レジネラたあ全體何だね？

オモデイ　好いつてことよ！好いつてことよ！黙つて返事をしな——この家にや誰がゐるんだ？

オルデラフオ　人の面した犬が二匹よ、一匹はオルフエオ、今一匹はガボアルドーといふ奴さ。今に歸つて來るから見るが好い。

オモデイ　其奴等二人は此處で何をしてゐるんだい？

オルデラフオ　夜の首斬役、死骸のかくまひてだ。祕密な事件の流はみんな、ブレンタの水と一緒に流れて行くのさ。——それはさうとしてもとの話に戻らうよ。貴公例のをしくじつたとか言つたな。

オモデイ　さうだ。

オルデラフオ　あんな女を一人追ほり込んで置きや、大丈夫だと思つたのが、とんだ大へまなんだ！オモデイ　お前は自分の言ふことを知らねえな。どいつを殺しても好いといふ考があればさ、とつかゝるのに一番好い刃物と云やあ、まあ女の嫉妬だ。さうよ！女といふ奴は大抵敵を取るものだ。あいつの頭に何が通りやがつたかそれが俺にや腑に落ちない。小刀の使方を覺える位のためなら、あの道化役者の話なんざ眞平御免だ。あいつらの悲劇は皆んな舞臺の上で片附いてしまふのだ。

オルデラフオ　俺だつたらすつかり知事の忠義者になつてやつたのに、そしてかう言つてやつたものを、えゝ貴方の奥様は……

オモデイ　お前だつたにしたつて知事にすつかり忠義者になるといふわけにやあ行くまいよ、そして、貴方の奥様はとも言へなからうよ。だつて彼奴を捕縛する任命のあるまでは知事となんかの關係をつけるつてこたあ、俺だつて貴公だつて、皆んな一同にあの名高い十人議會から禁止されてゐるぢやないか、それは俺ばかりでなく貴公だつても知つてゐるだらう。死刑になつてまでも知事に話をしたり、手紙をやつたりすることは出来やしないしさ、それに俺だつて監視されてゐるつてことはよく知りきつてゐる癖に。誰に解るもんか？俺を見張つてゐる奴はおほかたお前くらゐなものだらうよ！

オルデラフオ　オモデイ、俺たちあ友達だぜ。

オモデイ　理屈はぬきだ。俺だつてお前に用心してゐるたあ見えやしまいが。

オルデラフオ　おい！オモデイ兄弟！

オモデイ　だけれど俺はこれで用心してゐるんだぜ、おい！

オルデラフオ　俺が貴公にどういふことをしたか知らねえが。

オモデイ　どういふこともしやしないが、馬鹿けた質問をさ。それだけのことよ。それからまた俺だつて好い氣持ちやないのさ。なあ俺たちは友達だ、貴公の手を貸してくんな。

オルデラフオ　それで貴公は敵打を断念するつもりか？

オモデイ　寧ろ自分の生活にだ！オルデラフオ、貴公はこれまで女に惚れたことがないから、女に惚れるといふのはどんなものか解るまい。そして振られたり、赤恥かいたり、こつちが間諜であるところへもつて来て、間諜なんて呼びやがつて、名前を口笛で高々とやられてみねえ！あゝ！さういふ時その女に、あのカタリナに對して感ずるものは、なあおい、そりや戀でもない、怨みでもない、怨んでゐる戀なんだ！悪化した燃えるやうな恐しい熱情は唯一太刀の復讐だけが望みなんだ。俺はあの女に敵打してみせる、あの女を捕へてやる、足をひつ掴んで墓の中へ引きすり込んでやるんだ、見てくれ、オルデラフオ！

オルデラフオ　貴公の計畫も外れてしまつた。どうするんだえ？

オモデイ　もう考へがちやんと出来てるんだ。(彼は奥の窓へ行く)うん、丁度好い、オルデラフオ！手を貸してくれ。此處へ来てくれ。——赤いマントを着た女が見えるだらう、向ふの方に？こつちの方へやつて来る。

オルデラフオ　それで？

オモデイ　外へ出て行つて、何喰はぬ顔をしてゐるんだ。其處であの女が側へ來たらやり過しておいてくつついて來るんだ。そつとだよ。そして家の前まで來たら、——戸に彼奴をくつつけるやうにやるんだぜ、——さうして不意に戸へ向けて女を突飛ばしてくれ。扉が開かあ、すると俺も手を合して家の中へ女を引張り込むんだ。後は俺に覺えがある。

オモデイ　すつかり人氣もない。(彼は四邊を見廻して)うん、誰もゐない。女が怒鳴つたら、怒鳴らしておけ。ぢやあ。

オルデラフオは出て行く。

オモデイ　(獨り残つて)この家は全く屈竟な場所だて。此處でなら法王様を殺したつて信者共には聞えやしない。

戸口に足音。扉が開く、手巾で猿轡を箆められたレジネラが見える。オルデラフオがそれを家の中へ突き入れる。

第二景

オモデイ。オルデラフオ。レジネラ。

オルデラフオ　用心のため猿轡をかませてやつた。

オモデイ　(猿轡を取りながら)そいつあ氣が利いた。

レジネラ　まあ！貴方がたは！

オモデイ　さあ、恐いことはない。そんなことは退屈だ。落ちついて返答するんだ。俺を知つてゐるんだもの、恐がるにやあ及ばないさ。お前よく知つてゐるだらう、昨日話をしたつね。俺だよ。こんなに俺は悪いことはしやしなかつたらう！——お前はレジネラと云ふ名だ。マガルツフイの古御殿で、カタリナ夫人がたくらんだあの會叟にロドルフオを案内したのはお前なのだ。今朝、

お前は一時間前に、此處から遠くもないアルチノ橋でロドルフオに出會つたらう。あの男から奥さんへ宛てた手紙を一通うけとつたらう。

レジネラ　あなたは……

オモデイ　その手紙を俺におよこし。

レジネラ　此處にございます。

オモデイ　よし。(彼は手紙の封を切る)

レジネラ　貴方は、貴方は封を切りましたね。

オモデイ　どういふわけで俺を貴方と言ふのか知らないが、俺は間諜だ。こいつあ俺に媚びることをしないこわがり畜生だ。(彼は手紙を読む)結構だが、名がないぞ。こいつあ損だな。この名を何とか知事に知らせる手段をしなくちやなるまいて。

錠の中に鍵の音。灰色の服を着た男がはいつて来る。灰色の髪、太い手。泥まみれの顔。誰もかも顔色を變へる。

オモデイ　あの男は何だ？

オルデラフオ　お前に話をした二匹の番犬よ。オルフエオと言やあ返事をするんだ、も一人の奴も間もなく来よう。夜は番をするから、晝間寐てゐるのだ。

男はオモデイに近寄つて野蠻な様子で彼を眺める。

——彼奴に見せといつてやつてくれ。

オモデイは服を開けて例の三字を見せる。男は帽子ガシタに手を持って行く。
 オルデラフオ (その男に) 寐ちまへ!

男は一言も言はないで一隅に引きさがる。

オモデイ この家にやまだ出口があるのかい?

オルデラフオ うん。あそこに。スカロナ街の方にもあるのさ。

オモデイ その方の戸口からこの女を伴れ出して、一日引き廻してやつてくれ。

オルデラフオとレツネラは言いつけられた戸口から出て行く。男は尙ほ奥の暗の中にて、籠のそばへ座りこんでそれを編んでゐる。

(獨白) これで仕事は大分捗つたと云ふものだ。この手紙だか! マリビエルにこれをどうして手渡したのかな? ロドルフオの名前をどうして知らしたのかなあ? それまではこの手紙を俺が持つてちやなるまい。何處かしつかり置いとける場所はないか知ら? (抽斗付の卓を認める) この抽斗はしまるかな? うん、よし。(彼は抽斗に手紙を入れて鍵を取る) オルフエオ! (男は立ち上つてやつて来る) お前はオルフエオと言はなかつたかい? 俺は行つて来る。今夜はよく張番をしてるてくれ。お前とお前の仲間とでな。誰か消して貰ひに連れて来るかも知れない。女だ。

オルフエオ 彼處にブレンタ河がございます。(彼は舞臺の奥を振返る)

オモデイ (再び腰かけながら) うん! 知事に手紙をやることも、話をすることも出来ないとはいふ拷問だらうなあ! さうすりやあ譯なく事が運ぶんだが! (彼は卓に頭を寄せて、深く考へ込むやうに頭

を抱える)

その時奥の窓框にロドルフオの顔が現はれる。

ロドルフオ (外からあばら家の中を覗きながら) あそこにいる奴は似てるがなあ……(彼は戸をまた少し開ける) 違ひなし。彼奴だ。あのオモデイの奴だ! あゝ! こんな處にゐやあがつたな! (彼は戸を締め消える)

オモデイ (立ち上りながら) さあ、知事に知らせる工夫をしなくつちやならない。——あゝ! 抽斗の

鍵。俺が持つてゐようかな? さうだ、よしと、(彼は身近に締つてゐる奥の戸口から出て行く)

外で人聲。

第一の聲 覺悟をしろ、畜生!

第二の聲 何だと? やい!

第一の聲 覺悟をしると云ふのだ!

第二の聲 ロドルフオさん……

第一の聲 さあ、覺悟をしろ、うぬ! さもなくば犬のやうに殺してくれ!

劍を打合ふ音がする。

オルフエオ (あばら家に一人後に残つてゐたが、一寸頭をもちあげる) あそこで誰だか殺されるさうだ。

(彼は再び籠を編み始める)

第二の聲 うゝむ!……

第一の聲　オモデイ！貴様には命の貸があるのだ。返して貰はふ！
第二の聲　呪ひ！うゝむ！

音止む。遠ざかり行く人の足音。

オルフェオ　（尙ほ縄を編みつゝ）一人は死んだ。

扉を激しく幾つも叩く音。

オルフェオ　其處へ来たのは誰だ？

聲　（外から）俺だ。開けてくれ。

オルフェオ　あゝ！お前かい、ガボアルド！

彼は扉を開けに行く。ガボアルドが兩脚をだらりとさげてゐるオモデイを引ひ張つて来る。ガボアルドはオルフェオに似てゐる。

第三景

オルフェオ　ガボアルド！オモデイ。

オルフェオ　（オモデイを調べる）おや！こりやあ今しがたるた男だ。

ガボアルド　こいつを殺したのは若い紳士だつた。俺が来ると大膽に行つて了つたんだ。若い好い男だつたぜ、全く。

オルフェオ　すつかり參つて了つたかな？

ガボアルド　さうらしいよ。

オルフェオ　でも一寸揺つてみる。——しかし傷からはもう血も流れなくなつたな。

ガボアルド　傷も好い方ぢやねえな。

オモデイ　（眼を開きながら）うゝ！——こゝは何處だ？あゝ！苦しい！お前か、オルフェオ！あれはお前の仲間か！——あゝつ！——俺の財布を取つてくれ、そのポケットの中にある。それをお前たちにやらう。

オルフェオは財布を探す。

ガボアルド　（オルフェオに）苦しませないで置け。もうさつき俺が貰つて置いたあな。

オモデイ　もうさつき——貰つて置いたと言つてゐるな。よし／＼。貴様は氣が利いてさうだ。今俺が一つやつて貰ひたい事を貴様に話すとしよう。まだポケットの中に鍵が一つある。——あゝ！お前は手酷いことをする。——同じことか、それを取つてくれ。よし。これはあの抽斗の鍵だ。開けてくれ。お前は何と言ふのだ？

ガボアルド　ガボアルド！

オモデイ　ガボアルド！よし。抽斗を開けろ。紙がはいつてゐる。それを持つて来い。よし。これを、この紙を知事のところへ持つて行つて貰ひたいのだ。いゝか、解つたか？知事に。この紙を。

あゝ俺は死んで行く。何か書くものを。

オルフェオ　書く！それや何のこつた？

ガボアルドー 俺たちにや何にもねえ。

オモデイ 何にも書くものがない！呪はれろ！（彼は再び倒れてまた起き直る）それぢや聞いてるろ、聞いてるろ。ガボアルドー。貴様はこの紙を持って知事に、マクビエクさんに會ひに行つてくれるのだ、それは手紙なんだ。いゝか？金貨で百セキン貰へるのだ、いゝか？お前は知事に言ふのだ、これは情男から貴方の奥様のところへ行く手紙だと……あゝ、あいた、あいた……ロドルフォと云つて。その男はロドルフォといふ。その男の名はロドルフォだ。それをよく覚えて置け。あゝ！俺は死んでゆく。けれども俺の復讐は残つてゐるぞ。あゝ！若しかお前が葬むつてくれるのだつたら、俺の腕を地べたの外へ出しといてくれ、俺の復讐を象どるやうに、真直ぐ、高く。ロドルフォだ！解つたな？さあ！俺の言つたことはどうだつた？俺に言ひ直してみてくれ。

ガボアルドー 俺たちが金貨で百セキン貰へると言つた。

オモデイ 馬鹿奴！そんなことぢやない。俺の頭を支へとれ、もう一度言つてやる。よく聞いてるろ。金貨百セキンは、貴様たちがよく話をしないでは貰へないのだ！……あゝ！——聞いてろ。手紙を持つて行くのだ。知事に。奥さんに色男がある。そのことを話すのだ。誰がその手紙を書いたのか。それを話すのだ。ロドルフォと云ふのは誰だ。それを話すのだ。皆んな話すのだ。あゝ息がつまつて来たやうだ。血が其處にある。もつと俺の頭を上げとつてくれ。あゝ！あゝ！運が盡きた！死だ、そしてこんな馬鹿者でなければ俺の復讐を託して行くことも出来ないのか！いゝか？ロ……ロド……ルフォ！彼の頭はがつくりたれる）

ガボアルドー 死んだよ。早く知事のところへ。金貨で百セキン。畜生！手紙があつたかな？さう

だ、お前皆んなよく覚えてゐるかよ、オルフェオ？知事に云ふことは貴方の奥様に色男がある、その男がこの手紙を書きました、そしてその男は何とか言ふ？……何てつたかね？

オルフェオ ロドリゴと言つたよ。

ガボアルドー いや、バンドルフォと言つたよ。

第二部

カタリナの部屋、寢臺を取り巻いてゐる機坐の幕は閉されてゐる。

第一景

アンゼロ。僧二人。

アンゼロ （二人の僧の最初の一人に）バドウ・サン・タントアンの司祭長さん。お寺の本堂と聖所と大祭壇とを早速黒で張らして下さい。二時間以内に、——二時間以内に、——今の今死んで行かうとしてゐる或る立派な人の靈を安んずるために、壯嚴な勤行おんぎんをして頂きたい。貴方も皆さんと御一緒に勤行に出て頂きたいでございます。聖人の御遺品櫃も開けさせて下さい。女王がたになさるやうに白蠟の蠟燭を三百本あけて下さい。一人宛銀貨一ドカトンと金貨一セキンを施してやる六百人の貧民を呼んで下さい。ほかのお飾は黒布へマリピエク家の紋章とブラガージニ家の紋章だけを置いて

下さい。マリビエクの紋は鷲の趾で金です。ブラガージニの紋は赤十字架で空色と銀色とで切つてあります。

司祭長 知事殿！……

アンゼロ あゝ！——直ぐに坊さんを皆んな引き連れて、先頭に十字架と旗とを立て、この公爵邸の墓場へおいでになつて下さい。其處にはローマーナ家の墓があります。其處へ石碑を建てさせました。墓穴も掘らせました。その墓穴を祝福してやつて下さい。時間どつて下さらぬよう。私にもまた祈禱をして下さい。

司祭長 一體それは貴方の御親族でもございませうかな？

アンゼロ さあ！——

司祭長は低く禮して奥の戸口から出て行く。も一人の僧もそれに續いて行かうとする。アンゼロはそれを引き留める。

アンゼロ あなた、大司祭さん、お待ち下さい。——こつちの方に、この祈禱所の中に早速懺悔させて頂きたいものが居ります。

大司祭 御不治の方でも

アンゼロ 婦人で。

大司祭 その御婦人に御逝去の支度をしなければなりませんのでございませうかな？

アンゼロ はあ、——御案内致します。

門監 (はいつて来て) 殿様はチスベ様をお召になりました。あそこに参つて居られます。

アンゼロ 此處へ入れて暫時待たして置いてくれ。

門監去る。知事は祈禱所を開いて、大司祭にはいれと云ふ合圖をする。圖際でそれを引留める。

——大司祭さん。貴方が此處をお出になる時には、貴方のお命にかけて、今お會ひになる女の名を何人たりとも世間へは仰有らないやうに御注意なすつて下さるよう(彼は僧と共に祈禱所へはいる)

奥の扉が開かれると、門監がチスベを案内して来る。

ラ・チスベ (門監に) 私に用のあるといふのは、誰方だかお前知つてゐるかい？

門監 いゝえ、奥さん。(彼は出て行く)

第二景

ラ・チスベ (獨りにて) あゝ！この部屋！亦この部屋へ来た！知事が私に何の用があるのか知ら！今朝は御殿が何だかしめやかだこと。私の身にでも係はつたことかしら？さうかさうでないか、そのためにはこの命もやつてしまはふ。あゝ！あの扉！晝間この戸を見ると、私や何だか妙な氣持がする！この扉の中にはあの人がゐたのだつた！誰だらう？あの扉の中には誰がゐたのだらう？しかし確かにあの人があつたらうか？あの問牒にはあれから會ひもしない。あゝ！惑ひ！人に付き纏つて笑ひも泣きもせずに横眼で睨んでゐる恐い幽霊め！あの人が確に……屹度確かにロドルフォであつたなら、——あそこにあの證據！——あゝ！あの人を殺して了つてやる、知事に告げてやる。い

やく、私はあの女に復讐をしてやるんだ。いや、自殺してはう。あゝ！さうだ、ロドルフオは確かにもう私を愛してはるない、確かに私を瞞してゐるんだ、確かにあだし女を愛してゐるのだ、さうすると私はこの命をどうしなければならぬのだらう？ほんとうに同じことだ！死なう。あゝそれでは敵打もしないで？何故しない？あゝさうだ、今こそ私はこんなことを言つてゐるけれども、これは私にも復讐することが充分に出来るのだといふことだ！あの夜の男はロドルフオだつたと言ふことが確實になつたならば、此心の中に起るものを私は請合ふことが出来るだらうか？あゝ！神様！私に發作的な憤怒の來ないようになすつて下さいませ！あゝ！ロドルフオ！カタリナ！あゝ！若しかしてさうだつたならば、私やどうしよう？ほんとうに私やどうしよう？私は誰を殺すだらう？あの人たちが、自分か？私にや解らない。

アンゼロ入り来る。

第三景

ラ・チスベ。アンゼロ。

ラ・チスベ 私をお召しになりましたか、殿様？

アンゼロ うん、チスベ。お前に話さねばならぬことがあるのだ。全くお前に話さねばならぬことがあるのだ。可なり重大な事件のことで。俺はお前にさう言つたことがあるな、俺の一生は、日毎良、日毎謀叛、日毎に短刀を見舞はれるか斧をくれてやるかなのだ。二言で、かうだ、俺の妻に密

夫があるのだ。

ラ・チスベ その名は何と申します？……

アンゼロ 俺たちが此處へ來た晩、妻のところにもつた男だ。

ラ・チスベ その名前は何と申します？……

アンゼロ それが暴露したといふのはかういふ譯なのだ。或男が、或る十人議會の間諜が……お前にまづ言つておかねばならないが、その間諜といふものは不思議な位置に立つてゐて、俺たち陸の知事たちと相對ひ合つてゐるのだ。彼奴等には俺たちに手紙をよこしたり、口を利いたり、またどのやうな關係であらうとも、俺たちの逮捕の任命が下るまでは俺たちに關係を結ぶことは、その生命にかけて議會から禁ぜられてゐるのだ。——さういふ間諜の中の一人の男が、今朝河岸で、アルチナ橋附近で斬られてゐるのが見つかつたのだ。それを助け起したのは二人の夜番の者だつた。決闘か暗撃か？それは解らないが、その警吏は二言三言しかもの言ふことが出来なかつた。その男は死んで了つた。不幸なことはその男の死んで了つたことだ！その男はやられた時にも、無論横取したのだらう、一通の手紙を保存する機智を失はなかつたらしい、その二人の夜番に託して俺の所へ持たしてよこしたのだ。事實その手紙は二人の男が持つて來た。それは或る男から妻へ來た手紙なのだ。

ラ・チスベ 名前は何と申します？……

アンゼロ その手紙には名前が書いてないのだよ。お前はその男の名を俺に尋ねるのかい？俺の當